

1995

大正十三年一月二十九日(第三種郵便物認可)  
昭和四年十一月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人編輯



十一月號

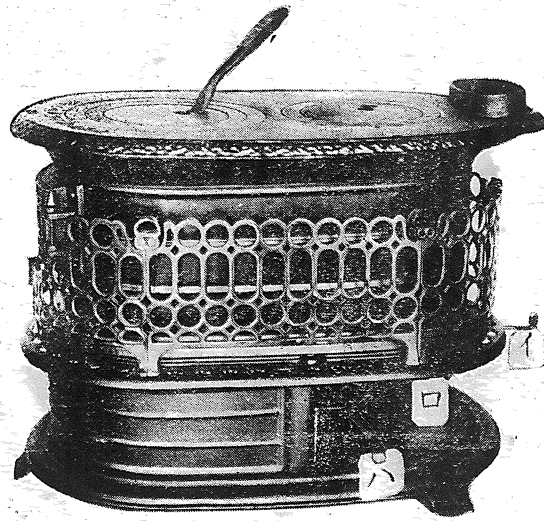
【號九十二百第】

茶園茶舖

# 富永式特許暖爐

歐米風の  
生活様式から  
我等の文化生活に  
ピッタリ適合して  
遺憾なき迄  
改造された  
眞に

革命的暖房具  
富永式暖爐



品造模るざら足もるす屈を指十  
す證を越卓の爐暖の此は出續の

比較は物の良否を鑑別  
する第一の捷徑なり!

組合事務所 京城府長谷川町  
朝鮮商工  
株式會社

京城出張所

電話本三三二六一六九

京城本町二丁目

發賣所 青々園茶舖

電話本一一一一番

## 五大特長

- 其一 燃料の一大節約  
一冬期中の煉炭一噸乃至一噸半
- 其二 絶へて灰塵飛散の患なし
- 其三 一般炊事に利用して尤も輕便なり
- 其四 飯飲きでも燒肴でも  
其四 毫も火災を起すの虞なし  
イクラ焚いても煙筒灼熱せず
- 其五 煙突掃除を繰返すの要渺なし



仁川酒造株式會社

於全鮮酒類品評會  
名譽賞受領

仁川酒  
會にて  
最高名譽賞



朝鮮博覽會  
會にて  
金牌受領

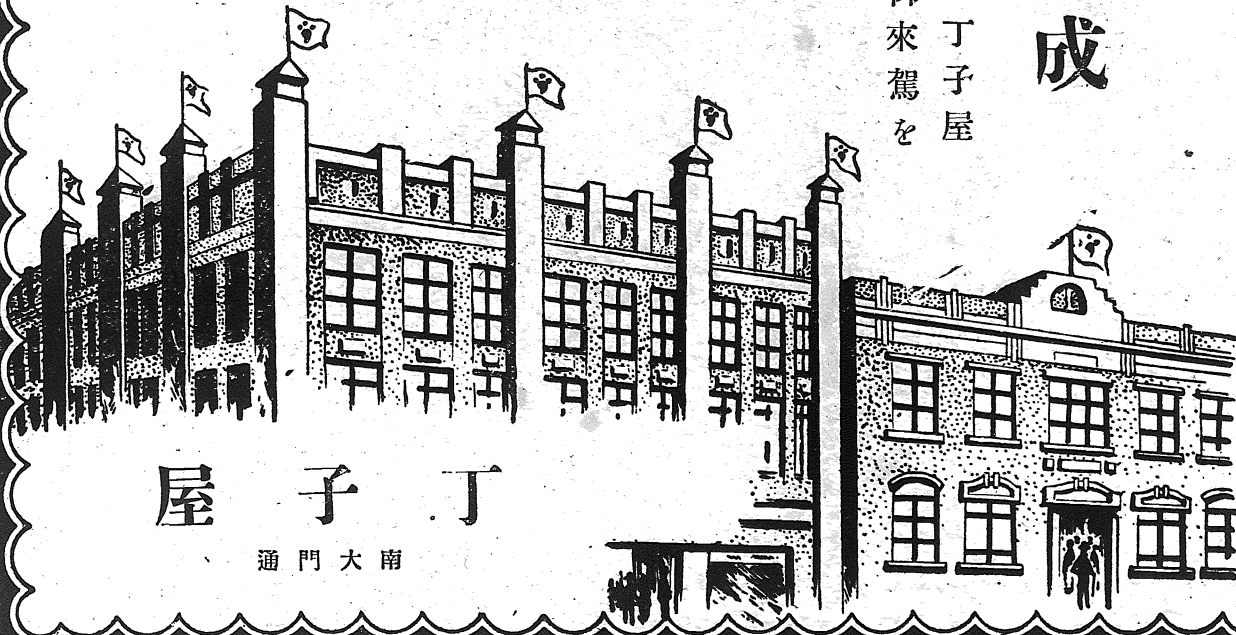
仁川朝日釀造株式會社

# 新館落成

面目一新の丁子屋  
どしどし御來駕を

「明るい店」として  
御客様の氣分を尊重……

「買ひよき店」として  
一層皆様の丁子屋  
たらしむべく努力致して居  
ります



## 丁子屋

南大門通

# 生氣嶺炭

鮮内有煙炭中、その品質發熱量第一なること  
今回の朝博發表の分析表に依りて證明せらる

## 價格

京城市内配達實共 一噸 一五圓八〇  
同 半噸 八圓〇〇

朝鮮中央總發賣元

小林藤商店石炭部

京城明治町一ノ一〇

## ストーブ

### 協和型 センター型

各種ストーブにつき比較研究をな  
すこと多年、最も優秀なるを『セ  
ンター型』及『協和型』なりと確  
信し博く江湖にお勧め致します

## 價格

協和型	センター型
一號	一號
二號	二號
三號	三號
六疊用	六疊用
廿疊用	十八疊用
三十疊用	廿四疊用
四〇疊用	四〇疊用
五〇疊用	五〇疊用
六〇疊用	六〇疊用
八〇疊用	八〇疊用
一〇〇疊用	一〇〇疊用

京城明治町一ノ五四

櫻井秀專商店

電話本三〇〇二

内地への御土産  
お手近の御贈答品  
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和高麗焼  
漢陽高麗編  
三和焼

製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同本町二丁目

電本五五四

# 均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獣臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります均質本位でありますから値段の競争をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用

陸軍衛戍病院御用

京城府各病院御用

## 平山政十

電話光化門一三三番  
京城府蓮建洞二八



新地各種

仕立鄭寧

既製品も

いろいろとり

そろえ居候

京城府鐘路一丁目

濱洋服店

電話光化門二四四

創立大正十一年九月  
資本金五百萬圓

朝鮮火災海上  
保險株式會社

社長 河內山樂三  
(京城府明治町二丁目)

金剛煎餅  
金剛羹  
金剛山  
金剛饅頭

金剛山產松實花應菓

# 金剛飴

## 龜屋商店

京 城 本 町  
二 丁 目

電 話 二 七 十 七 番  
本 局 四 七 五 番

金剛柏子  
(松の塩炒り實)  
金剛おこし  
金剛柏子菓  
(朝の餅菓子式)  
金剛しるこ

# 看板裝飾專門

模  
パ  
セ  
宣  
ア  
特  
ノ  
ツ  
傳  
一  
設  
マ  
ト  
塔  
手  
館

# 早川裝飾工事務所

早川天望

京府城黃金遊園內

電話本局二四七六番

宮内省御用達

# 菊正宗

發行所 東京府本町二丁目  
元賣店 前田商會株式



# 次 目 號 月 一 拾

李 文 長……………總督府總務課	松 田 學 陽氏(二)
儒 し い 秋……………朝鮮新聞社	野 崎 眞 三氏(三)
與 良 さん と 私……………朝鮮殖産銀行	植 野 勳氏(四)
傷 を 養 ひ つゝ……………總督府社會課	神 尾 弑 春氏(五)
放 言……………辯 護 士	宮 崎 毅 氏(七)
老 ひ 行 く 友……………倭城臺科學館	重 村 義 一氏(八)
伊 勢 神 宮 と 東 照 宮……………養 正 高 普	磯 部 百 三 氏(九)
や ま と 歌……………	國 風 會 京 城 支 部(二一)
木 村 重 成 の 夫 人……………總督府學務局	福 士 末 之 助 氏(二二)
朝 顔 を 見 る……………朝鮮銀行	古 田 廉 三 郎 氏(二三)
分 化 の 原 理……………京城法專	木 村 常 信 氏(二四)
朝 博 十 景……………遞 信 局	津 田 常 男 氏(二五)
鮫 鱒 の 正 體……………城 大 文 學 部	松 月 秀 雄 氏(二六)
草 の 實 を 聽 き つゝ……………旭 町 小 林 病 院	平 山 義 雄 氏(二七)
展 望……………朝鮮鐵道	福 原 俊 九 氏(二八)
蛇 の 皮……………平 壤 府	青 木 戒 三 氏(二九)
京 城 の 交 通……………大 豫 科	戒 能 義 重 氏(三〇)
繪 の 味 酒 の 味……………洋 畫 家	佐 藤 九 二 男 氏(三一)
亡 友 を 憶 ふ……………南 山 町	山 口 太 兵 衛 氏(三二)
征 名 の 名 人……………鐵 道 局	足 立 丈 次 郎 氏(三四)
無 名 の 名 人……………鐵 道 局	鉦 鹿 晴 太 郎 氏(三五)
雨 山 先 生 の 詩……………總督府學務局	加 藤 濯 覺 氏(二六)
明 盲 亂 談……………三 麥 戴 寧 鐵 山	高 橋 昇 氏(二七)
女 の 髮 の 長 さ……………南 米 倉 町	今 村 廣 嗣 氏(二八)
晴 天 の 朝……………中 央 朝 鮮 協 會	角 田 廣 嗣 氏(二九)
品 川 雜 記……………總督府內務局	片 岡 辰 之 助 氏(三七)
女 澤 の 茶 味……………城 大 法 文 學 部	長 野 利 武 氏(三八)
死 刑……………櫻 井 町	天 野 鶴 子 氏(三九)
鶴 ヶ 丘……………東 四 軒 町	德 野 正 之 氏(四〇)
言 葉 と 環 境……………朝鮮鑛業會	吉 野 眞 士 氏(四一)
堀 出 物 語……………京城日日新聞社	德 野 眞 士 氏(四二)
留 置 場 の 思 出……………京城日日新聞社	森 二 郎 氏(四五)
追 悼……………城 大 醫 學 部	梶 村 正 義 氏(四六)
支 那 青 年 の 手 紙……………東 亞 法 政 新 聞 社	田 村 直 義 氏(四七)
思 想 に 就 て……………京城 中 學 校	關 本 幸 太 郎 氏(四八)
壹 白 里 海 岸……………朝鮮 銀 行	長 谷 井 市 松 氏(四九)
社 會 完 成……………南 大 門 小 學 校	山 本 吉 久 氏(五〇)
高 架 索 の 囚 人……………朝鮮 史 編 修 會	瀨 野 馬 龍 氏(五一)
街 頭 雜 感……………京城 地 方 法 院	加 藤 昇 夫 氏(五二)
空 氣 枕……………京 取 市 場	岡 部 駿 策 氏(五三)
所 感 の 一 片……………京城 女 子 技 藝 校	井 上 要 二 氏(五四)
近 時 ユウモア片々……………元 町 小 學 校	片 岡 喜 三 郎 氏(五四)
私 人 秘 話……………大阪 日 報 支 局	夔 の 會 同 人 氏(五五)
新 聞 人 秘 話……………京城 日 報 支 局	楠 五 郎 氏(五六)
ある 朝 の 談 片……………京城 日 報 支 局	笠 神 志 都 延 氏(五七)
古 樂 を 見 つゝ……………野 田 醬 油 支 店	市 山 盛 雄 氏(五八)
奈 良……………黃 海 道 師 範	佐々木清之丞氏(六〇)

# 李文長

松田學鷗

(總督府總務課)

○牧臺仙の『一宵話』に『朝鮮の易者』と題して、次の如きことが書いてある。

慶長の頃、朝鮮降を乞ひしにより、彼國の俘どもかへし遣はされしに李文長はいかゞして此地にとゞまりしならん、甲寅の歲大阪に亂おこらんとする時、城の殿主の上、火燭忽ちもえ上る城の内外驚きさわぎ、人かけ走り救はんとすれば、いづくに火ありともみえず、人靜まれば又もえ上る。かゝる事度々ありしにや、片桐主膳正に命じ、李文長をして占はしむ、文長焦氏が易林によりて、卦を布けば、良が謙に變ぜり。良益尋兵爭強。失其貞良。敗之穀鄉。釜子孟明不謙。人面鬼口。長舌利齒。劉破胡璉。殷商絕祀。龍城の始めより終り迄、此占に露違はざりしは、いみじき易者なりけり、焦氏の易は、昔より占の術に用ひし事多からぬを、文長如何して傳へけん、雖小道有可觀者とは、此等をやいふらん。此文長書法にも又達したり、中槽の孝經を見しが、いと見事なりき。○予はこれを読み極めて珍らしく感じた。而して此の李文長の事蹟を知らんとせる際、偶ま『先哲叢談』を読みしに、朝山素心、即ち意林庵の傳中に

朝鮮の使李文長なる者至る。乃ち見えて其の説を受けたり。とあるのを見た。彼れには俘と云ひ、此れには使と云ふも、恐らく同一の人であらうと思はれた、併し確め得ざるを遺憾としてゐたのである。

○然るに頃ろ寛永元年通信副使として江戸に行いた姜弘重の『東槎錄』を讀むと、其の十一月廿七日江州守山に宿せる記事中、次の如く書いてあるを見たのである。康遇聖(上通事)言ふ、昨夜大津の人と接話す一人の言へるあり、朝鮮人李文長なる者、方さに倭京にあり、卜を賣りて食し被擄人等を恐喝して曰ふ、朝鮮の法日本に及ばず、生計甚だ難く、資活未だ易からず、本土に還歸するも少しも益する所無しと、萬端好ましからざるの語を以て遍ねく遊説を行ひ、以て其の向國の心を絶ち、被擄人皆文長の誘ふところとなり出で去るの意無し、且つ其心を用ゆること此の如し、故に使臣の來るを聞き或は尋問を慮かり、隱匿して出でずと云ふ。所謂文長なるもの、未だ何れの地より來るを知らざるも、而かも此の如き奸細の輩、事を異國に用ふ不幸の甚しき也可愼云々。

これにて『一宵話』と『先哲叢談』にある李文長は同人であり、又使では無く俘虜であることも判断が

ついた。

○意林庵は、處士を以て昇殿を許され、後光明天皇に易を進講し奉つた程の碩儒であつた。但、其詩文は、小瀬甫庵の著たる『太閤記』の跋の外、傳れるものは無いとのことだ。若し其の詩文でもあらば李文長の事蹟も窺はれるであらうに惜いことだ。

○朝鮮では壬辰役頃までは、餘程易が研究されたいしい、俘虜の中にも易に委しい人があつたやうだ。易を進講する爲めに昇殿を許された意林庵が、俘虜たる李文長につきて得るところありしと云ふのは誠に興ある話だと思ふ。同じく俘虜たりし姜麗隱に藤原圃高が經書につきて益を得たのと共に傳ふべきことであるまいか。予は尙ほ此の李文長の事蹟を調べたいと思つてゐる。

### ◆番茶を啜る

漢江漁郎

○辯護士の堀直喜氏は、外から這入つて、今の堀家を繼いだもので、その生家は、高本氏。高本氏……といふは、熊本の名門で、數代前に、有名な紫雲先生を出してゐる。

○ズツと先祖は、朝鮮から歸化したもので、その高本といふは、高麗の高と、日本の本とを、つぎ合せたもので、堀さんに從ふと、『日鮮同化は、問題でないヨ。我輩がその活ける證據さ』

○辯護士としては、第一流だが著と將棋とは、妙に弱い。だが御本尊は、『これがおかしい……君に負けるとは、今日はヒョンな日だね、君』

慌たしい秋

側のダンスには流石に見應のあるものがあつた。妓生の肢體そのものがダンスに相應しい、調系もあ

意味庵、幼より儒に志し、初め  
五山の長老に學ぶ、長ずる比、

にある李文長は同人であり、又使  
では無く伴慶であることも判断が

に負けるとは、今日はヒヨンな日  
だね、君」

# 慌たしい秋

野崎眞三  
(朝鮮新聞社)

側のダンスには流石に見應のある  
ものがあつた。妓生の肢體そのも  
のがダンスに相應けしい関係もあ  
る、之も舞踊界の先進の手で幾多  
の指導と修正を要するが妓生のダ  
ンスだけは喃み育て、行きたく思  
ふ。本券番も新町券番も殊勝な心  
がけには同感するが再考三考を要  
しはしまいか。

## ◇うわさ雑記

北漢山人

以上、權限問題など論議の餘地  
はない。兎もすると役人け黨人出  
身者を莫迦にしたがる、黨人だか  
ら何も分らないと非難するが大  
臣の印綬を受けた以上は大に變  
りはない、役人の狭量潔癖も困る  
場合があるものだ。

◇  
此秋こそは慌たしかつた。博覽  
會開催のために我々新聞人は東奔  
西走と云ふ言葉通り奔命に疲れて  
多を迎へた、閑院宮殿下の御來鮮  
松田拓相の初度巡視を初め各種大  
會に名士碩學は陸續と見へた上に  
日本新聞協會大會、同業の各地新  
聞記者の入城等々で迫けるゝもの  
の如き日が相次いで慌しい秋は遂  
に過ぎ去つた。幾分落着いた自分  
となつて初冬の天空を眺めてゐる  
と種々な思出が幻しの如く浮んで  
来る。

◇  
松田拓相の大分縣人會歡迎會が  
京城ホテルで開かれた晩、拓相は  
非常な機嫌で赤貧洗ふが如き少年  
時代の思出が話し出され、小學教  
育も碌々受けられなかつたと告白  
した後に古今の聖賢英雄で正規の  
高等教育を受けたものは少い、苦  
學獨學克己勉勵が人格完成への第  
一步と喝破するや縣人として出席  
中の總督府の小河農務、上内圖書  
後藤林産の諸課長いづれも微笑笑  
……。一面の眞理として同情も出  
来る。

◇  
日本新聞協會大會は清浦奎堂伯  
以下日本の新聞界の精銳を網羅し  
た大デモストレーションではあつ  
たが單なる御祭騒ぎに終つたので  
あるまいか、我々はモツと新聞の  
製作販賣に關し組織的に且つ科學  
的に研究の必要に迫られてゐる。  
従つて大會は各専門部會を組織し  
眞剣な討議研究を重ねて新聞の大  
使命達成に邁進すべきものではあ  
るまいか、新聞大會のみでなく大  
會の大部分が所謂御祭騒に墮して  
ゐなかつたらうか。

◇  
博覽會演藝場の各券番の出演け  
夫々絢爛華美、大喝米を博してゐ  
るが本券番の朝鮮十景は俄仕込の  
振付では長きに過ぎる、唄、作曲  
振付共に立派ではあるが古典藝術  
の持つ乾からびた美しさだけで大  
衆は背脊を觀てる氣がする。新  
町券番の朝鮮十景は此點では救は  
れてゐる。洋樂を取入れ作曲も大  
衆的である、が一面では雜然とし  
た混雜さのみで、リズムカルな躍  
動がない、照明を呼び着飾つた一  
種のヤスゲームに過ぎまい。妓生

◇  
松田拓相の拓省と總督府との權  
限其他に關する明快な闡明に對し  
總督府内では種々に論議され甚だ  
しきは拓相の曇言と指斷したもの  
もあつたが拓務省官制に總督府の  
事務を統理する云々と明示してあ

○京電の武者さんが、桑港に上  
陸いたしました。  
○その晩、桑港の名士が作つて  
ゐるロータリークラブに出席せよ  
とのことで、奮つて列席いたしま  
した。  
○ところが、あつちの會員は、  
銘々ニックネームを所有し、人も  
それを呼べば、自分も「拙者は、  
斯ういふものだ」と、公然とそれ  
を名乗る。

○ソコで、武者さんが出席する  
と、方々から「お名前は？」と聞  
かれる。グツとつまる。心の中で  
鴨綠江にしゃうか、支海洋にしゃ  
うか、それとも旭町、南山町……  
いろ／＼……考へたが妙案も浮か  
ばぬ。とう／＼度胸を決めて「日  
本の紳士南山」とは、拙者のことで  
御座る」とやつた。人々は、「そ  
れは／＼」と大喝米。

○武者さんコ、で、變へ名の  
一ツ位必要なことを、しみ／＼感じ  
たといふが、社内では遠うの昔、  
アノ温厚の長者に「眼玉さん」と  
いふ立派なニックネームを、奉呈  
してゐるのであつた。(京日、落  
穂から)



# 與良さんと私

植野 勳

(殖産銀行)

【四】

去る九月二十七日の京城日報朝刊に『金剛の愛着』といふ寄書が掲載せられてゐたのに気がついて讀まれた人は恐らく少からうと思ふが、讀まれた人は必ずや其の寄書の主の『與良松三郎』といふ珍しい姓に一寸興味を感じられたらうと思ふ。

九月二十二日の朝である。私は新聞協會の大會列席者の宿所劃の載つてゐる朝鮮新聞の切抜を持つて與良さんとまつてゐる筈の天真樓を訪ねた。處が宿の女中はそんな人はとまつて居りませんといふ。然し此の通り宿所劃に出てゐるぢやないかと押問答をしてゐるうちに、やつと其の朝金剛山から着いたお客さんが與良さんだといふことが分つた。成程まだ宿帳にも名前が出てゐないのだから無理もない。さうしてやつと與良さんに會ふことが出来た。

與良さんに會つて私が初めて發した言葉は『あなたが名古屋新聞の與良さんですね』といふのであつた。それほど與良さんの顔を私は見忘れてゐたからである。與良さんも無論私の顔は見忘れてゐるお互に途中で會つたら全く分りませんねと話したことである。それも其の筈である。十六年前に一度會つたきり其の日再會したばかりなのだから。

一

二

話は十九年前に遡る。明治四十四年の夏である。第一高等學校を卒業したばかりの私は當時共に讀書會を組織してゐた友人伊原元治大澤章、川村貞四郎、田中耕太郎の四君と共に、ワイルヘルム・フォン・キューゲルゲン (Willehn von Kuegelgen 1802-1867) の原著 Jugendinnerungen eines alten Mannes の翻譯に着手した。著者は十九世紀に於ける獨逸著名の畫家であつて、老後其の十九歳までの出來事を書き綴つた自叙傳である。千八百七十年に始めて公にせられ、獨逸の家庭に於ける最も好き讀物として廣く讀まれたものであるが、偶ま私たちが高等學校の學生時代恩師岩元禎先生から此の書の一部の教授を受け、興味深く感じたのと且つは恩師の薫陶に對する感謝を記念すると共に自分達の勉強にもなるといふ様な譯で、翻譯を始めたのである。何しろさういふことには全く無經驗の者同士のことゝて其の夏の休を利用して各分擔の部分を翻譯したものの文章など少しも統一がとれず、また甚だまづいものであつた。そこでお互に更に推敲に推敲を加へる事にし森鷗外先生のお宅へ紹介もなしに皆でおしかけて行つて親しく先生から教

を受けて、原稿全部一應通覽して頂いて一部御訂正を蒙つたりして稿を改めること何でも三、四回位に上つたと記憶する。無論無名の學生のことである。うまく出來上つたところで出版を引受けてくれる人があるかどうか分つたものでない。然しそんな事はどうかかなるだらうと氣長に構へて、大學時代約三年間、暇を作つては此の仕事をしたのである。其の間に同志の川村は都合があつて仲間から脱することゝなつた。永い間のことだから同志四人の間には色々な出來事があつた。お互に就職口に影響のある大學の學科の勉強もせねばならぬところへ、餘計な大仕事を背負つたのだから内心途切斷念したいと思ふこともないではなかつたが、四人互に牽制してとらへて大正三年の秋頃一先づ脱稿するに至つた。此の間の四人の間の出來事もうまく綴ればヘタな小説ぐらゐの面白い讀み物が出來ると思ふが、それは與良さんに關係がないから茲には述べないことにする。

三

此の私達の仕事を聞きつけて一肌ぬがうと名古屋から東京へとび出して來たのが初めに述べた與良さんである。而して此の翻譯の出版を引受けませうといふ。何でも其のとき新橋の近くの牛肉屋ですき焼を御馳走になりながら私ども四人と與良さんとは心おきなく話を進めたことを覚えてゐる。何しろ其の時分は私どもは單純な理想にもえてゐた時代である。生れて初めて出版する書物であるから装釘、用紙、寫眞版等其の當時考へ得られるだけ完全なものにして出し度い、だからそれ等のことは全

部我々に任して貰ふこと、其の代り我々は原稿料を要求しない、また書物の賣場めについても十分我々で努力するといふやうな條件で

易と愛人の

せんねと語したことである。その  
も其の筈である。十六年前に一度  
會つたとき其の目再會したばかり  
なのだから。

部我々に任して貰ふこと、其の代  
り我々は原稿料を要求しない、ま  
た書物の賣場めについても十分我  
々で努力するといふやうな條件で  
出版に着手することになった。そ  
こで我々は友人で其の頃文科大學  
生だった今の美術學校教授矢代幸  
雄君に裝釘を依頼し、關係寫眞版  
は全部挿入することとし、書名を  
『生ひ立ちの記』として遂に大正  
三年二月に發行するに至つたので  
ある。三年間の勞作の結果が一卷  
の書物に纏つて東京の各書店の店  
頭に並べられたときの我々の喜び  
は如何ばかりであつたか。私は今  
も其の時の嬉しかつた氣持を忘れ  
ることが出来ない。時の第一高等  
學校長新渡戸先生の序文を巻頭に  
掲げておいたが、何しろ無名の貧  
乏書生だちの作である。與良さん  
に損をかけては相濟まぬと思つて  
新聞廣告、チラシ等にあらゆる知  
懸をしほつて宣傳文を草し、勸誘  
狀の送り先まで我々で書いて發送  
したものである。幸に書物の定價  
も全くの實費主義で、千頁に餘る  
大冊を、たしか一圓六十錢かで賣  
ることにしたり、宣傳も相當きい  
たりした爲めか、一年ばかりの内  
に兎に角第一版一千部を賣り盡し  
て與良さんには大した損もかけな  
かつた様に記憶してゐる。或はい  
くらかの損はかけたのかも知れな  
いが、會計の後始末をしてくれた  
與良さんとはとう／＼仕舞まで金の  
ことは何にも我々に話されなかつ  
たので、我々も、のんきな話だが  
本當のところ與良さんがどれだけ  
損をされたかよく知らないのであ  
る。然し儲けのなかつたことだけ  
は確かだ。

四

先生のお宅へ紹介もなしに皆でお  
しかけて行つて親しく先生から教  
を受けたたり、原稿全部一應通覽し

# 傷を養ひつつ

## 神尾 式 春

水原の驛に急くと早打の自動車は飛ぶ塵詞まつし  
ぐら  
ひたはしるわれらが前に濤ありと氣付きし刹那あ  
めつち知らず  
血に染みし助手をのせたる破れぐるま塵々として  
並木道行く  
城門の裏は見ゆれ破れ車驅りて入らむをかこつ運  
轉手  
魔の如く荒れし車を水原の青丹の驛の前に見出で  
つ  
大き宮迎へまつらく淑き人にまじりてあれば傷も  
知らざり  
みつとめを半ばはたして傷知りぬ待合室の長椅子  
により  
びつこひきよちよちのぼる階段のそのうるはしさ  
今にして知る  
手當終へ歸りてこやる我が家のしつけさはよし今  
は休まん  
傷いたみ目ざめしまだきラッパ鳴る青年團の集る  
らんか  
ギブス當てし足やうやくにのびしつち起信論讀む  
秋晴の縁に

釘、用紙、寫眞版等其の當時考へ  
得られるだけ完全なものにして出  
し度い、だからそれ等のことは全

其の後幾度か再版を出さうとい  
ふ講が我々の間にあつたが、結局  
實現に至らず數年を経過した。と  
ころが丁度大震災の前頃岩波書店  
主の岩波茂雄氏が此の書の出版を  
引受けたいといふことを申し込ん  
で來た。それで與良さんに手紙で  
此の書物の紙型の讓受を交渉した  
ところが快く承諾してくれた。そ  
こで愈々再版にとりかゝらうとす  
るところへあの震災である。紙型


も何も全部烏有に歸して了つた。  
それでも岩波氏は斷念せず、矢張  
り出版したいといふことであつた  
ので之を機會に以前の書物の誤譯  
などを訂正し、書名も原著名に忠  
實に『一老人の幼時の追憶』と改  
めて、大正十四年十二月に岩波書  
店から再び出版されたのである。

五

話は之れだけである。十六年前



に會つたときの與良さんは今の與良さんよりいくらか肥満してゐた様だが、元氣の良いところは今も昔も變りがない様である。新聞協會の大會に朝鮮へ來てゐながら、大會をすつぽかして金剛山へ夜中に登つたりして奮勇ぶりを發揮してゐるあたりは、矢張り與良式である。然しながら此の間に於ける我々同人の境遇を思ふと可成りの變化がある。伊原は大學を卒業して職を内務省に奉じ徳島縣屬たること一年ばかりにして病を得、それが原因で退官したが、大正七年秋風と共に雄志を懐いたまゝ、永久に此の世を去つて了つた。彼は我々の内一番の年長者でもあり、人を統御する才能にすぐれて居つて常に我々をリードする様な立場に在つた。彼の熱心がなかつたならば或は此仕事は中途に挫折してゐたかも知れぬと思はれるのである。大澤は今九州帝國大學教授で國際法を擔當してゐる。田中は東京帝國大學教授で商法を教へてゐる。尙は川村は先達まで警視廳の保安部長を勤めてゐたが、今は山形縣内務部長の職に在る。大正十四年に岩波書店から此の書が再び出版されるに當り誤譯の訂正から内容の改良を一手に引受けてくれたのは田中である。再版の巻頭に載せた田中の序文にもある通り、此の書は世の中の經驗を積んだ一「老人」たる著者が幼時の追憶にことよせて其の宗教、哲學を最もニューモアに富んだ筆致を以つて興味深く書き綴つたものであつて、何人が讀んでも趣味と實益を覺えるであらう。今これを讀んでみると學生時代には分らなかつた深い意味が其の平易に書かれた文章の隨所に發見される。大人にも子供にも



**總督府 專賣局**

精製の 精製  
に限りませ

發賣元  
**貴生堂藥品店**

京城本町二丁目  
(電本一三八番)  
(振替七六一番)

面白い所謂健全な讀み物といふのは斯ういふ書物をいふのであらう。與良さんに會つて昔の書生時代の追憶した序に一寸自分達の書物の提灯を持つて筆を擱くことにする  
(昭、四、一〇、六稿)

◆世の中雜記

三木一彦

○妙心寺の和尚後藤瑞巖さんが内地へ歸る。……岐阜市近郊の、以前の舊徳のお寺へ去ぬる。  
○大分久しい間、京城へ錫を留め、知識階級の間、禪を普及させること多大、『それア殘念な事だ』と、一同ガツカリしてゐる。  
○後住は、華山大義といふ和尚さん、もうとツくに、寺に着いてゐる。この人も後藤氏に劣らぬ有徳の人で、出身は、京都大學……但し小さい時から南禪寺に牛長しみつちり雲水の修業を積んでゐるといふ。  
○この間、内地から着任すると

いふので、大勢驛へ迎へに行つた一等か？二等か？と、氣をとられてゐると、和尚從者一名を從へ、ノコノコ然として、三等から出て來た。『遠路御苦勞に存じます』  
『フーン、朝鮮は、えゝ天氣ぢやノウ』

○前消防署長の小龍さん、在官時代は、謠曲の稽古に行くにも、制服、制帽。チャーソンと來ると、早速馬乗提灯へ火を點けた。『今は子守(お孫さん)ので、お樂ですネ』といふと、『イヤ々々、昔は物を思はざりけり。君、一日用なしの、子守り専門になつて見給へ』

○元町小學校の片岡校長、その隨筆『神仙爐』を出版する事になつて、四十日といふ約束で、或る印刷屋に頼んだのは、いゝが、約束期限は、遠うに過ぎ。六十日、八十日が來ても、工程遅々たり、緩々たり。『校長、いつ出來ます』  
『あゝ、あれですか……サア』

放 言

策を鮮明にし國家國民を本位として劃策力行しつゝあり黨利黨略金





# 老ひ行く友

重村 義一

(倭城臺科學館)

「八」

親愛なるS君

美事なる君の寫眞をお送りして  
頂いて誠に有難う。何時お寫しに  
なつたか知りませんが君の年にし  
ては非常に若く頗る健康相に見え  
て居ります。

封中の自分の寫眞は八年前に寫  
したものです。然し餘り變つては  
ゐない積りですがどうせう？。  
友よ！

其の後如何に暮らし居らるゝや  
御家族は満足に御生育の事と察し  
て居ます。刻下歐州の状況は特に  
ひどうご座います、父親にとつて  
は如何にその息子を教育すべきか  
が一大難問です。あらゆる職業に  
生存競争激しく實に慘憺たるもの  
です。

私には子供もなく妻は五年前に  
永眠致しました。これは此の劇甚  
なる生活難の中にあつては悲しむ  
べき幸福であるかも知れません。  
私が住む「サルタツシュ」は「ブ  
リマス」の郊外であります。君の  
會遊の地なりや、私此の地に居  
を下しサ、ヤカなる家を求めまし  
た。永久に棲ふ積りです。清澄な  
小河に沿ふて手頃の花畑がありま  
す。丁度一人で處理するに適當  
な廣さです。在官時代の友人はそ  
の後どうなつたか一向に會ひもし  
ません。唯エドワード・Cは今大  
佐に階級して海軍省に勤めて居ま  
す。

私は今大昔の京城を追懷して居  
ます。勿論それは日本とならない  
以前の古い、京城の經驗を喚起し  
て居るのに過ぎません。今は大變  
な變りかたと想像して居ます。其  
の時仁川に碇泊しましたが今日再  
びその埠頭に立ち得たと假定した  
らそれこそ「リップバン、ウイン  
クル」の語、そのまゝでありませ  
う。

私は園藝に釣に繼に更に讀書に  
と其の日を暮して居ます。  
左様なら、友よ

君の永久の友なるM・V

これは二十餘年前英國にて交際  
し爾來年始狀のみにて十年一日の  
如く通信せるロンドンの醫科大學  
出身の英海軍の軍醫官からの手紙  
である。年齢は今年五十八歳で  
もあらう。二、三年程前の手紙に  
は一眼の明を失ふて田舎に退いた  
が、射撃にも、讀書にも差支ない  
と云ふことであつた。其の時も戰  
後の英國は軍事公債の跡始末のた  
めに十圓に一圓二十五錢の所得稅  
で迎も東洋にお尋ねする餘裕がな  
いと附加へて書いてあつた。

願れば彼も私も若かりし二十年  
前のことである。當時英國大西洋  
艦隊の一小巡洋艦に私は彼と共に  
アイルランド警備の任務で勤務し  
て海上の苦樂を共にしたものであ  
る。全艦隊に日本士官としては私一

人限りだつたので、艦隊に乗り込  
んだ當初には、お互に距てもあり  
氣兼ねもあつた、併し艦長始め獨身  
もの士官の群のこととて、何時  
か心も溶け合ひ易く、難航海の後  
港に入りたる時などは、三々伍々  
士官連が連れ立つてバー・レスト  
ラントを呑み荒したものである。  
中にもV軍醫少佐とは一見舊知の  
如く善きも悪しきも常に彼と行動  
を共にしたものである。

あるとき艦の砲術士官と彼と私  
と三人連れで軍港の芝居に行つた  
歸りに、シタタカウキスキーの數  
を重ね、三更月を踏んで軍港の門  
に歸つて来た。警備の查官は「士  
官」と云ふ聲に眼をこすりつゝ正  
子に鎖したる鐵門を十字に開けて  
くれ撃手の禮をした。英國海軍の  
規定では士官が深更に門を開かせ  
て歸艦する時には備付けの帳簿に  
署名する事になつてゐる。處が眞  
夜中歸る連中は大體は酔漢で名前  
も出たためて只單に署名の手續を  
するのみである。其の夜も膨大な  
る帳面が查公見張の大時計の下に  
展開してあつた。三人の内甲は  
ナポレオンと書いた。乙はウエリ  
ントンと書いた。私は又一種の新  
聞心からか、此の二人にまげめほ  
どの大人物をかつき出してやらう  
と、大きな文字で「太閤秀太郎」  
と書いた。

查公莞爾として之を眺め

「グールドナイト、グレート、ゼ  
ントルメン、サー」

三人は醉眼朦朧の中にも查公の此  
の眞面目くさつたエモアに抱腹  
絶倒したことを今もありくと記  
憶してゐる。その老友からの手紙  
に私は無量の感慨を禁じ得ない。  
軒端に蕭々たる秋の雨が暗く冷  
たく降りつゞいてゐる……。

# 伊勢神宮と東照宮

といふ途方もない多人數になつてゐる。  
△伊勢神宮は天武天皇以來慣例

# 伊勢神宮と東照宮

## 磯部百三

(養正高普)

佐に進級して海軍省に勤めて居ます。全艦隊に日本士官としては私一

軒端に蕭々たる秋の雨が暗く冷たく降りつゞいてゐる……。

といふ途方もない多人数になつてゐる。

△私付この春内地旅行をして、伊勢神宮と東照宮とに参拜し、多少の感想を持つてゐる。殊に本年は神宮のおめでたい御遷座式年に當つてゐるので、こゝにその一端を書いて見ようと思ふ。

△伊勢神宮と東照宮とを比較對照すると、そこに非常な相違點があり、そこに面白い結果が生れるのである。

△先づうち見た所の形式から言ふと、神宮のお屋根は茅葺であり東照宮のそれは銅瓦本葺である。神宮の一切は白木造であり、東照宮は漆塗にあらざれば金箔であり彫刻にあらざれば繪畫である。△以上は極めて大ざつばな客觀的の見方であるが、たゞこれだけでも神宮は素朴で、東照宮は華美であることは明かである。

△今筆のついでに東照宮に於ける建物の工費から調べて、寛永十三年造營奉行秋元泰朝の家に傳つてゐる日光山東照宮造營帳に記されてある總工費を假に今の金に見積ると、實に金二千七百三十六萬六千五百圓の巨額になる。『東照宮の社殿門廊等一切の建坪を計算すると、僅かに八百二十五坪で東京驛の建物の三分の一だ』とは伊東工學博士の評語であつて、總建坪は九百坪足らずである。してみると、一坪平均三萬三千七百七十圓になつて、これさへあれば立派な大講堂が造られ、小さい學校なら

一校舎が完全に建つのである。

△次に伊勢神宮の工費を申せば明治四十二年度第五十七回の御造營國庫支出金が約七十餘萬圓といふことである。そしてこれだけあれば内宮外宮から別宮攝末社、それに鳥居、大橋まで建つ譯である尤も第五十八回即ち今度の御造營費は時勢も變つてゐる事ゆゑ、これだけでは元より足りる筈もあるまいが、だゞ九坪餘りの陽明門だけに百十二萬七千三百七十六圓といふ莫大もない金を懸けてゐるのに比して、何んといふ小額なことか。

△更に續つて御造營の期間を申せば、伊勢神宮は先づ山口祭を行ひ、木曾山から木を伐り出してより御遷座まで約八年かゝる例になつてゐるのに對し、東照宮は僅か一ヶ年と四ヶ月で竣功してゐるといふことは實に驚くべき話で、同時に如何に多くの工費と、多くの大工や人夫を使用したといふ答案が、自然的に得られるのである。

△東照宮の工費の事は既に申し述べたから、こゝには参考までに工事に與つた延人員を調べてみると、やはり秋元家の造營帳に、  
大工 百六十八萬六千四百人  
金箔師 二萬九千七百五十三人  
人夫 二百八十二萬五千四百人  
合計 四百五十四萬一千二百三十七人  
三十八

△伊勢神宮は天武天皇以來慣例となつて二十年毎に御改築になるのであるが、東照宮は寛永十三年のものが今日の大部分を占めてゐることは事實である。寛永十三年は今から二百八十二年前だからこれを神宮同様二十年目に改造したものと假定して、ざつと十四回になる。すると一回が平均二百萬圓許りかゝることになつて、神宮の七十餘萬圓の約三倍に當る。その上二千七百三十六萬六千五百圓の前拂をしてゐるのだから、利子を計算したら問題にならぬ金高になる譯である。

△右に述べた所は修繕費を除外したものであるが明治三十二年から昭和二年までの二十九年間だけで東照宮で費した修繕費は六十四萬二千六百八十九圓餘といふ事が當社の記録に見えてゐる。さて以上は各方面から見た相違點であるが、私の面白い結果といふのはこれから生まれてくるのである。

△東照宮では月日がたてばただ修繕費が年々夥しくかゝるのでその一部にあてるべく、從來二荒山及び輪王寺と三角關係を作つて拜觀料を九十錢取つてゐたのを高松宮司の時に大英斷を以て五十錢に減額した。然るに同宮司が朝鮮神宮へ榮轉すると、間もなく一躍して一圓に値上げしたのである。そして拜觀券を賣はない者は唐門内へは絶對に入れない事にした。△以上のやうな拜觀料を取る所から参拜人の多くのものはいつの間にか見物人になつてしまつた。言ひ換へれば東照宮は見せ物扱ひにされるやうになつたのである。その一例を擧げれば近來唐門内の



拜殿へ昇つても首巻や外套を取らずきよく見廻してゐるものが多くなつて来たさうである。日直の神職などが見るに見兼ねて注意すると、中には『俺が見料を出してゐる。見物に来たので、参拜に来たのではないぞ』といふやうな喚声を切る客が、一年の中に數あるさうな。これは困つた傾向といはねばならぬ。

△これに反して伊勢神宮はどうであらう。拜觀料などは一錢も要求せぬ。従つて本宮も板垣御門内までは誰でもお参りすることが出来る。どの別宮へでも拜殿までは自由にお参りされる。だから参拜人

といふ参拜人は盡く好感をもつて歸るのである。私はそれが一に民衆の心を惹くのだとは勿論言はないが、神宮の調査に因れば年一年と参拜人の數が増して居るのである。『御神前へ投げられる銅貨や銀貨のお賽銭の中から、白紙に包んだ何十金何百金といふ無名の淨財が見出されることも年に二度や三度ではない』と、これは神樂殿での第二課長の直話であつた。

△さてこれが果して純な敬神思想から来るものなりや、將又射利主義から来るものなりやの心理状態に至つては一寸透視されないがとにかくにも招かざるに來たものであつて、日光のやり方とは同日の論ではない。そしてその結果は素朴な神宮が益々崇敬の的となり、華美な東照宮がだんく見せ物扱ひされるやうな皮肉な場面になりつゝあるのである。

△これには祭神の大なる相違といふことが原因の重なるものになつてゐるのは勿論であるが、當事者の遣り方如何といふ事も決して等閑に附すべきでない。

△私は伊勢と日光とを見比べてあるものを味得し、この間の消息は廣く萬事に共通するものであるといふ信念を深くした。

◆江湖見聞帖

漢 江 魚 郎

○鐵道局の戸田理事には、妙な趣味がある……といふのは、大工仕事が大の道樂で、閑さへあるとボロ服を一着、カンナやノコギリを揮ふのである。

○『ドコか修繕するところはないかナ』、『生憎お台所の方にも、直して頂くところは御座いません』……と、奥さんや女中が答へると、『さりとては、折角の日曜を……それア残念……どうだ、鏡台などは狂つてはゐないか』、何處か故障を見つけるべく、奥様と女中が、鞆の目、鷹の目。

○好きこそ物の上手で、戸田さん大工仕事は、實にウマイもんださうな。

○いつか鶏小舎の扉を修繕してゐた。お出入の本職の大工が、偶

然來合せて、うしろからソーツと見物した。實に熟練したものだ。本職おぼへず感嘆して、『フーンうめえもんだ。吉公近ごろ腕を上げたぜ』、親方は、同職の吉さんと思つた。

○ところが、頬かぶりをとつて『ヤー』といつて、こつちに向いた顔を見ると、それが戸田理事だつたので、ソコへべつたり膝をついて、『ウヘー、これア旦那で……本日は、ウヘー、日本晴れで御座いますして、……ウヘー、ひとりで汗が流れやす』

○國境節『コ、は朝鮮北端の』……といふ奴は朝鮮から溢れ出して、今は、内地の津々浦々まで風靡してゐる。

○が、肝腎の作者は、誰であるか、今以つてシカとしたところは判らぬ。

○一説には、現警視總監丸山鶴吉氏だとの説もあるが、丸山氏は

首を振つて、『イヤ々々、アノ唄を、國境で見つけて、これア面白いと、拾つて歸つて、京城へひろめたのは、ワシぢやが、斷して原作者ぢやない』と、否認する。

○ところが、胸を叩いて、『アレか、アレこそ我輩苦心の大作ぢや。誰が何といはうと、アレこそ我輩の筆端に醗酵したものぢやッ』と、ヌツと面を突き出したのは現内務省高等課長の川崎氏。……この人け、以前平北あたりで、警察部長をし、その實感によつてアノ大作？を完成したといふ。

○外に版權を争ふものがないとする、川崎氏ぢやらう。

片岡喜三郎氏著  
隨神仙爐

(各書店にあり)



○いつか鶏小舎の扉を修繕して  
 ○一説には、現警視總監丸山鶴  
 りた。お出入の本職の木工が、偶  
 吉氏だとの説もあるが、丸山氏は

(各書店にあり)

# やまと歌

國風會  
 京城支部

## 海邊月

浅井佐一郎  
 玉とちりなきさによする波の上にかべる  
 月の光りかどやく

田中秀一郎  
 さぶれ波のよるのいそべは静にて濱松の上  
 に月すみわたる

安東都天子  
 須磨のうらや隈なくてらす月影の鏡と見え  
 て波に漂よふ

松田 甲  
 いさり舟今か歸ると月明き海邊にあまた子  
 らのつとへる

足立丈次郎  
 あら磯によせてはかへす白波の玉とくだく  
 る秋の夜の月

安東貞一郎  
 くだけてももとの渚に打ちかへす波にやど  
 れる月のかげかな

濱野鐘太郎  
 圓かなる月影くだく荒磯海なみのしづきを  
 珠かとぞ見る

中島貞信  
 潮風の松にかなつる音すみてすまの浦曲の  
 月さやかなり

同 人  
 しほ釜のけふり静かに立つ見えて浦曲さや  
 かにてらす月影

野田新吾  
 見はるかす内海越しなる山のはにのぼれる  
 月の影のさやけさ

今村雲嶺  
 潮上げの堤のすゝき礎にいでゝまねげばい

## 朝鮮秋

野田新吾  
 つる波の上の月  
 佐々木杏造  
 島かけは波間かすかに見えそめてやまの端  
 いづる月のさやけさ

松寺竹雄  
 磯松のかけに人なく夜は更けてひとり月の  
 み波にたゞよふ

安東貞一郎  
 賤家の屋根にほしたる唐辛子あかき至高  
 麗の秋を見えける

野田新吾  
 とらのふす野邊も御稜威に治まりて菊の香  
 高き秋は來にけり

足立丈次郎  
 天つ星こぼるばかりに見ゆるまですみわた  
 りたる高麗の秋の夜

松田 甲  
 みはるかす村はいつも屋根の上に辛子ほ  
 したる秋日和かな

工藤武城  
 この秋も高麗のあれ野に駒とめてふる里に  
 とぶ雁を見るかな

松寺竹雄  
 高麗の城あれにしまゝに人見えでた、秋風  
 にすゝきそよぎつ

佐々木杏造  
 舞心遊ぶ田鶴よりほかに隈もなくそらすみ  
 渡る高麗の秋かな

中島貞信  
 うちはれし空は藍より青くして月てりわた  
 る高麗の秋かな

浅井佐一郎  
 眼に見えぬ風もあはれと身にしてみても高麗の  
 山里秋ふけにけり

田中秀一郎  
 遠こちの砧の音に夜はふけて高麗野の月に  
 秋風ぞふく

# 木村重成の夫人 『尾花』の書置

福士末之助

(總督府學務局)

『一樹の蔭、一河の流さへ、他生の縁と承り候へば、まして二世の縁、百年の契りを結び候事は、よくくゝの因縁と存じまはせ候。御身今や戰場に向はせられしき御最期を遂げさせ給はんとす、御身此の世に在らせ給はで、此の身誰が爲めにうき世にながらへ候ふべき、あけれねがはくは、三途の河邊に御身を待ちあげまゐらせ、冥途の御案内申上ぐるを許るさせ給へかしこ』

これは古來我が國民の敬慕的となつてゐる木村重成の室であつて、大阪城内隨一の美人と賞せられたる『尾花』が、夫重成がけふを限りの門出の際、その後を追はんとして自分の居間に入り、靜に花を供へ香を薫じ、春まだ淺き十七歳を一期として、見事に覺悟の自書を遂げたときの書置だと傳へられて居る。こは恐らくは、當時の史論家が、婦人武士道の理想の描寫に、不滅の生命を與へんが爲めに、まだ花朧づかしき美婦人にして、貞烈無比であつた『尾花』の最後を、更に悽麗の筆を以て美化し劇化したものと思はるゝが、而もこの書置の一讀に、誰か『尾花』の至純至崇な清節に泣かぬものはあらう。前には靜御前の『吉

野山峰の白雪ふみわけて入りし人のあとぞこひしき』の舞といひ今は『尾花』が血涙に滲む此の純愛極致の書置といひ、往時の若き婦人は、その身その心、何なればかくも清く、かくも純に、かくも美しかつたであらう。

翻つて近時の世相を觀るに、婦人のだらしなきこと夥しく、多くは徒に虚榮と美裝と享樂とに浮き身をやつし、甚しきに至つては、戀愛け至上なりと公言して、姦婦姦夫をも禮讚し、笑みを賣り肉を賣る者には、或けステツキガール自動車ガール、昇降機ガールあり或はスター、女給あり、或はモガあり、或は何何、等等等もあるといふ、いやはや恐れ入つた事どもである。若し夫れ、結婚資本主義の實行流行に至つては、さすがにプロレタリア主義者にとつて、最皮肉な且最毒々しい好敵手の、よくも見はれたものだといひたい。況んや近頃の東京は、銀座街頭の男女の會話に

男『貴女は私をどう思ふて?』  
女『やつぱりあなたにもラの字にアの字よ……よくつて』(某誌所載)

などがあると傳へらるゝに至つて今日の澆風遂に三千年來の聖賢を

塵殺にすといはなければならぬ。實に寒心すべきことである。地下に三百年以前の『尾花』を招き來つて、更にその遺書を今日に擧ぐるも、己むを得ないことである。詩人土井晩翠が、女性を

操は嚴冬雪ふるなかに  
ほゝゑむ寒梅にほひやたぐふ  
ほまれは千尋暗なる谷に  
潜める幽蘭かをりに似るか  
いさはは蒼海波捲く淵に  
輝く白玉光といづれ

嗚呼君見えざる無上のいさを  
嗚呼君聞えぬ至高のほまれ  
嗚呼君知れざる究竟の操  
大なる國民、君よりおこる  
涙になさげに操に愛に  
嗚呼君やさしき女性之力

と歌つて居る、洵に力つよく、美しく氣高い詩である。併しながら前掲の書置を遺した『尾花』が喉の懐劍よりしたより來つた鮮血はその一滴にさへ、より力強く、より美しく、より氣高き、我皇國の女性の武士道に、不滅の清光が湧へて居ると思ふ。

都鳥  
鳥割烹  
水 焚  
旭町一丁目  
電本三三三六六

朝顔を見る

花だにもかく様々に變るもの  
人も育てのほどにこそよれ

化し劇化したものと思はるゝが、  
而もこの書置の一讀に、誰か『尾  
花』の至純至崇な清節に泣かぬも  
のはあらう。前には靜御前の『吉

誌所載)  
などがあると傳へらるゝに至つて  
今日の澆風遂に三千年來の聖賢を

# 朝顔を見る

古田廉三郎

(朝鮮銀行)

ダリヤ作りの名人である鮮銀の  
長谷井君はまた同時に朝顔作りの  
名人である。或日曜日朝同君庭  
園の朝顔拜見にと出掛けた。

作りも作つたり二百有餘鉢、ズ  
ラリと並んで大輪の朝顔がとりど  
りの色に咲き誇つてゐるすばらし  
さにはアツと感嘆の聲を揚げ、た  
ゞ呆然たるのみ。『これはこれは  
とばかり花の朝顔』とでも駄洒落  
を云ひたい位である、同君の談に  
よれば三百鉢程栽培したのを三四  
十鉢人々に分與したとの事、其の  
丹精其の苦心の結晶が毎朝此の美  
しい花となつて顯はれるのである  
如何に愉快な事であらう。

我々は朝顔と云へば單に紅、瑠  
璃、白、斑などの漏斗形の花が竹  
籬にからまつて咲くものとはかり  
思つてゐた。それがどうであらう  
二百餘鉢の各花全然同色と云ふの  
は殆ど稀である。肉色あり紺青あ  
り濃紫あり藤色あり縁取りあり色  
々の絞あり珍らしくも黄色迄ある  
實に十紫萬紅其の變化の極りなき  
只驚くの外はない。之が各鉢に二  
つ三つ多きは六七ヶの花を持ち、  
直径三四寸の大輪に咲いてゐるの  
であるから百花研を競ふと云ふよ  
り數百花研を競ふ(無論百花とは  
種々の種類の花の謂なれど)ので  
ある。見事なことは云ふ迄もない  
之がもし香氣でもあつたら鼻むけ  
のならない程かも知れぬが、朝顔  
には香と云ふものはない。即ちた

と花冠の美に依つて虫類を招くの  
である。この香のないので却てあ  
つさりして可憐で夏にふさはしい  
のであらう。殊に其壽命の短さに  
就ては誰もが承知の事である。同  
君は朝銀行へ出勤前に此日の朝開  
いた花を悉く摘み取られるさうで  
ある。たゞ日曜日だけは晝迄其の  
ままで置かれるとの事である。之  
は常の日に花を摘まず者がない  
からとか、かく摘み取らなければ  
翌朝の花が小さいさうである。そ  
して極暑の頃には一日に三度水を  
やらなければならぬ。之を誤まる  
と矢張翌朝の花が小さいさうであ  
る。此の一事を聞いても其の栽培  
には如何に細心の注意を拂はねば  
ならぬかが分かる。

朝顔は朝な朝なに咲きかへて却  
て盛り久しく眺め得られるとは古  
歌にもある通りで如何にもすがす  
がしい夏の花である。此朝顔は遠  
く平安朝の初期支那から輸入され  
我邦で廣く栽培せられる様になつ  
たのは徳川時代からであるとか。  
それはともあれ炎日次第に頭上  
を照らす様になるので惜しくも花  
に分れ其中の數鉢を貰ひ受けて同  
君庭を辭して歸つた。

○ 朝つゆのひぬ間をおのが命ぞと  
色とりどりの花のあさがほ  
○ 朝な朝な此あさがほの花を摘む  
君が心や如何にたのしき

○ 花だにもかく様々に變るもの  
人も育てのほどにこそよれ  
(四、八、一二)

將棋會
師範………廿六段
時日………毎週水曜
會場………美術俱樂部
會費………一個月二圓
御入會を歓迎す
水曜會

## ◆無駄はなし

北漢山人

○將棋の名人關根金次郎氏は、  
今年六十五歳になる。

○糟糠の妻………多年苦勞を共に  
した奥さんは、昨年病歿してしま  
つた。

○名人さだめて寂寥だらうと、  
人々が同情すると、名人却つて若  
くなり、おまけに、近頃妙にニヤ  
／＼して御座る。

○ハテ不思議なこともある……  
と或る物好きが、内々探査に及ぶ  
と判つた／＼………名人の茶の間に  
は、いつの間にか若い、うつくし  
い、瑞々としたのが、御鎮坐し  
ましてゐる。『ウワツ、ナール』

○尙ほ段々探査に及ぶと、この  
新興様は、もと釜山松壽園の女中  
で………美貌と、氣位と、雄辯で鳴  
つた何子と判つた。

○何んでも、六七年前の、朝鮮  
入りの時の發掘物たさうな。兎も  
角も、當年二十有六歳。

○『名人………なか／＼味をやり  
ますネ』、あごを撫で、答へて  
曰く、『それアワシほどになると  
ウフ、第一、眼の配りがナール』



# 分化の原理

木村常信

(京城法學專門學校)

マネキンが汽車の二等に乗り僕は二等に乗る世の中である。高商の卒業生が月給三圓五十銭しか貰へず自殺するも美人の自殺程に反響の無い世の中である。私立大学の野球の選手は親に送金が出来るといふ噂のある世の中である。これは文明が進むと共に分業が盛んになり特殊なもの珍しいものが歓迎されるからではないだらうか。

僕は之を悲しむべき現象とも思はぬ、不可避的現象であると思ふ。

ダーキン曰はく、有機體間の競争は、その種が近いだけ、その型が似てゐるだけそれだけ激しい。同種に屬する十の成員が共存することの出来ない場所と異種に屬する百の成員が相並んで容易に發達する。それ故競争が激しくなると自然に特性の差異が生ずる。第一番に分化することの出来る個體が最も多く生存の機會を得るであらうこの法則は人類の密集群にも適用されるものである。互に押し合ひへし合ひして、人々は生活の爲に一層激しく闘はねばならぬ。従つて、彼等は自ら特殊化と云ふ事に救ひを求めざるやうになる。彼等は本能的に満員でない所、人のやつてゐない事を探すであらう。彼等が新しい進路を感々多く開拓すればするだけ、彼等が満足と與へる慾望又は彼等が用ふる方法が益々難多なればなるだけそれだけ彼等は互に人の邪魔にならない。帽子

屋は靴屋の、又眼科醫は精神病醫の得意を取らない。同様に僧侶と軍人、工業家と學者は、同一の目的を狙はず、同じ地面で獲物を争はない。人々が平和に共存しようとする場合に専門化することの利益なるは、それ故、單に經濟界に於てだけではない。それは凡ての生産界に於てそうである。

【一四】

社會的密度は、人々の競争を激烈にして、彼等をして前人未踏の道を抱かず求めしめる。この壓力は或る程度まで彼等を凡ての方面に投ずる傾きがある。オーギネストコントが言つたやうに、彼等が「一層洗練された方法を以て、そうしなければ一層困難となる筈の生存を確保する爲めには、新しい努力を試みる事が必要である」、是に於て我々の社會に於ける分業の前代未聞の發達が説明される。即ちこれらの社會の形が與へられると、右の如き分化が、その社會の成員にとつて生活の必要事となるのである。

## ◆鶴ヶ岡閑話

北 漢 山 人

○城大の某教授(特に本名お預り)鶴ヶ岡の文化住宅に住んでゐる。

○何を思ひ出してか、將棋の辻六段を聘し、一週一回づつ、稽古をして貰つてゐる。

○辻六段變なことに思ひ、『先生一體將棋を稽古されて、何の利益がありますか』、教授それを抑えて、『イヤ、あなた、私に教へればよろしい。その用不用を質問する必要はない』、辻氏沈黙してしまつた。

○が、教授が、こつそりこれを習ふのは、大に理由がある。といふのは、最近城大の若い先生達の間に、非常に將棋が流行る。で、この教授にも、頻りに仲間入りを勧める。ソコで、教授吹いて曰く『將棋か……將棋は長くやらんが

十六七の時、我輩は天才といはれたものだ。まア二三段かな。諸君その中稽古をして上げるヨ』『へへ、人は見かけに依らぬ。今後何分の御指導を……』

○だが、その實駒の行き道しか知らぬ。重大な責任が生じて来たこれアちつとして居られぬ。遂に辻六段を招じ迎へた所以だ。

○ところで、辻氏も實に御難だ『辻君、一體何ヶ月で初段になります』、『サアそこは、人々の天分で』、『御尤も、然らば、拙者の天分は、どうでせう。その一ツ御腹藏のないところを』

○次ぎの稽古日にまた、『辻君々々、これは(將棋)三ヶ月速習——原理早呑込といふワケには行きませんが。何、月謝は、三年分位一度に拂つても苦しくない。兎に角手ツとり早いところを……ハハン、さらは參らぬと、サテサテ將棋といふものは、トント齒摩いもので御座るのう』

引いて居る。

『サア早く……』

急ぎ立てられて歩き出すと、子供

# 朝博十景

津田常男

(遞信局)

はするだけ、彼等が満足を得る  
慾望又は彼等が用ふる方法が益々  
雑多なればなるだけそれだけ彼等  
は互に人の邪魔にならない。帽子

間に、非常に將棋が流行る。て  
この教授にも、頻りに仲間入りを  
勧める。ソコで、教授吹いて曰く  
「將棋か……將棋は長くやらんが

に角手ツと耳とどろろ……  
ハハ、さうは参らぬと、サテサ  
テ將棋といふものは、トント齒摩  
いもので御座るのう」

## 1 赤札

或人曰く

『墓口の用意なしに博覽會へ行  
くのは、馬券を買はないで競馬を  
観て居るやうなものです』

と答へた。

## 5 人造人間

『人造人間』を見て、こりや大  
變なものが出来るやうになつたと  
騒ぐ人がないだけ、世の中はまだ  
安心である。子供は臺灣館の范將  
軍と同様に、恐いよといつた。

## 10 癖

滿洲から来た愛陶家曰く

『壊した朝鮮の癖は惜しいです  
ね。残つただけでも大切に保存  
したいものです』  
私も之に同感です。

## ◆法曹風聞記

北漢山人

○辯護士會長の赤尾氏は、碁が  
強い。

○若手の浦田辯護士などは、星  
目おかせられる。

○『星目とは、ちとヒドイ』と  
不服をいふと、『だが君、物は、  
本當の修業をせんとあかんよ』、  
親切ごかしに、星目組に入れてし  
まふ。

○濱田虎熊さんも、碁は、御自  
慢だ。『ちや一面行かう』とは、  
申されぬ。『さらば、一局御傳授  
申さうか』、本因坊の抱負で御座  
います。

○山口均四郎氏も、強いといふ  
評がある。但し氏の實戦を見た事  
がない。『お強いさうですネ』と  
聞くと、『天下に定評があるサ』

○宮崎毅氏は、將棋に凝つてゐ  
る。客人と對局中は、なか／＼以  
て御面謁相叶はぬ。『でも御在宅  
でせう』、『エ、ゐるには、ゐ  
ますが』、『一寸お手が引けませ  
んか』、『エー、何分今先生は、  
天下の一大事をやつてゐまして』

## 6 便所

或人曰く

『三井館の便所はいゝです。手  
洗場も附いて居ます』

私は何回目の入場にそれが發見さ  
れたかを聞く心算で、つひ聞き洩  
した。

## 7 背景

演藝館なんて……といつて居る

人は大概まだ演藝館へ入つて見な  
い人の口吻である。そこで一度演  
藝館から出て来て、尙前の口吻と  
辻褄を合したかつたら、背景のこ  
とでも褒めて置けば、一番當り觸  
りがなくてよいのである。

## 8 コパツ

『コパツ』の踊り手は心憎し。  
あの小さな體軀で舞臺を獨占して  
時々は拍手をさへも奪つて行く。  
『コパツ』の踊り手は心憎し。

## 9 途上

或る夫婦、二人の子供を連れて  
場内を見物。子供一人づゝの手を

## 3 参考室

美術教育館で或る紳士が呟いた  
『南風なんて古い畫が出て居る  
のか』

此の人はそこが参考室と書いてあ  
ることに氣が付かなかつたのであ  
らう。それにしても、よく南風を  
御存知でしたね、と申上げたかつ  
た。

## 4 胎兒

同じ館に、胎兒のアルコール清  
が、十箇月の發育の順序に並べて  
ある。或る人

『コリや皆同じ子供でせうか』  
と問ひかけて、言ひ終らないうち  
に自ら氣が付いた。

私は  
『この時分はどの子供も皆同じ  
でせう』



# 鮫鯨の正體

松月秀雄

(城大法文學部)

【一六】

並び、職工増集し、鮫鯨(沖仲仕の自由労働者)やかんかん蟲(團突掃除小僧)やクモ(立ん坊)など云つた輩が菓食ひ、まあ云は「一體に小さな『本所深川』を形づくつてゐる」とあるわい!

C、して見るとB君の所謂『鮫鯨』は『立ん坊』ではなくて『沖仲仕の自由労働者』といふことになるね。

A、だから僕が、B君の哲學に本質的な缺陷があるといつたんだ

B、なるほど小説も馬鹿にならぬねえ!僕等が鮫鯨の子女を如何に教育するかを攻究して居る間に小説家は彼等の生活の真相を描くことに苦心して居るのだね。して見ると今日教育研究者もプロレタリア文學の一頁位は讀まなくてはならぬことになるね。兎に角君等の御垂教を心の底から感謝せざるを得ない。多謝!多謝!

## ◆頌徳碑の話

三木一彦

○池田長次郎君は、義太夫が御自慢だが、公平なところをいふとその筆蹟の方が、ズツト見事。

○筆一本で、田舎廻りでもすれば一生紋付で暮らせるとの評判。

○今日南山及びアノ一帯が、アレまでに内地人の巢窟となつたのは、全く池田君の努力……。その功績は忘れてはならぬとの話だ。

○だから、一杯やると「オイ諸君、諸君は何か忘れ物をしては居らんか」、「何のことだネ」、「何のこととは情けない、南山のてっ邊にたつた二本頌徳碑を建てる」とを。……ウーン!

A、先達で『京城雜筆』誌上で君の鮫鯨哲學を讀んだが、なるほど、鮫鯨の性狀から『立ん坊』の様な、機會をねらつてその日の生活資料を得んとする無技術、無熟練の労働者に對する鮫鯨といふニツクネイムが出て來たといふ説明は面白いには面白いが、何だかその推論には本質的な缺陷があるやうな気がする。

B、だつて僕は態々大阪まで問合せて念には念を入れた積りだがね。然しその本質的な缺陷とは甚麼な缺陷かね?。

A、僕の所謂本質的といふのは鮫鯨は海に居る魚だらう、だから労働者の鮫鯨も海に關係を有するものだと思ふね。先達ての大阪の新聞にも、中華民國と勞農露國との問題が起つてから、大阪埠頭の『鮫鯨』などに失業するものが無くなつたとあつたがわ。

C、さう言へば、僕も思ひ當ることがある、B君一君のところは『中央公論』の夏季特別號は無いかね?。

B、有るには有るが、中央公論に鮫鯨の説明でも載つて居たとでも言ふのかね?。

C、さうだよ。その卷末に十一谷義三郎の『街の斧博士』といふ小説が載つて居る筈だが、その中に鮫鯨といふのが出て居たやうに思ふんだよ。

B、なるほど有る!有る!、題

目は『街の斧博士』か!、そしてこの十一谷義三郎つて何處の男だね?。

C、御影の生れで神戸の中學を出た男なんだから、あの男の鮫鯨の説明は大體大阪の鮫鯨にもあてはまると思ふ。

A、一寸拜見!『町の器用な連中が、オランダ言葉のZundagsを巧くジャバナイズして、『どんたく』やら『半どん』を造語つて、日本國中に擴めた』、なるほど面白い書出したね!、近頃の小説家はまるで外國語の直譯見たいな文章を書くね!。

B、その『町』といふのは何處の町のことかね?。

A、そこは小説だから、紀行文や歴史見たいに精確には書いて居ないし、また書く必要も無いのだらう。たゞこんなことが書いてある。『町には、人間が、ざつと四十萬いて、醫者が、その約千分の一、醫學博士は、麴香鴨みたいに珍しくて、たつた三人しかない。『町の斧氏』は、この三人の一人だ』

B、それでは全く見當がつかないぢやないか。時に問題の鮫鯨はどうしたんだね?。

A、一寸待ち給へ!何處かに有つた筈だよ。やあ、有る!有る!『町の中心區域の端に、『不毛地』とむかし呼ばれた埋地があつて、其處に、年と共に工場が建ち

# 草の實を聴きつゝ

平山義雄

(旭町小林病院)

飯膳といふのが仕て居た。……  
ふんだよ。  
B、なるほど有る！有る！、題

「地」とむかし呼ばれた埋地があつて、其處に、年と共に工場が建ち

邊にたつた一本頌徳碑を建てることを。……ウーン」

達哉兄

京城の支關に李朝五百年昌榮の夢をつゝみ、古色蒼然として聳え立つ崇禮門(俗稱南大門)にまっはる鳥が、赤くなつて來た。

大東京のどつしりと坐つて居る武藏野にも、日毎に秋が深くなつて行く事だらう。獨歩が歎息しながら聞いた櫛の林に渡る冴えた秋の叫びは、僕の羨ましいものゝ一つだ。禿山と白衣名物の朝鮮にも併し君が口癖のやうに言つて居た『生き甲斐のある秋』がやつて來た。寂寥と沈黙の齎す無限の温さを抱いた秋が、しのびやかに隙間といふ隙間から忍び込んで居る。胡茄の聲は聞けなくとも、月に向つて吹く鮮人の短簫(尺八の如きもの)の細い響がゆるく悲哀を誘ふ——秋だ、秋になつたのだね。悲しみといふことを考へずに聞いて居る胸にさへしめやかな涙が溢れて來る。動くともない風に、堅く緊つた枯葉が、大地に觸れて、若さに燃ゆる血の高潮して居る胸に、恰も力瘤の盛り上つた太つ節の腕で鐵槌を振つて鋼鐵を鍛ふ音の如く快く響く。

春は芳醇な酒の香に酔つて讚するに相應しいが、弛緩した晩夏の後に、足音も無く訪れ來る秋を敬虔な心持でしみじみと迎へずには居られない。滲み透る位冷かな露に濡れた朝顔が一朝毎に小さく咲くのも淋しい。けれど快い淋しさ

だ。男性的な淋しさぢやないか。

朝鮮で一番大きき黄色く顔色を變へるアカシヤの蔭に居て、青藍に澄む太虚と、白金の塔の様に輝く雲の彩を眺むる時、靜心なく草の實が裂けて散る、其の後に、透徹力の籠つた空から燦として注ぐ啼みの光が軽く躍る。

達哉兄

草の實の散る音に僕はキリストの戒の言葉を思ひ出す。實際ある中のどれだけが満足に成長して、來る秋の日に再び今日の如く種子を蒔き得るだらうか。春に芽生え秋に枯るゝ彼等はまこと短い運命の所有者だ、が永劫の鞭の下に喘ぎながら人生の曠野を迷へる人達——盡きぬ時の流を幾つにも細断して小面倒にも日と年とを創した小刀細工の好きな人間——欺き合ひ、争ひ、殺し合ひ、要するに自己のみの満足に争闘せる人達から見れば實に短命ではあるけれど、爲す可き使命を果して快く散りゆく草の實こそ羨むべき幸福そのものなのではないだらうか。

何時の間にか雀が群れて啄むで居る、今散りこぼれたばかりの草の實も犠牲になつて居るかも知れない。自然は、自然の造つた法則を常に容赦なく且巧みに運用して過剰整理して居る。歐洲の大戦も人類過剰を忌む自然の一つの悪戯だつたのだね。結果から見て改造

文化への道程であるとしても、カゼルと言ふ俳優の踊を見たに過ぎなかつたのだ。そして犠牲になつた人達こそ氣の毒な者さ。僕は寧ろ東洋の一赤土色の丘の上に光を浴びながら、憫む可き人として生れた事をしみじみと感謝する。

君は何時だつたか『人間はいつになつたら憫みが無くなるのだ』と書いたね。人間は殊に若き者の尊さは、憫みあるが故に洗練された人格に到達し得るのではないかと思ふ。外延的に自己を誇張するより、内省の深みに憫みは無限に湧く。限りなく自己に徹せんとして、其處に人智の力が自然の力に遠きを嘆く。嘆きながら尙自己の苦惱の道を往く。而して慟哭と叫聲の中に顛倒して行く。冷酷なる死に至るまで憫むのだ。永劫惱絶えざるが故に人は尊い。この苦治の後に來る歡喜こそ眞の喜びである。この歡喜こそ愛の喜である。愛の喜の齎すものは創造である。憫み淺き者は到底此の喜を識らぬ釋迦が悟道解脱の瞬間に、はたと手を叩いて衆生濟度の法悦を感じたのも、苦治の後に來れる愛の力を知つた時だつたのだ。

達哉兄

愛は甘き蜜ではない。愛は苦惱の生む一人見なのだ。自己の心を結束して生命に徹する活動は、一つの生命に沈潜透徹するに従つて改造の光を放つ。而して此の改造に即した生命の活動が——愛を生む。君は愛は放射する力の本態だと言つたね。永久に光を、熱を與へる太陽だと言つたね、僕はそれに反對する。愛は與へる前に先づ内包的に成長しなくてはなら



ない。成長せんが爲には總てを奪はなくてはならない。與へる力は此の奪ふ愛の活動後に生れるのだ

奪ふとは愛の理解の象である。環境の總てを征服し盡し、融合し止まない絶大な活動でなければならぬ。かくて總てを自己の内容に還元し盡して後、熱と力とを放出するのではないか。かるが故に此中に自己が現實に歸つて表現されて来る。宇宙の活動の總ては自己の表現に過ぎないと思ふ。言ひ換えれば自己の表現は愛の外延的活動に外ならぬ。不幸にして我々の周圍は餘りに浮動性に富む、眞剣に生命に徹し眞に自己を愛することの少きを悲しむ。妥協的な苦惱なき安易さに満足して居る人の餘りに多き事だ。ともすれば僕自身

其の渦巻の中に捲き込まれやうとして居る。

日は冷かに冴え返つた青空を西へ大分廻つた、萬籟聞として壁なき中に僕一人の影と古城門の陰影が長く薄く地上に流れて居るのが秋だけに一人寂しい。人生は淋しい道程だね。一人で生れ、一人で生長し、最後は一人で死んで行く運命、自己を愛する尊さを深く感ずるよ。併し自己を愛するとは利己的な近代的な誤解を指すのではない。自己の尊さを識る者は亦同時に環境を尊重する者の言ひだ。淡々として空は碧に澄む。風なきに落葉は小鳥の様に夕陽の中に黒く、靜かに大地に接吻した。兄よ妥協を排して理解ある生活

【一八】  
に猛進しやう。生き甲斐のある秋だ、君の健康を祈りつゝ僕は僕の聽診器に全力を傾注しやう。

◆筆のしづく

三木一彦

○松田拓相は、朝鮮、滿州を押し歩いて、サンザ新大臣の御威勢といふものを見せました。  
○富田民政黨幹事長、その歸京後の風呂敷のひろさを思ひやり  
獨青はまた親友を得たといひ  
○獨青とは、拓相の雅號、親友とは、張學良のことだそうです。  
○兎も角も、アノ人は、善人ですヨ。

さぼんの歌

谷川靜雄

(載寧 鐵山)

○ 郷人はひたたくふなり金色の膚なめらけ  
きそのつら實を  
○ ほろく／＼とこぼれ落ちつゝ蜘蛛の巣にか  
りてゆるゝ朱薬の花びら  
○ 牆の上にさぼんの小枝さし出でゝ花ほの  
白き小路の夕暮  
○ 速く來よと母呼びたまふ厨へにうち仰ぎ  
つく數よみあれば

○ 兄妹がきそひ讀めども目に餘りなかなか  
合はぬさぼんの實かな  
○ 竹竿もてつきおとさんとつゝけども中な  
か落ちぬさぼんなる哉  
○ さぼんの實地上に墜つる音きこゆ南の國  
の秋ゆく頃は

○ 屋根に落ち勢つきてかき根まで轉び行く  
なる實もありにけり  
○ うす暗き店屋の土間にうづたかきさぼん  
の小山見たる旅哉  
○ やうやくにむきし甲斐なや食せばこはい  
みじくすゆき奴に會ひたり  
○ 門掃けば霽の先にカラとなるさぼんの葉  
こそ淋しけれ冬(舊作一首)

展望車

松崎の宮夕暗に見えず  
ふと見えし物持の家白き壁  
はらうと雨の音しき切火

# 展望車

福原俊丸

(朝 鮮 鐵 道)

喧しき觀光團も話やめて  
 みな宮嶋の鳥居に見いる  
 初秋の夕映の鳥を前にして  
 濱松並木枯葉を見せず  
 斷髮の四十路女がふとき腕  
 あらばに見たり殘暑の夕陽に  
 展望車外國人に占められて  
 日本益良雄隅の椅子による  
 展望車見のかぎり廣し然れ共  
 殘暑の陽さし『カーテン』をおろす  
 秋の夜を帽子かぶりて上衣着て  
 外國少女姿よろしも  
 扉あけて彼の斷髮のをみな入り來  
 着たる上衣のその色のよき  
 眼鏡かけ入り來少女の高き鼻を  
 初秋の夜の灯照らすも  
 扉の硝子戸越しに年老いし  
 夫婦のかろきつかれをあげれむ  
 文机に寄りても書く少女子の  
 脊に近く居て家思ふ我は  
 手馴女か帽子に半かくす顔  
 硝子戸に寫り秋立ちにける  
 車の音ゴウ／＼として暗を走る  
 展望車の人皆書よめり  
 烏羽玉の暗の中行く車ぬち  
 外國人等をひたする見いる  
 一人へり二人三人減り更くる夜を  
 並べる椅子の『カパー』の白さ  
 展望車後の赤きともし火が  
 いや遠くなりて我思のこる  
 ところ／＼線路の灯走り去る  
 宵暗淋し秋に入りしか  
 むかし大臣流竄の秋に船よせし

松崎の宮夕暗に見えず  
 ふと見えし物持の家の白き壁  
 おぼろに消えて涼しき初秋  
 乗換驛秋たちそめて出雲への  
 貨物列車のあまりに長き  
 電燈照らす乗換驛も人稀に  
 我車はやも秋の暗に入る

茶	江
ぼ	湖
な	北
し	漢
話	山
人	

○鐵業家の中川  
 漢氏は、今でも中  
 々のイタヅラ者だ  
 が、若い時は、も  
 つと／＼手に押え  
 ない腕白小僧だつ  
 たさうな。

○熊本の高時  
 代、酒が饅頭飲めぬといふので、同志を誘  
 つて、下宿の押入の中に、スーツと大甕を  
 据えつけ、それへドブ六の密造をやつた。

○が、程よく酒になるまでは、辛抱が出  
 來ない。「オイ、鳥渡容子を見やう」とい  
 つては、押入へ首を突ツ込み、少し醜ッば  
 くなつたのを、ゴクリ／＼……。同志眼を  
 怒らして、「コリヤ……いゝ色をしてけッ  
 かる。俺も一寸失敬！」

○一日、『舞開き』といふので、全同志  
 が大に高會し、銘々五郎八茶碗を控えて、  
 飲めや歌へ……。中にも中川氏は、百本漬け  
 のデカイのを、彈代りに、机を叩いて、音  
 吐をとる。外の五六人がそれに合せて、裸  
 踊り、逸興方に酣といふその眞ッ最中、同  
 志某の父親が、ヒョッコリ田舎から來訪。  
 『これア、ハア、何ン事でゴワスノ』、向  
 ふも仰天、こつちも仰天！。二ノ句のつけ  
 ざること半時間。やがて老人、中川氏に一  
 揖して、『どうもお見受けするところ、ア  
 ンタが隊長らしい。お禮を申します、セガ  
 レにいろ／＼良いことを仕込んで下すつて  
 ……』、鎮西隨一の剛の者も、これにはホ  
 ントの『ギヤフン』



## ◆鑛業風聞記

漢江漁郎

○燃料研究所の内田鯉五郎技師(所長)は、部下から、親のやうに、敬慕されてゐる。

○五六年も前に、同所を罷めたものでも、京城へ出て来ると、乾度内田技師のところへ顔を出す。泊まつて行く。

○階級などは、全然眼中にない人で、『オー、来たか〜。今夜は、一緒に飲もうで』

○一旦部下にした男には、いつでも金を貸す。『さうか〜、ウーン、俺とこのを持つて行け。い〜とも〜』

○有名な上戸で、部下を招待しては、御馳走をする。皆が喜ぶのが、無上の楽しみだ。……が、蒲飲佳興に入ると、大に談論する。談論が始まると、部下は、一人減り二人減り、しまひによく見ると誰も居らぬことがある。『ハハハ、何ぢや。誰も居らんぢやないか。ホウ……』

○蓋し内田技師が、談論風變すると、矢鱈に杯の交換を求める。その速力の早さには、矢面に立つたもの、忽ち降伏してしまふ。おマケに技師の口角からは、唾しぶきがあらしのやうに飛ぶ。こつちは、顔を半巾で拭き〜。『ウハ、御尤も……左様で』

○部下の一人述懐して曰く『何んしろ所長と飲むと、頂戴した杯へ、唾しぶきが雨のやうに、落ちていたします』

○内田さん、さうとも知らず、『誰も居らんぢやないか。……アハハ、若いものは、皆遠慮しよるワイ』

## 蛇の皮

青木戒三

(平壤南門町)

九月の末、息子をつれて博覽會見物に京城へ出た時、一夕あるレストランで夕飯をたべた。小供相手にゆつくりと食事を終へ、陶然とした氣もちでのかへりがけ、衝立にかけた帽子とステッキを、折柄そこに立つて居たボーイ君に、『オイ』とあごでしやくつて、取つて貰はうとした。ボーイ君頗る不機嫌な顔をして、そつぽむいてしまつた。ハテ、レストランのボーイ君も、當節は中々見識を持つて来たものだ。あごでしやくつてものをたのむなどは、長い間の役人風がまだぬけないのだ。悪かつたと内心赤面して、『君帽子を取つて呉れ給へ』と、丁寧にたのんだら、非常にいやな顔をして、帽子をけとつてくれた。『君、ステッキもよ』といつたら、ボーイ君ブル〜ツと身振ひして、『私は生得蛇が嫌いで御座いますして』と答へて、あつちへ行つてしまつた。僕のステッキは蛇の皮をはつたのである。氣の毒な事をしてしまつた。

蛇とか蛙とかいふものは、大體誰れにもすかれないものである。中には極端に嫌ふ特異性の人もある。僕けありし日の日向きむ子さんの様に、肌身に離さず蛇を愛するといふ程でもないが、決してよその人の様に嫌ひではない。今年は己年ではあるし、己いさんは魔除けにもなるといふから、蛇の皮のステッキ、ネクタイ、紙入れに裏口、印判入れ、腕時計の紐から、細君の帯止め、下駄の鼻緒まで取り揃へて、密かに誇つて居た。たまたに蛇嫌ひな人を見て、『まあ、氣味が悪い』などいふと、こちは却つて得意がつて居たものであつた。然し今此のボーイ君の様な大の男を、身振ひさして逃げ出さしたかと思ふと、誠に他人様に御迷惑をかける趣味で、元來はいくらか、茶目氣も手傳つての事だから、甚だ相濟まないわけだと、氣が附いて来た。さらばとて折角これまで集めた物を、右から左へ捨て、しましう程の決心は、まだ附いて来ない。(四、一〇、二〇)

## 京城の交通

險が多い、従つて無暗に消路を斷するものも出て来なくなるので、反つて交通は整理し易いやうだ。京城の交通の中心地でも、忽ち上

めた物を、右から左へ捨て、しましう程の決心は、まだ附いて来ない。(四、一〇、二〇)

「誰も居らんぢやないか。……アハハ、若いものは、皆遠慮しよるワイ」

# 京城の交通

戒能 義重

(京城帝國大學)

京城府内の交通が今日の如き雑沓を見るに至つたのは最近のこと  
で殊に左程廣くもない道路に電車  
道・自動車道、車馬道と三つの區  
分が設けられ、南大門通、黄金町  
の車馬の交通が従來の道路の三分  
の一に局限せられてから一層車馬  
の交通が雜沓するやうに見へる。

車馬交通の『ラッシュアワー』  
とも云ふべき午前十時頃から南大  
門、黄金町あたりの交通を見てを  
るとあの限定された車道を入車、  
荷車、荷馬車が絡繰として宛然肩  
摩撃の盛觀を呈してをる。其の  
中を馬鹿に巾廣く荷を積んだ牛車  
がのそりのそりと緩歩して行く。

又其の中を機敏な自轉車が其の速  
力を利用して大きな荷物の下をか  
い潜るやうにして駆け抜ける。自  
動車は一方に電車道を控へて比較  
的ゆつくりとした道路を二十哩の  
快速力で馳走して行くから車道の  
荷車などは此の文明の快速力に壓  
迫されて道路の一方に押し込めら  
れた形で、とてもあの鉄釘の境界  
線を割つて自動車道へ踏み込めた  
ものでない、殊に南大門附近け京  
城龍山間の咽喉益々雜沓を此の一  
線に集めて来る。黄金町二丁目の

如きも京城東部を東西に通ずる唯  
一の車道であるため此處に集まる  
車馬を又道路の三分の一の車馬道  
に集めるからとても賑はしい光景  
を呈する。以前は京城の道路と云  
へば内地の都市に比して優るとも

遜色のない立派な大道路だと誇り  
に思つたものだが、今は頻繁な自  
動車交通の現出のため車道三線制  
を採つて雜沓を整理し、漸く事故  
をより少なからしむる様な事にな  
つた。元來京城府内の車馬道とし  
ての東西の通りが二本しかない  
ため道路數は改善せられた坦々た  
る通路となつては居るが、此道路  
を利用する車が然かも昔しながら  
の車輛が集中して來て混雜もする  
上に道路を破壊して行く狀況であ  
る。若しあの車が何れも速力の相  
似たものであつたらあ道路でも  
雜沓もなく交通はもつと早く片付  
くものをもと思はれる。牛と荷馬車  
と荷車及び自轉車と自動車とを同  
じ線上に行かして速力の速いもの  
が先きへ出やうとする所に混雜  
が起る。結局速力の相違が今日の  
混雜の原因となつて居る。何れは

『スピード』の世界となるのでけ  
あるが、丁度今日自動車は速力の  
遅い車馬を道路の一方に驅逐して  
居るやうに時勢の推移で今の車道  
の速力の遅いものを何處かへ押し  
やつてしまはない限り當分の混  
雜は現状維持の外ないらしい。米  
國の大都市などでは遠うの昔荷馬  
車や荷車は驅逐されて『トラック  
』に代り車道の車は總て所謂『ミ  
シン』で速力が揃つてゐるから、  
道路は狭くとも車が多くとも交通  
は流るゝが如く片付いて行く。交  
通の流れが早いだけ道路横斷の危

險が多い、従つて無暗に道路を横  
斷するものも出て來なくなるので  
反つて交通は整理し易いやうだ。  
京城の交通の中心地でも愈四つ辻  
に『ゴー』『ストップ』の合圖を  
見せて文明式交通整理をするやう  
になつて來たが、博覽會の時など  
初めて田舎から出て來た人々には  
交通が危険に見へて何處からでも  
無暗に走つて道路を横斷するので  
反つて危険が多くはらくする事  
が多かつた。人の方が交通上の訓  
練がないのに車の『スピード』の  
方ばかり進むので、交通整理も骨  
の折れること一涌りでない御察  
し申す、日本の田舎から亞米利加  
桑港の交通の中心に連れ出された  
時、亞米利加では交通整理をして  
ゐる四つ辻以外から飛出して道路  
を横斷事故を起したら責任は横斷  
せんとしたものであるなど、嚇か  
されたが、實際電車が複々線にな  
つて走つて其左右を自動車のがべ  
つに馳驅してゐる『マーケット、  
ストリート』などではとても街路  
横斷などは思ひもよらぬこと、向  
側へ行くには自然歩道を辻の所迄  
歩んで行く。辻へ出づれば緩りと  
安全に横斷が出来る。流石文明人  
だけに訓練が出来てゐるから落付  
いて横斷して行ける。何分日本の  
文明なるものゝ内には輸入物が多  
く最新式と云つたものを輸入して  
は無理な處へ當はめて行くから兎  
に角木に竹を接いだ様な所が出来  
て來る、さて之を整理する段にな  
ると歐米の文明式も其儘あてはま  
らない厄介千萬な事が起つて來る  
各般のことが順序を追ふて進んで  
來る迄は何事も當分一時の便法を  
採つて間に合せて行く外はない。

歐米の道路の立派なことを見て  
は誰しも日本の道路と見較べて羨



しく思ひ、最初は日本の道路も早くあんなに立派なものにしたいと思ふのだが、考へて見ると日本のやうな天候に恵まれない上に富の程度の低い國では一寸間に合せは出来るが、さう早くは眞似は出来兼ねる。英國などでは田舎の都市を結び付けてゐる田舎街道すらアスファルトで例の二階附の『バス』が往復してゐるが、英國は日本にあるやうな暴風雨もなく雨量も至つて少く、土地が平坦で又車が多くは『ラバータイヤ』であるから道路の損傷も少く永持ちがする然るに日本では暴風雨の被害は多く其の風水害復舊費に多い時は年一億圓も損失して田舎では尙人畜の死傷すら少くないのだから都會ばかりが美化して片輪の進歩をした所で一向難有しとも思はれぬ。同じ一等國など、謂つては居るが

大分標準が違つてゐるやうだ。倫敦の牛津通でまだ立派な『コンクリート』道路を人夫が電気機を使つて盛に破壊して居るのを見てなせまた勿體ないこんな立派な道路を壊すのかと訊いて見ると、其當時百五十萬人もあつた失職者救済の二方法として方々に道路工事を起したのださうで立派な『コンクリート』道路を木煉瓦敷に改めたのであつた。何んでも其頃の議會に出た豫算に失職者救済の費用が丁度日本の年々の風水害復舊費と同じ位の約一千万磅と云ふ額であつたと覚えて居る。日本は今日の富で年々巨萬の風水害復舊費を負担した上向これから失職者救済費をも負擔せねばならぬやうになつてゐるのだと思ふと道路問題などよりも外に緊急の問題が澤山あるのだから道路などは先づ一時の間

に合せ位なことで我慢せずばなるまい。其の又間に合せの道路も雨と荷車とでいつも破壊されて常任修理に忙はしい。今日の三線制道路でも自動車道は段々黒びかりがして来て綺麗だが、車馬道はいつも白い砂塵を立て、凹凸を造つて行くではないか。曾て北米『ロサンゼルス』で或る晩田舎から町へ歸つて來ると雨が降つたのか街燈や店頭の電燈が路面に寫つてゐるので一寸すが／＼し気分になつたと思つたら之は雨に濡れたのでなくて頻々たる自動車の往復で道路一面油を塗つたやうに黒光りがしてゐるのに燈火が寫つて居るのであつた。こんなことは京城ではいつのことやら分らぬが、朝鮮でも精々勉強してせめては早く今の荷車や荷馬車が『ツラック』に代る時代になりたいものだ。

〔三三〕

◆江湖見聞記

漢 江 漁 郎

○朝鮮水電の野口氏は、事業慾の盛んな先生で、今度また咸興で大々的に人造絹絲を始めるといふ噂がある。

○これをやれば、何んでも職工だけでも二萬人以上使ふ筈で、咸興では、今から野口様々と、拜んでゐるとの評判だ。

○恐ろしい良い頭の持主で、同時に、重役でも、何んでも、頭ゴナシやつつけるのが、野口氏の色。その代り思ひ切つて、人を重用する契機もある。

○常務の白石宗城氏は、當年やつと四十二歳、工務の工藤宏雄氏

は、マダ三十四歳の若諦だ。それで結構、アノ會社を切り廻してゐる。

○白石氏のお父さんは、猪苗代電氣の社長をしてゐた。伯父さんは、故中島信行氏。また夫人のお祖父さんは、五代友厚氏だといひてゐる。

○野口氏の子煩悩は、有名なもの、おん大子供にかけては、全く目も鼻もないさうな。

○地方の朴訥な鮮人の朝博見物には、いろいろな奇談がある。

○これは、全北の話。——視察團の歸りを迎へて、『京城は、どうだつた？』、博覽會は、よかつた？』と聞く。答へて曰く『京城も博覽會も、ちつとも判らぬ』

『ぞだネ』、『でもアノ旗(團旗)にハグレたら、大變だと思ひ、アレばかり一生懸命眠んでました』、『それア氣の毒だつたネ』、『で、私アすつかりつかれツちまひましてネ』

○平南江界から來た視察團——その中の一老人——何より汽車が氣に入りました。『博覽會は、どうだつた？』、『且那、アノ汽車といふ奴は、乙ですネ』、『汽車もえゝが、博覽會は、どうだつた？』、『斯う腰を掛けたまゝ、家なり動くと、考へたものだ』、『御老人……博覽會は……』、『怒をいふと、もう二三日、アノ汽車といふのに、たんのうしたかつただ。あゝ惜しい』

繪の味・酒の味

範圍を狭めて、こんどは深く探求して行く事である、そふしてゐる内『自分の性に合ふ味』が確つきり意識されて來るものである。

用する美點もある。  
○常務の白石宗城氏は、當年やつと四十二歳、工務の工藤宏雄氏  
うだつた？、博覽會は、よかつた？』と聞く。答へて曰く『京城も博覽會も、ちつとも判らぬ』『ナをいふと、もう二三日、アノ汽車といふのに、たんのうしたかつただ。あく惜しいく』

# 繪の味・酒の味

佐藤九二男

(洋 畫 家)

繪の味を覺える事と、酒の味を覺える事とは同じである。

『酒の味』が、だんく舌にしみわかつて来る様に『繪の味』も、その心に自然にしみこんで来るものである。

無理にわかつふとしても、一時的にわかつふと努力しても、それは全く無駄な事である。

それには、可成り長い時間、側を離なす味ふ事より外、『その味』はわかるものではない、繪の味も酒の味も、その點に於ても又同様である。

一夜造りに、參考書を讀んだり繪を観る前に、美術家の話を聴いたりした處で、繪の味など、決してわかるものではない。

『酒の味』は、理屈でわかるのではない。『繪の味』も亦、理屈では、わからない。

之は又格別だ、こゝもあるし——

一と云ひ得る迄には、長い間色々な酒に、したしまなくては言へるものでない、酒を知らないものにはどの酒でも味は『からくて、にがい』だけのものではない、だから瓶づめの月桂冠を出されても菊正を出されても、又釋の鶴であるが、東自慢であるが、白鷹であるが、少しも變りがない、増して其のどれが、どふ云ふ味で其の内でもどれが良い酒かなどに至つては、夢想だに許さない、

『繪の味』にしても同じ事が言はれる、繪にしたしまない人は、どんな繪を見ても變りがない、之が良いと云はれれば、そふかなと思ふ。之はよくない、と云はれれば又そふかな、とも思ふ。云はば味がわからないからである。

處が、數多くの繪に接して、廣く、したしんである内に、これは良いが、これはわるい、との區別が自然について来るものである、そして『繪の味』が、しつくり自分に味はれる様になる、そして一度覺へた味は、生涯忘れることもなく、次から次へと、其味が深くなつて行くものである。

色々な酒に對して、良い、わるいを味ひ盡くす事が出来てくると今度は、酒に對して嗜好が出てくる、白鷹も良い、菊正も良い、酒だし、しかし、菊正の方が『性に合ふ』と云ふのがそれである。

繪でも、それと同じ事が云はれる、此繪も良いし又、此繪も良い然し、此の方が『自分は好きだ』と云ふのが、つまりそれである。

そこで私は、『繪の味』を知らふとする人は、數多くの繪に、たんなんに、長い時間、勞とせず接することである、虚心に胸襟を開いて偏する事なく、見ることであり、そして『繪の味』が、だんだん心にしみ込んで來たら、少しづつ

範圍を狭めて、こんどは深く探求して行く事である、そふしてゐる内『自分の性に合ふ味』が確つきり意識されて来るものである。云ひ換えれば、繪の味を知りたしたのである。

それからは、どこ迄も『その味』に徹底的に入りびたる事である酒なくて、何の己れは櫻哉——と云ふ處迄、漕ぎつけるのである、云ひ換えれば、『凝る』だけこつてみる事だ、その内に豁然と『味』をにぎることが出来る。

元々、繪には様々の流派も、様々の形式も數多いけれども、煎じ詰めれば、源は一つである、ベルモットもキウフソウもシヤンパンも、其名も、其味も、全く別の物の様であるが、其源は葡萄の二に歸するのと同じ事である。その迷ひも、自然に解けて行くものである。

只浮氣だけはいけない、酒の上の浮氣も禁物であるならば、繪の上では尙更である。

## ◆廊下風聞記

漢 江 漁 郎

○總督府の圖書課長上内寮策氏は、長い間——もう二十年も日蓮研究をやり、その方では、既に一家を成してゐるといふが、今もつて盛んに文獻を涉獵してゐる。

○氏の経歴で、面白いのは、學校を出ると先づ、久原の常陸銅山に就職したことだ。朝鮮に來ても專賣局の平壤支局長や、大邱の府尹などもやつた。大邱では、特に評判が良かった。何にしても銅山出の圖書課長は珍らしい。



# 亡友を憶ふ

山口太兵衛

此處數年間に森勝次、中村再造、秋吉富太郎、和田常市の諸氏及び最近小林藤右衛門氏等相尋で白玉樓中の人となる。寂寞無常、轉た悲哀追慕の念を禁ずる能はず。

諸氏は孰れも京城財界の巨頭にして相當の勢力と信用を有し一般より將來を囑望され諸氏も亦心算かに期する所ありしが一朝二豎の犯す所となり空しく壯圖を懷いて不歸の客となる。私共友人一同の遺憾は素より朝鮮の爲めにも淺少なからざる損害であると思ひます。

爰に私は亡友を憶ふて所懷の一端を披瀝しますれば、則ち諸氏は財界に一頭地を拔きたりし丈け世間より種々なる妄評を肆にされますけれども聖人君子や乃至神佛を以つて吾人を律することは聊か酷ではありますまいか。殊に批評者の多くは楯の半面を見て他の半面を識らざるのではありますまいか。諸氏は已人として多くの美點と陰徳を施し公共的にも多大なる犠牲を拂はれたる事蹟は實に枚擧に遑あらずと斷言し、私は諸氏に代りて敢て説明することを憚らないのであります。

尙ほ小林氏以外の諸氏は、貧乏人の私をして其遺產整理に關する後見人乃至相談役とせられた一事は奈何にも皮肉の感なきにあらざりしも幸にして堅實にして正當なる相續人あり依然獨立して事業界に雄飛しつつあり何等老生の容喙を要せざる點は草葉の蔭にて微笑を湛へ安心瞑目せらるゝ事と信じ聊か以て意を安んずるのであります。

# 征服

足立丈次郎

○人間には野獸性が幾分存在するものと見え、征服と云ふことには何とも言へぬ快味を覺ゆるのである、征服は即ち勝利であり成功である、勝利を獲んが爲めに努力すればこそ人間は進歩もし向上もすることより考ふれば、征服は弱肉強食の様に聞え、野獸性の様だが寧ろ之は人間の本能性ではあるまいか。

○ナポレオンが歐洲全土を席卷し、東郷大將が露國艦隊を全滅せし、何れも是れ征服の最も大なるもの、追想しても無限の壯快を覺ゆる、孜々勉強の後博士の稱號を勝ち得たのは學問を征服したのである、仕事を征服して大富豪となり、政黨を征服して政權を握る、又人世の快事である。

○私は或日曜の朝、庭に出て雜草の繁茂せるを見、草取を始めた、最初は一部のみ止むる積なりしが、遂に移柄鍬を取り出し一草毎に根こそぎ刈り始め、二時間許かゝつて遂に全部を刈除し盡した時は、我は遂に雜草を征服せりと云ふプライドを感じ一種言ふ可らざる快味を覺えたのである。

○雜草を刈除するにもそれ相當の勤勉と努力と忍耐とが伴はねばならぬ、大征服をするには更に大なる勤勉と努力と忍耐とが必要であることは申すまでもない、吾人の世に處するや積極的に勝利を得る即ち征服者となる覺悟を以て、常に勤勉と努力と忍耐とを修養せねばならぬことを、私は今更の如く痛感したのである。

庭ならて世の醜草をねこそきに  
刈りつくしなば嬉れしからまし

# 無名の名人

つて知るのである。

某地の同業會社の發電所が落成し、いざ試運転となつて機關が動かない、幾人かの博士や技師が

の陰にて微笑を湛へ安心瞑目せらるゝ事と  
信じ聊か以て意を安んずるのであります。

庭ならて世の塵をわねなきに  
刈りつくしなば嬉れしからまし

# 無名の人

## 鉅鹿曉太郎

(鐵道局)

○齒の無い菓子師  
農商務省時代技師を奉職した人で一本も齒を持たぬ人があつた。

菓子鑑定専門家である、一生を菓子と奮闘した名残りは全部齒を失ふたことである、眼をつむつて口を開けると羊羹の一切れ或は饅頭の一片を投入される、齒齧に噛みしめ舌頭に二三轉すれば立るに製造所を云ふ。之れは綾瀬の饅頭、岡野の羊羹と。

地方へ出張すると其地有数の菓子舗が見本を携へて宿に伺候する而して謹んで味利きを懇願する、之れは練りが若い、火が足らぬと缺點を指摘する、菓子の神様見た様な技師今健在なりやと思ふ。

○絲の數を的てる番頭  
東京京橋のさる洋織物輸入商の番頭君、斯業に従事すること三十年、夜陰瞑目して織物の表面を撫でる、而して其の絲の數をあてる、一時八十五本、九十三本と敏感な指頭は明けた兩眼よりも遙かに的確である、忌々しがる小僧連が寄つてたかつて彼を試むるも未だ一度も間違はない。

○老杜氏の神技  
清酒「福娘」の醸造元で五十年杜氏を働き七十餘才カクシヤクたる老人が居る、定まつた時期に桶の栓替へふ仕事がある、之れは杜氏の腕試めし見た様なもので、左手に栓を抜き右手新しきものを差し込む、間髪を容れないのである

一寸間誤つくと三石位の酒は床上を流れる、下に白紙を敷いて三滴をした、らす程度に此の作業を終れば上手である。此老杜氏は驚くなけれ一滴も溢さない、まだある此の栓替への瞬間ブンと鼻を衝く酒の香で桶裏の微の有無を鑑定する、『此桶は替へて置け裏に微が三つある』、引つくり返へして見ると牡丹の様な大きなやつが果して三つ。

○咽酒の大家  
釜山で成功し失敗し京城で再成致した酒屋某君は咽酒の大家である、此の鑑定力が彼を成功に導いたのである、銘酒と云ふ銘酒が悉く同一醸造場て出来ない、場合によつては似寄りの酒で補充されて立派に通用して居ることは御承知の通りである、レットルが大手を振る世の中である、随分思ひ切つた話も仕入れてあるが一寸憚る、此小賣屋さんに頼めば、希望の酒に寸分違はぬ安い酒を見付けて呉れるのである、知つたか振りをすれば思ひ切つて誤魔化しても呉れる、他の追隨を免るさぬ天分を其商賈に縦横に發揮して居る。

○音で知る電車の故障  
朝鮮のさる電氣會社に三十年勤続の技師M君、職工より叩き上げた人である、車庫の前に立つて歸り來る電車の音を聞いて居る、故障車を指定して修理に移す、而も其故障箇處を明示する悉く音によつて知るのである。

某地の同業會社の發電所が落成し、いざ試運轉となつて機關が動かない、幾人かの博士や技師が弱りきつた、依頼電報は此のM君を其地に運んで行つた、『運轉して呉れ』『運轉は出来ない』『いややつて見れば判る』、運轉を初めた、『判つた之はポンプが悪い』ポンプの修理でドン／＼動いて試運轉了。

○測量の神氏N氏  
鐵道測量を四十年やつて數年前物故したN氏はよく新線測量に出かけて『線路が見える』と云ひ云ひした、多年の経験より歸納して山川の横様、地勢の状況より線路を通すべき一線が彷彿として眼前に現はれるものらしい。

前面に大きな山がある、線路は之を越さねばならぬ、山容を熟視したN君『此の山は上りは六十分だが下りは八十分だぜ』とまだ見ぬ向側を測量して終ふ、三日も四日も費して向側を實測すると果して此の勾配は的中して居つた。

以上は筆者が親しく知る現存人又は故人であり又確實なる人より聞き得た事實である、中には姓名を明かにしてよい人もあるがわざと之を差し控へた。

**鰻井** 五拾錢

定評あり  
先づ御試  
食願上候

お壽司

本町五丁目  
**阿波文**  
(電本一八三七)

# 雨山先生の詩

## 加藤灌覺

(總督府學務局)

私は本月の下旬、第八回辭展の審査委員として來城せられた、長尾雨山先生の東道者として、金剛外山の方へ出張した。

長尾先生は、我内地に於ける詩書家の中でも、蔚然たる大家であられる。先生は夙に東京の帝大で漢文學を專攻せられ、學習院や美術學校などで教鞭をとつてゐられたが、程なく榮進せられて、第五高等學校や第一高等學校や、東京高等師範學校やなどの教授として盛名を馳せてゐられる傍ら東京帝大文科の講師を兼ねてゐられた。かくして數年を過ごされる間に、支那側からの招聘に依つて彼の地に渡られ、都合十餘年間を斯學の研究に費やされた後、目出度大正三年に歸朝せられて以來は、専ら京都市に住はれて斯道の爲に竭して來られた。

我朝鮮總督府美術審査委員會の、第八回の朝鮮美術展覽會が、第三部の審査委員としてかゝる舊宿をお迎へしたのは全く大なる成功であつたといはねばなるまい。依つて茲には簡単に先生の履歷を御紹介すると同時に、曾て私が金剛外山の東道者として出張してゐた際、漸く其懐しきの中に記憶してゐた、先生の即興詩を紹介して、斯道に興味を持たれる方々への御參考に供したいと思ふ。併しながら何分東奔西走の間に於ける記憶であるから、或は多少の誤字などがあるかも知れない。けれどもそれは、全く文責が執筆者そのものにあるとして、特に御容赦を願つて置きたいのである。

金剛山雜詩 一

神工鬼鑿玉芙蓉。無土層巖生翠松。  
行看金剛最勝處。白雲一萬二千峰。

同 二  
玉女峰前玉流溪。九龍淵水走成蹊。  
忽懸絕壁如飛鳳。餘勢生風萬嶽鳴。

同 三  
深入翠微樵徑分。毘盧山色露氤氳。  
集仙相揖神溪寺。明月千峰半白雲。

同 四  
雲樹連亘鐵關東。維石巖々勢峻雄。  
遂至金剛萬物相。名山天下眼中空。

過鐵關嶺下  
禾黍不生鳥飛絕。天籟曠野似穹廡。  
茫茫蒼々鐵關路。十里高原一木無。

舟發元山  
渺茫波浪連碧空。女眞旆帳雲氣通。  
老吾壯志未除得。騎鶴直欲北溟窮。

餘りに簡單ではあるが、今回はまづこれだけで擱筆させて頂く。

見 焉 焉 見  
茶 酒 後  
三 一 木 三

○博覽會内には何百といふ美人がゐたが、その随一は、平北館のお何君といふ娘ださうな。

○この娘さん、新義州の料亭『千成』の養女で、頗る氣位が高い。お茶でも運んでやらうといふのは勅任以上の役人。普通の洋服細民には、一瞥も與へぬ。若い先生運フン憤に及んで、『實に怪しからん、社會問題だ〜』

○うしろの方で、ニヤ／＼笑つてるものあり、『ウフフ……』、よく見れば、平北將軍とかいふ男。いち早く所有權を設定してゐるのであつた。

○中央朝鮮協會の連中、京城へ乗り込む列車中、『中島さん、電報！』、開封に及ぶと、『秋晴れのソウル(京城)の街の賑やかさ青い灯もあり赤い灯もあり……ウリのナーさん早くお出でよ』、大評定の結果『どうも大和町の悪戯者らしい』

# 明盲亂談

ものである。君は信用の失墜と言ふ見え無い大きな且つ回復の出來無いものがある事に氣付か



# 明盲亂談

高橋昇

(三菱載寧鐵山)

## うちへ歸る

酒吞は折々愛敬のあるゴシツブ種を提供する。

『サアモーうちへ歸らう』と立ちかける。時は眞夜中の十一時過ぎ、所は郷里の家、かく言ひ出したのは叔父で、其家は二里程離れて居る。

『今から歸るつて明日の朝早く歸ればいぢや無いか』

『イヤ歸らう』

『何を思ひ立つて此の眞夜中にサ』  
止め役は父と母である。實際モー大分酔つては居るし、如何に馴れた道とは言へ、間違ひでも有つては……、亦さう急に歸らねばならぬ用も無い筈なので止めるが、眞面目な顔をして、どうしても歸ると言ふ。

『強いて歸るなら歸さぬ事も無いが今夜に限りどうしたのか』  
『うちへ歸れば、盃の一つや二つは有るからね』  
と涼しい顔をする。

成程叔父の手許に盃が無い。互に獻酬して居るうち酔が廻り、父が老眼鏡の掛けつ放した。

『イヤ是は失禮、マア一杯』  
我が意を得たりとばかりに

『モー歸るのけやめ様』  
此一幕は十數年前に演出せられたもので、『うちへ歸る』の一言は

今に活用せられて居るが、登場人物の三人共既に此世に無い。即ち記して三つの靈を弔ふ。

## 仲裁役

此頃ある仲裁を依頼され、折衝した時の應答の一部を書く。

△『一方では名譽を毀損され、差當り食ふに困る様になつて居るのに相手は僅そればかりの金を出し今後全く何とも無いとは如何にも残念です』

『尤もな様に聞えるが、シカシ良く考へて見るとさうで無い。話は違ふが水鳥は只樂さうに水面を走つて居る様に見えるが、脚を盛に動かすから自由に活動して居るのである。他から見えない所で働いて居るのだ。人間も労働して居るものには、椅子に掛けて居るものは働かない様に見える、それは筋肉労働と精神労働の差がある丈で、働いて居る事は同様である、外面に見え無いから働いて居らぬとは言へ無いのだ』

『君は名譽を毀損され食ふに困る様にされ、相手は僅の金丈ですむと思ふのは外面に見える所丈を言ふのである。相手も社会的に名譽を損傷し信用を失つて居る事は社会的地位が高ければ高い程大きなもので今後はが回復は如何に努力しても出来無い

ものである。君は信用の失墜と言ふ見え無い大きな且つ回復の出来無いものがある事に氣付かないのだ』

△『和解すれば全く前と同じ様になつてこそ和解と言へるでせう、私の名譽を回復し、感情の損害を取去つて下さい』

『和解する以上さうあるべきだシカシ一度所謂喧嘩したものが子供ぢやあるまいし、どうしても眞の融和が出来るものではない、ソコで何とかあきらめる工夫として、先づ金でも取つて置くより仕方が無い事になるのだと思ふ、外に方法があるなら誰れでも金なんか取らぬ筈だ』

△『そんな金は何にもならず無くなつてしましますから、いりません』

『所で若し裁判所か警察で、金を取つて置けと言はれた時も、矢張りらぬと返すかネ』

△『其時は仕方が無いから……』  
『矢張り何にもならず無くなりなせぬかナ、また其金を取つたら感情は全く融和出来るかナ。結局國家にまで面倒をかけて世間にツマラヌ事からコンナになりましたと發表し、今後働く口を捜すにも益々具合が悪くなる。』

第一僕は他に紹介も依頼も出来無い……私も随分話しましたがどうしても聞きません、ですからアナタの方で使つて下さい……  
……そんな馬鹿な事が言へるか、それ丈でも就職口を捜すに具合悪くなるぢや無いか……』

△  
△  
仲裁役は全く厄介なものだ。言ふたら直ぐ解る様なものならば、最初から仲裁役などの必要が無い筈だから(四、一〇、三)



# 女の髪長の長さ

今 村 鞆

(南 米 倉 町)

〔二八〕

髪、髪の長さ丈餘なりとある。

『東國通鑑』には、高句麗王夫人に、貫那と云ふ女あり、顔色佳麗、髪の長さ九尺、王之を愛し立て、小后となしたが、此女奸悪嫉妬なるより、王は之を囊に入れ川に流して殺した事が記される。

日本の方は、古い所で、『應神記』に天神は日向へ使を出し、諸君年の女、髪長ひめを召さしむ……とある。

『源氏物語』末摘蓬生の巻に、此の末つむ花、年頃召し使ひし侍従と云ふ女に、かたみとしておぐしの抜け毛を、かもじに仕給ひけるが、九尺餘り計りにて……云々とあり、『宇治大納言物語』に、女御御木丁のうちに、御鏡の箱を枕にして臥させ給へる、おぐしと美はしく、御丈けに二尺程餘りたまへり……とある。

『大鏡』にも、左大臣師尹のおんむすめ、村上のおん時の、官廳殿の女御、車に乗り給ひて、おぐしの裾は母屋の柱のもとにぞおはしたる、一筋をむつの國の紙に置き給ひしに、筋見へたまはず……とあり。

『兼禮錄』には、熊野山中に長さ八尺計りなる女の屍あり、髪は長くして距に至る、口け耳のあたりまで裂けて、目も太なり……とあり、之れは少しく肩唾ものだ。『中陵温録』の、江戸某の婦人は髪の長さ九尺、其髪を曳く處、また三尺に過ぐ、毎月三四尺を断てども、忽ち又長すること三四尺今は剃つて尼となる……とある。此れは明かに病的のもので、嘘では無い。

又『宗祇諸國物語』に、飛彈の國にて、女の髪之二丈に餘るあり俗に髪の長きは、毒蛇の相なりと

頃日内地から来た某客から『朝鮮の妓生に、年増妓生の無き理由奈何』と云ふ問を受けた。

自分は之に答へて『夫れは髪に毛に關係がある、日本の鬻者は、髪かたちに技工を加えて、年齢をゴマカス事が出来るが、朝鮮の妓生のあの頭の形では夫れが利かぬ、のみならず朝鮮人の客は若いのを好くに原因する』と曰つた。

一體に朝鮮人は内地人より毛が少くない、何處の毛も少ない、髪の長さも亦劣つてゐる。而してカモシは使つて居る。

濟州島の間は、陸地朝鮮人よりは毛が多い、アソコの女は貧乏すると髪を切つて賣る風があり、明智光秀の妻君が澤山に居るユンナ話から女の髪を書く氣になつた。

日本の昔の女の髪は、生へる儘の姿を、自然のなりに垂らして、其の丈け長きを誇つた、當時は髪の長さが女性美の一要素であり、而して男性が憧れの的であつた。

天武天皇のおん時に、結髪令が下つたが、行はれずして、平安朝に於ては、かの百人一首の繪に見るよふに、みどりなすふさくとした、ねば玉の黒髪を、柔らかに絹絲の總の如く、背後に薙ひ輝かしたのである。

其の後、結髪の風習が行はれて日本の女の髪の長さは、昔しに比

して短くなり、今日では其の長さよりは、濃ゆさに重きを置くよふに墮した。

伊豆の大島、八丈島等の女は、徳川幕府時代まで、髪を垂らして肩から、古代からの長さを傳へて居た、『伊豆七島日記』に、女の髪長く、特に長きは六尺三寸許りあるを見たとある。

女の髪の長さは、其天リンの質にもよるものであるが、中には形體的の整一を欲いだ、畸形に由来するものもある。

文獻を漁つて、其の長毛の事を述べて見よ。

先づ支那の方から言へば、『大平御覽』の中に、王子年の拾遺録を引き、帝尊高辛氏が諫の女を娶つた、此の女は生れて、髪が足と齊しく、地に墜ちて居たとある、此れは神話に近い。

『唐書』に、靈皇后が生れて、髪は垂れて頭に過ぐ、三歳にして髪は身と齊し、とある。『五朝小説唐粧機記』に、陳蓮の妹は、才色甚だ美なり、髪の長さ七尺とある。又『淵鑑類列』に、南史に曰ふ、陳の後主張貴妃は、髪の長さ八尺漆の如しとある。本項以下は少し割引しても、事實と見なければならぬ。

次に朝鮮女の方は『大平御覽』に、車頰の秦書に曰く、符堅建元十八年、新羅の國より美女を獻ず國は濟の東に在り、其の人多く美

云ふ程に、己れもろるさく思ひて能き程に切り捨つれども、一夜の中に元の如くなりて……とあるのも、南風司書に云ふ。

かしたのである。  
其の後、結髪<sup>ムスビ</sup>の風習が行はれて  
日本の女の髪<sup>カミ</sup>の長さは、昔しに比  
べ、半<sup>ツ</sup>の長さになり、符堅<sup>フケン</sup>建元  
十八年、新羅<sup>シララ</sup>の國より美女を獻ず  
國は濟<sup>ツ</sup>の東に在り、其の人多く美  
俗に髪<sup>カミ</sup>の長きは、毒蛇<sup>ドクヘビ</sup>の相なりと

云ふ程に、已れもうるさく思ひて  
能き程に切り捨つれども、一夜の  
中に元の如くなりて……とあるの  
も、前項同様である。

『消閑錄』に曾根甚六と云へる  
もの、妻は、至りて華貌にて、淫  
婦なりしが、其事顯はれ、罪せら  
れたり、梟首<sup>カウブ</sup>になりし時、髪長<sup>カミナガク</sup>  
く露門臺より地に至れりと云ふ、云  
々とある。

女の髪<sup>カミ</sup>の長いものは、他に心理  
的、生理的の特質があるか否やは  
別問題として、昔は其の長いのを  
美の上から禮讚した、此の考を一  
層擴張して、少しく邪道<sup>ジャダウ</sup>の方面へ  
迄擴張し過ぎたのは、以下に記す  
如きものである。

『倭訓栞』には、吉野天の川の  
辨天に、義經の妾靜の髪あり、長  
さ八尺云々と婉曲に書いたが『史  
籍集覽塵塚物語』には、南都諸大  
寺の寶物、一にあらずして種々の  
靈寶あり、就中興福寺の寶藏中に  
様々の佛像其他の重財あり、其中  
に丸き箱あり、其の箱の中に女の  
髪あり、丈一丈餘、其の黒きこ  
と比類なし……此れ則ち皇明（光  
明のこと）皇后御壯年の頃のおぐ  
しなりとぞ、此れを取りて見れば  
恐ろしきものなり、更に今様の髪  
に似ず、……九百年前を今見るこ  
とちす……しかのみならず、吉野  
どろ川と云ふ所の奥に、天の川と  
云ふ所に、辨才天あり、此の所に  
義經の妾白拍子靜が髪とてあり、  
長さ八尺許り、此れさへいみじく  
思ふ……云々。

又此の所に、七難がす、毛と云  
ふものあり、長さ五尺計り、其の  
縁起を聞けば、甚だ尾籠<sup>ビロウ</sup>の事共な  
り、但し此のものは、吉野に限ら  
ず、諸所にありと……云々と、別

# 晴天の朝

角田不案

あからひく日にやけくろきしふとのまはだかの  
身にて朝を呼吸す  
まはだかのししふとの身を水に似る朝の空氣にひ  
たしたりける  
まはだかにわがたつ庭の朝あけの晴天に妻はもの  
言ひてゐにけり  
すぎものの水はたりつつやうやくに空にさしく  
も朝日子のひかり  
地のしめり白ろきすぎものの水はたりつこの晴  
天の朝はたくるなり

## 野の畑

野の畑に日はさやかなり胡麻からのすく立つ幹は  
青黄ばみしつ  
胡麻からの黄ばみ秋づく野の畑にみのならぬ瓜の  
蔓伸び青し  
ももながに胡麻刈りてゐる田舎娘の胸はだけおり  
そのすこやかさ  
素洗足にて胡麻をかり居る田舎娘の髪に匂ふもこ  
むの赤きくし  
胸をはだけ秋日に娘胡麻を刈れり胡麻かりしあと  
の照りのひそやか  
まかがよふ秋のひかりのなかなれば胡麻刈れる娘  
のましてかなしき (四、一〇、五)

個のもの、如く區別して書いてあ  
れど、皆同一の尾籠<sup>ビロウ</sup>のものである

『扶桑略記』になると、齋露骨  
となつた、曰く治安三年十月十七  
日入道前の大相國紀伊國金剛峰寺  
に詣つ、是れ則ち弘法大師の廟堂  
也……、次に本元興寺に御す、  
寶倉を開く、令寶中此和子の〇毛  
あり、宛として蓋の如し、其の寸  
尺を知らず云々と、ハッキリ得體  
の知れたものにしてある。  
『聞窓瑣談』には、上野國甘樂  
郡神流川に、慶長の頃洪水の時、  
板橋へ怪しき毛流れかゝる、色黒  
く艶美くし、卜者湯立して祈る、  
同村野栗權現の流し玉ふ〇毛なる  
よし、湯立の唄が云ひしより、彼  
の社に納む……寶物として毎年六  
月十五日、祭禮の時神輿を渡す後  
ろより箱に入れ、恭しく持ち歩行



く……云々。神様の後から、マシメに恭しく持ちあるくのは、甚だ面白い圖である。

此意味深長なる長髪が、日本國中到る所にあつた事は、『三義雜記』に悉難の揃毛……箱根權現の什物、下總石下東弘寺、竹生嶋、信州戸隠山等であり、往古七難と名くる其人の○毛なり、昔は長き物の例に接く、清少納言枕の草紙の中の、長きものの中に、山婆の毛とあるものなり……、清女は流石だ。ヤマンバの毛とは、よく才筆を舞はしたものである。

徳川時代の俗謡に、お竹ドンお竹ドン……云々と云ふのがある、あれもつまり七難體讀思想の殘片でなくてけならぬ。

斯かる事柄は、長髮體讀の擴張思想のみならず、かの特殊の靈域の、威力を信仰する考にも由るものでもある、あの髪をマジナイに

用ゆる風は、世界の各地にある、朝鮮にもある。

長髪は、現はれたるも 隠れたるも、其の何れによらず、男性をチャームするらしい、嘗て高橋お傳のアルコール清遺物の、スバラシサを見て、『明治の初期に生れなかつたが残念だ』と吐息をついた男ありしかや。

洗髮の何某と云ひし有名な醫者は、其の長髪を故らに洗髮にちらして誇つたものであるが、彼が死は、長い歡喜に溢れた實際の極樂往生であつたと傳へられて居る。

總て髮の濃さは、他の濃さにも關係あり、又毒婦にも關係ありそふであるが、夫等の事は専門家の攻究に譲る事として。

筆序で一つ、畫家彫刻家等の各位に問ひ度いのは、ギリシヤの古代の畫や彫刻、あれは、其の時代は、現在トルコに行はれて居る

様に、毛拔を用ゐたり、又は藥を塗布して除去したものである、夫れであるのに、現在の人を描くときに、何が故に、其の眞を寫さず古代の偽を學びて、長髮體讀の思ひを詐るやと。

も一つ筆序で……近頃大問題となつて居る事件の、中のある人其人が南國シユロ、ピンロージの國からのゆかりにより、召運れた一人、之れはすばらしき長髮姫で酔ふとよく、人々に其の見事さを誇りがに示したとやら、夫れを實見した倭城臺邊の老妓のさへやき話である。

わきも子がねくれたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るを悲しき此の人麿の歌の『悲しき』を『樂しき』とした方がよい様に思ふ。筆の命毛長きに過ぎなば、七難を招く、此のあたりでトバリを下ろす事に仕よふ。

◆世間はなし

漢 江 漁 郎

○群馬縣高崎市の警察へ、芳紀十六七の一少女が訪問して來た。

○要件は？と訊くと、過般の宮中武術大試合の時、日本一の大劍士と、折紙のついた持田範士……アノ人が今歸省してゐる筈だ。警察の斡旋で、『あはれ雌雄を決したく存します』……『では、あなた、日本一の折紙を争ふつもりかナ』、『ハイ、卒爾ながらその覺悟で御座います』『ムーン』

○だが、幸運なる持田範士は、丁度郷里には歸つてゐませんでした。で、このことをいひ聞かせる

と、『さらば、關東隨一の劍士菊池十郎左門(多野郡入野村眞庭念流)殿と是非く一本御手合せ願ひたい』とて聞かぬ。

○警察でも、ホト／＼持テあましたといふ。

○この少女徳島縣三好郡瀧野山山本重五郎長女まつ、當年十七歳……兎に角村一番の遣ひ手であるさうな。

○高橋是清翁は朝鮮學生の同情者で、『閣下郷里へ歸りますから紀念のために、御揮毫を』といへば、見ず知らずのものにも、『ア一よし／＼』といつて、快く筆を執る。

○それに味をしめた連中、手を

朝鮮教育新聞

社長 高橋章之助

發行所 京城西小門 教育新聞社

品リ雜記

田中總裁急死す、さてこれから  
の政友會は一體どうなるだらう。



手帳裏には書いてあるが、  
た。で、このことをいひ聞かせる

○それに味をしめた連中、手を

發行所 教育新聞社

# 品川雜記

中島 司

(中央朝鮮協會)

## 田中總裁の死

今日は(九月二十九日)朝から雨がシトシトと降つて佗びしく鬱陶しい日曜であつた。郊外散歩には好適の時季だが、雨ではどうもならず、さりとて淺草邊まで乗り出さうほどの奮發も起らず、垂れこめて本を讀んだり、子供と遊んだり、ラヂオを聴いたりして時を過して居ると、午後の二時頃號外の鈴音がして來た。勳章疑獄、鐵道疑獄、朝鮮疑獄、それからそれと忌はしい穢らはしい事件が聞から明るみへとさらけ出されるので、これ等に關聯した又何か新しい報道だらうと思つて買つて見ると、意外にも大變なニュースだつた。『田中政友會總裁今朝突如逝去、青山自邸で狭心症』とある思ひも寄らぬ出來事だ。

最近の立憲政友會は全く言語同斷の窮境に陥つて居る。田中總裁の身境は進退兩難に陥つて居る。重大なる政治道徳上の責任よりして田中總裁の引退は當然且つ必然であるとの論が高まり、政友會は今日速やかに黨内を淨化するに非ざれば更生の途なしと謂はれて居る。其の重大なるクリチカルモーメントに總裁田中義一男け黨首を引退するよりも寧ろ徹底的に此の世を辭し去つてしまつた。まことに有爲轉變の世の中である。政友會の淨化清黨の速かならむ

ことは、政友會内之を望むものも多いであらうが、田中總裁をして直ちに引退せしめ黨首を更ふることは種々困難な事情が想像せられて居る。併し私等から見れば田中男けもともと武人であり而して政治家であるから、耻を知り之に處する覺悟は充分にあるべきだ、其の引責は時の問題で且つ遠からざるべきを豫想された。思ひきや突如として其の死を聞かむとけ、寧ろ同情に堪えない。

つい五日ほど前の二十四日の午後故素空山縣公の三回忌法要が築地本願寺で営まれた時、讀經半ばの頃に田中男け紋付姿で如何にも元氣さうに本堂へ入り來り、泰然として山の如く座した。式が終り休憩室で望月圭介氏などと新刊の素空公の傳記や蘭畫帖の出來榮えを賞しながら愉快さうに語つて居る田中總裁の身邊の何處に死の影がさして居たらう。五日の後にこんな事にならうとは夢にも思つた人はあるまい。

總理大臣として又黨の總裁としては、とても危なつかしく見て居れない人であつた。随分失態もやらかし、現に政友會をして受難の秋に遭はせて居る。併しその性格から推して憎んで憎めない人であつた。同じ死ぬものなら、總裁をやめてから死んで欲しかつた。否寧ろ引退して長生きさせたかつた。

田中總裁急死す、さてこれから政友會は一體どうなるだらう。不意に梁木が落ちたので、根本から建ち直す外はあるまい。しかも今は疾風怒雨の最中である。建て直すにも此風雨の中では大工も手が出ない。氣の毒の至りである。併しそれも因果だ、自らあきらめる外はなく、大死一番出直して来るより他に途はない。たとひ代議士の數が半分が減り三分一に減つても宜しい、清く生れ代つて來ることさへ出來たら、政友會は萬歳だ。何と云つても新日本の建設史上幾多の光輝あるページを占むる政友會である。このまゝ、没落しては餘りに悲慘だ。特長もあり特色もある古い政黨だから忍び耐えて辛酸を嘗め盡したら必ず回生ができることを信ずる。

政友會には人情味のある人があると謂はれ、個人として好ましい人も多々あるが、政黨として集團的に見ると、何となく政權利權の漁奪ばかり念がけるやうで、横暴、豪奢、驕慢な政黨であるやうに感せられて不愉快だつた。本當はさうでないかも知れないが、今度のやうないろんな疑獄が生ずると、何だかこれまでの進み方に間違ひがあり、踏歩を誤まつたやうに思はれてならぬ。有りていへば兎角是が非でも押し通すといふ横車式をやつて來た。輿論といふのを無視して黨利黨略に没頭して來た。勢と力とを恃んで、思想を壓迫するに急にして、之が指導を誤つて來た。それが政友會だといふやうな感じを私は持たせられて居る。

若し政友會にして更生するの曉に於て、眞に國民大衆の代表的政黨たるべく公正、廉潔、殉理的な

主義精神に蘇つて来るならば、其の前途は洋々たるものがあらう。さもなくて舊態依然たるに於ては滔々たる時代の潮流は一氣に之を押し流し覆没させずには措かないであらう。田中總裁の頓死と云つてよいほどな急卒な逝去は悼ましい限りである。併しそれも運命だ。

東京通信

本因坊

鐵假面

○二體、碁と將棋と云ふものは兩立しないものだ。議論は抜きにして實例をお目に掛けよう。

○圍碁名人本因坊秀哉氏は、將棋を指す事は指す。頗る下手だ。或本に將棋も初段位指すと書いてあつたが、訛傳も甚しい。將棋は我々にすら平手で對抗が出来ないのでから、格を附ければ初段マイナス十段と云ふ處である。其癖、思案は頗る長い。一手々々、相手が億々々するほど考へる。それで少しもいゝ手が出ない。精々考へて悪い手を指し、コロリと負かされる。碁とは正反對である。

○碁は大家としては、早い方だ。先年、中川八段と伊香保で十番碁を打つた時、一手三時間と云ふレコードを作つた事もあるが、大概は餘り長く考へないで打つ。讀賣新聞の對抗戦の時だつて、一方の雁金氏は時間切れになつたにも拘らず、こつちは少からず持時間を剩した。其上、對局の態度が頗る立派だ。盤に向つても盤を見ない

而して政友會として田中總裁の爲めに甲合戦をなすの意氣あらば、其の敵は外に在らずして曰れに在るを自覺せよ。其の更生の最善策は唯だ此の一事だ。

(昭和四年九月二十九日夜政友會の大混雜を想察し暗澹の念に驅られつゝ之を記す)

況んや傍人をや。衆人稠座のうちにあつても、無人の境に端座して居る如く、黙々として思索に耽る處に、脱俗の風韻が漂ひ、活きた仙人をまのあたり見るやうな氣がする。流石に名人だと感心させられる。處が、將棋になると、ガラリと變ける。盤に向つて黙々たる點は同一であるが、仙人的風格は何處にも見られない。我々同様將棋盤に囁り付いて居て、椽臺氣分を横溢させて居る。詰り、碁に於て仙人、將棋に至つて凡人に歸へる。それ程の差があるのだ。

○將棋名人關根金次郎氏は、碁を打たない。打たないのでなくて打てないのだ。次ぎの名人に擬せられて居る土居八段は、少しばかり碁を打つ。是は本因坊の將棋以下だ。ザル中のザルで、初段に井目風鈴附きと云ふ拙劣さである。將棋を指しては、名手續出、一代の才人と云はれて居る土居君も右を持つてはカラ駄目で、無名の雜兵に醜弄されて居る。宮松七段になると、土居君より旨い。平野六段になると、更にそれより旨い。詰り、將棋の格が下れば下がるほど碁が強くなるのである。

○碁の方もこれと同じ傾向になつて居る。中川八段は本因坊より將棋が強い。高部七段もそうである。近頃十番碁で男を上げた鈴木

【三三】

七段は二重圍點附きの下手將棋だ。土居君の碁と同格である。面白いのは、木村八段と高部七段の取組みで、將棋だと、木村君が四枚引いて綺麗に勝つが、碁になると八目置いて樂にまかされる。實におかしい位だ。

○これだけの實例を擧げたら、賢明なる讀者は、碁と將棋の兩立難しい事を充分了知されたであらう。碁と將棋とは條件が違ふ。碁は地域が大切であるが、將棋は敵を倒さへすればよい。本因坊などが將棋に強いのは、敵を倒す事よりも、駒の損總ばかり勘定して居るからだ。

羊髯庵小話

漢江漁郎

○京城府の名物男……羊髯庵主人上杉直三郎君も、いよく官を罷めた。

○直情徑行、面を肩して、誰にでも自説を進言する男だから、人好きにせぬかも知れぬ。

○尤も今度罷めたのは、その狷介不屈といふよりも、第一アノ特徴のある髯——ヤギ髯が祟つたからとのことだ。

○上杉君それ自身は、アノ羊毛を生命の二番目にしてゐるが、實はアノために、年齢が十歳以上老けて見られる。形の上から退官してもらいたい部類に這入る。どうも持主は、大分得意らしいが、羊毛は、當世向でない。

○先生存外若いのである。五十には、大分間がある。意氣は大に用ゆべし。皆さん御一考を願ひます。

剩した。其上、對局の態度が頗る立派だ。盤に向つても盤を見ない

將棋が強い。高部七段もそうである。近頃十番春で男を上げた鈴木

用ゆべし。皆さん御一考を願ひます。

かばやき  
きんぶら

川長

旭町一丁目



茶いろく  
茶器いろく  
**青々園茶舗**  
京城本町二丁目  
(電話本局二二二番)

外科 皮膚科  
**瀬戸醫院**  
院長 瀬戸 潔  
京城旭町二ノ八  
電話本局二四九八番

西洋料理  
支那料理  
**泰明軒**  
東京芝新櫻田町  
衆議院そば

お二人で一つの保険に  
は入れる然も保険料は  
普通の一人分餘ですむ  
**東洋生命京城支店**  
一萬圓契約で八千五百  
圓の現金定期配當の外  
不老保険に普通配當がつきます

M式巻上日覆  
ホロ形日覆  
各種テント  
諸車用雨覆  
非常用雨袋  
フットン製  
其他帆布製品  
製作販賣  
京城中  
城西本  
前會商  
八四八二電

溫陽溫泉

神井館

京城より三時間  
新らしき樂天地

金物類

近藤商店

京城本町三ノ三三  
電話本局二五六二番

内科  
小兒科

木村醫院

院長 木村文三郎  
京城府吉野町九一  
(電話本局七二五番)

京城本町二丁目

一番瀨醫院

院長 一番瀨慶次郎  
(電話本四〇〇五番)

京城府本町二ノ七五

會社  
日章堂

時計店

電話本局八七六番  
振替京城一六九二三番

女の下駄

三十年來  
おなじみの  
最上醬油

香味  
佳絶

お上品な  
料理に  
淡口醬油

京カ

京カ

ホシ大ソース

最上醬油

淡口醬油

永登浦 大塚 醸造

女給は若し奥さんでも居つたなら  
コンナ事して頼つたまでも引ン抜  
かればお女かと思つて、その儘



# 女の下駄

## 片岡辰之助

(旭町一丁目)

T氏の支關には五年來表つきの女の日和下駄が一足、土間の右側にキチンと揃つたまゝ、汚れもせず耗りもせずに並んで居る。あの静寂な邸宅に五年間獨身で、猫の子一匹居らぬT氏の支關に女下駄とは、誰でもが變に思ふのは無理からぬ事である。その理由はT氏に尋ねた人のみが知つて居る。

彼が糟様の妻を亡つたその當時同僚の妻君や、新任の人などがT氏の家を訪ねると、中から鍵がまつて、女のない筈な支關に女の下駄がある、之れはテツキリ馴染女でも來て居るんだと思つて敵かずに歸る人が多かつた。その頃のT氏は堪え難き心中の淋しみを酒で紛らして居た。だから酒場の女とは可なりに悪意が多かつた。仲居、藝妓、女給、その中には獨身者と聞いて、チャ行つて見ようなんて同情を笠に、物好きな女もあつた。然し支關に來て、此の女の日和下駄を見ては、必ず一度は退却した。丁度死せる孔明が生ける仲達を奔らす様なもので、無言の下駄が有言に働いてるのであるまさか無き妻の亡靈が下駄の姿になつて、來る女を追ひ返す譯でもなからう。

或る宴會の席上で、T氏と約束して焼けない京劇に評判の芝居を見る事になつて居た藝妓があつたその時日が來て、盛裝したその藝妓が車で乗りつけて、左で襟を取

つて右の手で支關の小構子を開けようと引張つた、開かない、拍子にヒョッと見た女下駄、彼女は總身がゾットして髪の毛を引ツ隠された様な氣がして、危く其場に卒倒する處だつた、漸く車夫に扶けられて宿に歸つたなり、芝居どころか四五日寐て了つたとの事である一方T氏は、その藝妓が來るか來るか待てど暮せど姿が見えないトウ／＼時間が過ぎて二枚の特等券は翌日行けない都合のためにフイになつて了つた。

その後その藝妓に逢つた時に、双方から怨みの百萬編を繰返した結局下駄の罪に歸した。

或る夜のカフェエで懸意になつた若い女給が、一人の母親が今大病で何つ死ぬかも分らない、切めて暫くでも家へ歸つて附添つて看護がしたい、けれ共私には此處の主人に百圓ばかりの前借がある、その金を返さなければ遣る事は出來ないと言ふと、それを聞いたT氏は馬鹿に同情して、それは人道の大問題だ。然しそんな主人に談判したつて埒は明くまい、よし俺がつくつて遣るから來いと、約束して歸つたT氏は、遺してあつた妻の着物を全部質屋にたゞき込んで、其の日に女を待つて居たが骨も沙汰もない。一方女給は喜び勇んでT氏の支關を訪ねると、女の無い筈の支關に下駄がシャント並んで自分を睨んで居た、氣の弱い

女給は若し奥さんでも居つたならコンナ事して願つたまでも引ン抜かれはせぬかと驚いて、その儘歸つて了つた。

其の後T氏は或る公務の爲に、其の金を懐にしたまゝ田舎に出た三週間許りして歸つた時、そのカフェエで、甚だしく憔悴したその女給を見た。それは其の母親が死んだのであると言つた。此の時にT氏は下駄の罪だと思つた。

此の下駄が餘りに問題になつて二三の友人から下駄を置く説明をしろと迫られたT氏は、此の説明をすれば同時に功力は消滅するが知人間だけに公表しよう、あれは女よけでは無い、泥棒よけなんだ人が居らぬと云ふ事になると泥ツクがつける、女が居ると思へば自然留守ではないと思ふ。世間に女が隠れて居ると思はせるから下駄の役目が立つ、見玉(五年間一度も泥ツクが錆い得ぬ事)。あの下駄が飾と知れたら置く必要が無くなるのだ。

成る程ね、幽霊の正體みれば枯尾花か、それが種だつたのか、と友人だちも納得して歸つた。

### ◆屋上に立つ

三木一彦

○寄稿家T氏、高等法院に伊藤検事を訪ふ。

○検事新廳舎を自慢して、『君屋上の眺望なぞア、實に素晴らしいものだよ』、相携へて、屋上に立つ。検事俄かに意氣阻喪して、『君、ドコが、どの方向にあるか僕によく説明してくれ……』、その聲いと悲し。

○蓋し検事は、有名な近視也。

# 金澤の茶味

長 郷 衛 二

(總督府内務局)

【三八】

に之を大樋焼と稱せらるゝに至つたものであります。

長左工門は歴代茶道に熱心で、従つて茶具の作品多く、亦他の作品にも其影響が深く現はれて居ります。今の長左工門氏は九代目です。今が茶人としても相當の名聲あり亡兄とも生前交遊がありましたので、一日粟田宗極氏と共に御訪ねいたしました。陶工らしくない誠温厚な茶人肌の方でしたが、談偶々陶磁器の事に及べば、内地朝鮮の各般にわたつて論議され、初代長左工門より歴代の大樋焼の特徴、變遷、作風を説明され、はては窯の前に立つて灰加減、焼加減の實地説明までされるといふ熱心さでした。二三作品を譲り受け、翌日東山なる大樋氏の茶寮吉土庵に朝茶の御招待にあつかつて粟田茶伯宅に歸りました。

猶其外に竹窓庵宗見氏、宇治の茶舗林屋氏等亡兄の誼みを以つて各々茶會を催して下さつた。かくて皆縁から眞行草にわたる茶儀作法から喫茶の要諦、草庵茶の風韻等趣味多い御高説を承り、和敬清寂の茶道の眞意を悟る處がありました。

此五日足らずの金澤に於ける茶味は私の今後の趣味に大いなる變化を起すであらふ程の意味深いものであります。

金澤は私の最も親しみを感ずる土地です、此地の一本一石にも何等かの感興を催す雅味を存して居り、町の風物の總てに舊百萬石の城下としての良き典雅と高尚さを有して居ります、殊に就中婦人に於て人情の温順と起居動作の優かに禮儀ある事に最も心をひかれます。其處にはジャズやレビニーの狂燥さがなく、亦殊更に新らしがらんとする近代女性の嫌味も有りません、之等は主として特有の美術工藝と謡曲茶の湯生花等の普及による影響感化でありませう。

去る初夏の候此地に遊び亡兄の知人や私の竹馬の友に會つて心ゆくまで金澤の味に浸つて來ました左に一二つ書いて見ませう。

### 宗居追憶の茶會

宗居とは私の亡き兄の事です、學を修めて學にあきたらず、利休が佗茶の風流を愛し、遂に千家裏流の門に入り、許されて宗居と號し、茶禪三昧に没頭した變り者でした。晩年茶道に精進した清寂そのものの様な生活には、茶味を未だ解しなかつた私もホトホト感心させられたものであつた。

今年是其三回忌に當るので、兄の遺業である北陸茶道研究會及び滴翠園社中の茶友が故宗居追憶の茶會を滴翠園茶寮で催して下さつた、符合には實險が

『夏知らぬねやの狭むしろ小夜更けてしくものもなき月のすず

しざ』の短冊が懸り、本席では

床 清巖積物

花入 宗和一重切

花 白木櫃

釜 寒雉 瓢形雲龍

風爐 播磨 雲龍

香合 汲江齋 桐木地夕顔

水指 南京赤繪四方

茶器 時代時繪蜜

茶杓 朽木周防守共筒

茶碗 大樋黒 末廣寫政吉造

建水 サハリ

蓋置 了入三葉

菓子 蓮根羹

器 義山縁笠舟形

花のむくげの白二輪は茶入の手向には、いかにも清淨な感じに挿され、茶具は雅致と洒脱とに取合せられ、故人をしのぶにふさわしいものであります。茶寮は眺望絶佳遠山の白雲長江の靑水、うたた詩境に入るものあるなかで、お薄を戴くの妙境は、野狐茶の私にも誠に心ゆかしき事の一つであります。

### 大樋長左工門氏其他

丸谷焼の精緻と、大樋焼の雅味とは金澤の有する二つの誇りであります。大樋焼の初代は土師長左工門と謂ひ、京都樂焼の名工でありましたが、貞亨年間加賀藩主に召されて、裏流の流祖仙史と共に金澤に來られ、大樋に居をトし所領を戴き其技を傳へられた、其故

### 金 箱

- 金箱 白粉
- 金箱 水白粉
- 金箱 クリーム

三越丁子屋その他にて御求めを

同時に亦、その社會組織の安寧を脅かす有害分子に對する處置の前

た、待合には實陰が  
『夏知らぬねやの狭むしろ小夜  
更けてしくものもなき月のすず

召されて、裏流の流祖仙史と共に  
金澤に來られ、大樋に居を卜し所  
領を戴き其技を傳へられた、其故

三銃子傳の  
他にて御求めを

# 死刑

天野利武

(城大法文學部)

誰でも、自分に近い関係のある者が死んだりすると、死といふものに就て考へさせられる。考へないうまでも、何かしら深く心を打たれる。青年時代には、一種の憧れに似た氣持で死といふものを考へさへする。世の中に出て、自分の仕事といふものが、自分の心を占領して仕舞ふ様になつても、自殺者とか、變死者とかを眼のあたり見たり、また自分と親しい間柄の者の間にさういふ事が起つたりするのを聞いたりすると、やはり、多少なり死といふものに就いて心が動かされるものである。私の知人の中で、山で死んだものが二人ある。一人は、甲州の八ヶ岳で死に、一人は、日本アルプスで死んだ。二人とも私より後輩であつたが生前かなり親しく交際してゐたので、彼等の變死の報を耳にした時、彼等に感動させられた。しかし彼等の死が、彼等にとつてそれほど不幸なものとは考へなかつた。自分達の好きな山の中で、死といふものに對する何等の豫覺なしに、一思ひに死んで仕舞ふ。こんなことを云つては悪いことかも知れないが、幸福な死方をしたといふ様な氣がした。

反之、死を餘儀なくされる場合——死刑に關する新聞の記事などを見ると、それが自分と何のか、はりもない他人或は他國人であつても、殺される者の心の不幸を共

感して、自分の胸に痛みをさへ感ずる。近頃新聞に、司法大臣だつたか、警視總監だつたか、判然記憶してゐないが、死刑の決定書に署名するのが苦痛だといつたといふ様なことが、何かの處に書いてあつたのを如何にも同感しつゝ、讀んだことがある。若しそれが私だつたら、とても署名など出来なだらうと考へた。

たしか、露西亞のアルツイバアセフの書いた短篇であつたと思ふが一人の役人が、死刑執行の席に列する時の心持や光景が書いてあるのを讀んだことがある。彼はかりでなく、他の死刑執行者や、判決を下した裁判官や、其の他の關係官吏は皆、自分の職務をたゞ忠實につとめてゐたに過ぎない。しかもその間に一人の人間の死が決定され、否應なしに殺されて仕舞ふ。私は此の物語を讀んだ時に、死刑といふ刑罰の中には何かしら不合理なものがある様な氣がした。法律といふものが、合理的に或人間の死を要求してゐるのには違ひないのだが。

今、世界の死刑廢止國を見るに和蘭、那威、瑞典、葡萄牙、羅馬尼、奧太利等々、皆中流の國ばかりで、所謂強國と稱せられる國家に於ては、何れも死刑が行はれてゐるのを知る。國家といふ社會組織の安寧強固を維持する要求の強さが、その國家の強大と正比例し

同時に亦、その社會組織の安寧を脅かす有害分子に對する處置の苛酷さと正比例するといふ様な考へ方を持ち出して、上述の事實と結びつけて見ることも、全く突飛なことではないかも知れない。とにかく、死刑といふものの存在の理由がその邊にあるだらうといふことは、さういふ方面のことに暗い私などにも容易に考へられることであり、私がさきに、何かしら不合理なものを感じるといつたのもさういふ方面に關してばかりではなく、寧ろ、さういふ方面から切離して或る犯罪者によつて他の人間又は彼の屬する社會が加へられた苦痛と、その犯罪者が死刑を宣告されてから、いよく刑につくまでの間の彼の心の苦痛とを比較——無論客觀的分量的に之を比較することなどの出来やう等はないので、第三者の同情或は共感を根據とする感情的な比較に過ぎないのだが——した場合にも何かしら不合理なものを感じるといふのである。といつても盜まれたものの苦痛と、獄に行くものの苦痛とを比較して、その内に不合理を感じるといつた様な、何か隱微的な觀念を土臺としての感情に就いてのみ云つてゐるのではない。

何といふ小説であつたか忘れて仕舞つたがドストイエフスキーの書いたものの中に、殺人の被害者の苦痛と、死を宣告されてから殺されるものの苦痛との相違を細かく書いてあるのをずつと前に見たことがある。前者の場合には、殺されるものは最後まで生に對する望み？を失はない、瞬間的な恐怖はあつても、死ぬといふことは考へない。私が前に述べた、山で足を踏みますべらして死ぬ場合と似て



ゐると思ふ。しかし後者の場合では少くとも忘我的でない感情状態に於て、生命への希望を打碎かれ如何にしても脱れることの出来ない死に對する恐怖と、自分の死期の明白な自覺とを持ちながら、定められた刑期までの幾日かを苦しみ続けなければならぬ。同じく露西亞の作家たるアンドレーフの七死刑囚物語に書かれてある様にそれが無知な罪人であればあるほど、此の苦痛は大きいであらう。盗まれたものの苦痛と、獄に行くものの苦痛は、質的には比較出来ないとしても、量的には漠然たる比較が可能であるかも知れない。しかし殺人の被害者の苦痛と死刑囚の苦痛とは、私一個の感情的な判断ではあるが、質的にも量的にも全く比較の對象にもならないと思はれる程相違してゐると思ふ。

検事も裁判官も刑務所の官吏も凡て皆自分自身生きんがために、また妻子を養はんがために、そしてまた國家のために、自分に與へられた職務を忠實に努めてゐるのである。彼等の中の一人として、一罪人の死を欲してゐるものがあるだらうか。しかも、其等の人々が、官吏として、考へたり云つたり、書いたり、署名したり、捺印したりしてゐる間に、一人の人間が、何うしても脱れることの出来ない運命の中へ、しかも恐ろしい死の中に投げ込まれて仕舞ふ。斯ういふことは、全く當り前な、何でも無いことなのだらうか。其處に少しの不合理もないのだらうか無ければ幸であるが。

國家といふ社會組織の破壊的因子の除去といふことは、終身刑の他に猶死刑を設けることの必要の理由にはならない。といふ様に、

# 鶴ヶ丘

徳野鶴子

(櫻井町一丁目)

長十郎はよき味もてり高麗の器に盛りて客にすゝむも (長十郎は梨の名)  
幸運をさがしに客の去りしあとの障子にうつる靜かな夕日  
毛の國の歌人のうたよみ居つゝ心なつかしくふるさと思ふ  
X  
わが歩む丘の傾斜に柿の木をつぶら實あかく日に輝らひをり  
風にゆれつ大木の枝になりたわむ柿のつぶら實日に映えてあかし  
ゆきすりに子等も見あげて通るなり夕日に映ゆる柿のむらなり  
あかくと夕日に映ゆる柿もみぢ見つゝし居ればさみしさの湧く

素人には考へられる。死刑囚の、死を宣告されてから、死に就くまでの心の苦痛と、彼によつて殺された者、或は彼によつて脅かされた社會の苦痛といふものが、質的にも、量的にも、比較にならぬ程相違してゐるとすれば、懸隔といふことが死刑の存在理由になり得るといふことも考へられぬ。私は

斯ういふことばかりでなく、或人間が、自分のやつた行爲と何のかわりも役人によつて、死を宣告されじつと其時を待つてゐなければならぬといふその事自身の中に、そんな事が此の世の中にあつてはならぬといふ様な、不合理の感じ

を感じるのである。如何なる理由によつて、前述の諸國が死刑を廢止したかを私は知りたいと思ふ。

## ◇ドブに墜つ

三木一彦

○政友會の嶋田幹事長、今度の減俸問題を評していふ。

○『のり君、濱口さんや、井上藏相は、丁度今頃の戀愛青年の様なものだ。金解輸といふ、美しい星を、天の一方に眺め。フラクと釣られて歩く最中、とうとう減俸問題といふドブの中に、落っこつた。だが、これで少しは、實際政治といふものが判るだらう』

# 言葉と環境

吉野正之

(東四軒町官舎)

X  
昔北國のさる大名が自分の城の奥女中達の言葉に訛が多く、田舎びてゐるのを氣にして宮仕をしたことさへある京育ちの老女を聘いて女中達に京言葉の指南をさせた一年許りして老女が『もう皆さんが立派な京言葉になりました』と申上げたので殿様は大満足、數々の饒別を與へて彼女を京へ歸したさて久しぶりでおばあさんが戻つて來たと云ふので親戚や知己の人々が挨拶に行つてみるとどうだらう、老女は『ほんとにまあお久しぶりでがんです。お變りもござりましねえか』と云つた田舎言葉になり切つてゐた。

この話は作話かも知れない。然し眞理が含まれてゐると思ふ。自分の懸念なる英國人は『教室で生徒を教へてゐるとどの生徒もどの生徒も全じ間違ひをする。あんまり全じことを言はれると終ひには生徒の方が正しくて、自分の方が間違つてゐるんぢやないかと云ふ氣になる』と云つてゐるがそれに違ひないと思ふ。環境の言葉に及ぼす影響は恐ろしいものだ。

X  
あるイギリス人がニュー、ヨークに着いてすぐ友人に電話をかけた。友人との會話を一寸途切らすと交換手が『ハヴ、ユウ、スルー?』と尋ねる。『イエス!』と答へるとたん電話が切れてしまつた。

X  
後刻彼が先刻の友人と顔を合はせると『やあ先刻は失禮、話が中途になつしまつて。ニュー、ヨークの交換手は實に怪しからん話の途中で切つてしまふなんて』と盛んに憤慨した。話のいきさつを聞いた友人は笑つて、『そりや君、交換手が悪いんぢやないよ。(スルー)は英語では相手に通じなかつたか、對手が出たかと言ふことになるが、アメリカ語ではおしまひか、用がすんだかと言ふ意味になるんだよ』と説明した。彼は漸く納得して『なるほど、ニュー、ヨークでは英語は通じないんだな』と苦笑した。

X  
アメリカが英本國から獨立してまだいくらか経つてゐない。それなのに今日は言葉まで獨立してしまつてゐる。原因はいろ／＼あるがとにかく英人に言はせるとアメリカで用ひられてゐる言葉は『英語』でなくて『米語』だと言ふ。アメリカ許りではない、インドにも特有な英語が生れ、オーストリアにも變つた英語が生れてゐる。環境の影響だ。エスベランドを宣傳する人々もこの問題を忘れてはなるまい。

X  
朝鮮に於ける内地語は全く出體目だ。郷里を異にする人々の寄集りのせいもあるだらうし、朝鮮語の影響も勿論ある。今のまゝで進んだらそのうちに内地にゐる人々には判らない言葉が生れて來ないとも限らない。笑つて済されない問題だ。朝鮮にゐる内地人は今少し言葉を大事にしなくてはいけない。殊に小學校あたりでは先生達が出來るだけ完全に標準語を教へるやうに努力して頂きたいものだ。今の京城の小學校の生徒は随分訛のあるしかも五目流の言葉を平氣で使つてゐる。女學校あたりの生徒の言葉も可成亂れてゐる。あんな言葉遣ひでは言葉の黠だけお家の口が駄目になりはしないかとさへ思はれる位のが少くない。

X  
『言葉は意味さへ通ずればよいぢやないか、何もそんな入念しく氣にする必要はあるまい』と言ふ人があるかも知れない。然し言葉によつて人間の思想が左右されなるとは考へられない。

X  
自分は滯英中に日本語の出來ない日本の小供を教へたことがある。この子のお父さんは可成地位の高い外交官で、お祖父さんも全じく外交官で華族に列せられてゐる人だ。この子供は日本語はほんの片言だけで毎に英語を用ひてゐる、即ち私はこの子に英語で日本語を教へたわけだ。この子は言葉も英語だが、考方も英語流だ。日本海軍の海戦の畫を見ても、『勝つてゐる方はブリテッシュ、ネヴィ、負けるのはジャーマン、ネヴィだ』と言ふ。陛下の御寫眞をみても、『キング、ジョージ』と言ふ。勿論英語を喋るから、考方も英國式になつたとは早断は出來ない。心理的にみて複雑な因果關係があるに違ひないが、とにかく言葉が思想を左右する力を相當に持つてゐることは否定出來ないと思ふ。

京城に育つ小供達も言葉が崩れて来るにつれ、考方も變つて來はしないかと思はれる。吾々は小供達の爲にもつと言葉を大事にしなければならぬ。

大浦貫道師主宰

「心の友」

南米倉町二二六

◇おもひ出草

北 漢 山 人

○昨今『噂の人』になつてゐる東京商議會頭藤田謙一君、この人は、壯年時代京城に住み、朝鮮印刷の前身日韓印刷會社といふのをやつてゐた。

○こんなに榮達しやうとは、誰も考へてゐなかつた。

○氏が初めて東京へ出た頃、一夕瀧澤、馬越、和田(豊治)、藤山(雷太)その他五六の大先輩と晚餐を共にする機會を得た。その時和田氏が誰か、「藤田君、君は、精力家だといふ話だが、一體どれ位の精力があるのか」

○酒ア〜として答へたさうです。『關西の小説家渡邊霞亭は、七人の妾を蓄へ、自轉車で、一日一人づつ訪問してゐるさうですが自分は、一日で全部を慰問することが出来る。法螺でも何んでもない。仕事の上に於ける精力もこれと同一。まア實地にこの藤田を使つて見て下さい』

○この自薦廣告が、ウマツ効を奏し、以來トン／＼拍手で、引立てられ、また自ら運命を開拓して行つた。

◇聞くがまゝ

三 木 一 彦

○京日社長の松岡正男氏は、青森縣八ノ戸の人で、その生家は、同縣屈指の豪農……一ヶ年の小作料何千石といふ物持たさうな。

○この間本山大毎社長の一行に随伴して來た某氏、「だから、現地位に戀々たる人ぢやないヨ。浪

【四二】

人しても、松岡君は、ゴルフのやれる身分でネ」

○本誌の寄稿家木浦の福田有造氏は、この夏入城した時、「どうも新聞社長を押しつけられさうでビク／＼してゐます」とあつたが最近の手紙に、「いよ／＼進退谷まり、餘儀なく承諾のハメになりました」

○木浦新報及び光州日報の社長に就任したのである。

秋十句

工藤武城

新 酒

新酒かもす八束垂穂のほりかな

長 夜

長き夜や父の朱入れし書を讀みぬ

枝 豆

枝豆をつかむ將軍虎鬚あり

露

露うけて秋送るべき句を書かん

秋 蟪

捕たれどそつと放ちし秋の蟪

紅 葉

碧層々一はけべにの紅葉かな

木 枯

こがらしや秋の名残をふきけらひ

芋

親いもの子芋を連れて里歸り

渡 鳥

お前一人か連衆は無いか渡鳥

白 菊

白菊や金屏幪として大廣間

近 事 漫 評

生まれて始めて大臣となる。『おとどは、目下上氣し給へり』

同

使用人の月給の上前をハネるが



近事漫評

犬養翁

犬養木堂氏といへば、改進黨の名士で、その前半生は、藩閥及び自由黨を、攻撃することに依つて盛名を成したものである。

その犬養氏が、政友會に、合流したのさへ、天下の一大不可思議なのに、今は、推されて、その總裁となる。二ツ返事で、受諾に及ぶ。夢に夢見る世の中とは、このことであらう。

地下の大隈、板垣、星亨等……蓋し開いた口が、塞がるまい。

同

犬養氏が、千里の駿足なるは、世間皆知るところである。

彼の攻撃力の旺盛なることも、政界の悉く知るところである。但し彼は、古への名馬……。その用ゆべきは、三十年の昔であつた。

博物館のマンモスの骨を引き來つて、何萬年前の榮華を語るものは、誰ぞ。

腕と腹

床次と、鈴木と、相對つて、何故總裁を決め得なかつたか。お互に、赤心を披瀝して、譲り合ふことが出来なかつたか。

腕の喜三郎、遂に腹の喜三郎でないか。

松田拓相

松田拓相、「朝鮮に政務官なし總督以下皆事務官である」と喝破し、物議を醸す。

彼やもとく非常の上人間……

生まれて始めて大臣となる。「おとどは、目下上氣し給へり」捨ておけ。

田中大將

田中義一大將の卒去は、意外であつた。

近來政友會を繞つて、いろくの不祥事件頻發す。多分痛心の極コ、に至つたのであらう。

政治家として、臺灣の首班として、大將のやつたことは、大體落第……。いゝところは、殆んどなかつたといへやう。

但し個人としては、トテモ好人物。その存在は、世の中を明るくするに効用あり。もう暫らく生かしておいても、いゝ人であつた。

滿天下の漫書人、標準人物を喪ふ……。

官吏減俸

現内閣は、いよく官吏の減俸を斷行するさうだ。

我々は、現内閣の無能無策に、いよく以て、呆れ返るの外はない。これ使用人の飯の數を、一杯づゝへズらうとする窮策でないか。智計これ以上に出づる能はずとすれば、その無能、無能、眞に憫むに堪へたりといはねばならぬ。

陸軍は、半減してもいゝだらう。富豪に別荘税、庭園税を課せぬのは、政府の手落であらう。全官吏の飯の數を、一杯づゝへズらうより、何故に今の官吏を、三分の一、四分の一、整理し去らないのか。

それでも官廳能率は、低下するものではない。政府の企劃し得る分野は、廣大である。官吏減俸の如きは、拙の拙なるものである。この一事、現内閣の無智無能を表明して、寧ろ悲慘といふべきである。

同

使用人の月給の上前をハネるが如きは、これ明に弱いものイヂメである。

現内閣が、果して至誠奉公の熱意あらば、かの軍閥を敵として、正面より大決戦すべし。陸軍は、これを半減しても、毫も差支ないではないか。

無藝無能

凡そ現内閣のなすところ、新規事業全廢、繼續事業繰延。而して官吏減俸……。唯だこれ「出すものも出さぬ」といふ吝嗇一天張でソコに何の藝能も、何の智恵才覚も、毫もないではないか。

在鮮官吏

政府の減俸案は、在鮮官吏に向つて、最も大きい脅威を與ふるものである。

政府は、その本俸の外、加俸をも削り去らうとしてゐる。政府は朝鮮の事情などには、全く盲目らしい。

官吏減俸は、役人の生活の彈壓のみでない。京城の町の如きは、明に役人の俸給を資源として現存するものだ。政府がこれを斷行せば、朝鮮の不況は、言語に絶するものがあらう。

總督府の巨頭で、職を賭して、政府の反省を求むるものはないのか。在鮮幾萬の部下のために、敢然起つものはないのか。

遂に撤回

政府は、遂に減俸案を、放棄することだ。ヘタに執着したら、確なことはあるまい。濱口さんも今後は、せいゝ人間學をやることだ。アンタの一本調子は、全くハタから見居られない。

# 堀出物語

徳野眞士

(朝鮮鑛業會)

【四四】

が、森氏と何れが早く着眼したかは別問題として、純鑛賞家として現はれたのは森氏が第一人者であらう。従つてその所蔵品は優秀完全なものを網羅して居る。

森氏は黙々として此仕事を完成した。今や氏は「會寧燒け先づこの程度のものだよ」と安心して蒐集慾が消滅して居るらしい。だが今日迄の森氏は人知れぬ苦心と犠牲を拂つて居る。先き頃死んだ骨董商の長谷尾氏は、森氏のために幾度か會寧に往復した。しかも會寧で相當な壺を掘り出し、京城にかへつて森氏に喜んで貰ふのだと旅宿の一室で其の壺を撫しながら突如として長逝したぞうだ。此の話を傳へ聞いた森氏は、故人の意圖に感激して遺品の競買には相當に盡くしたらしい。

森氏が之れ丈に會寧燒に熱心であることは、同じ銀行に居り、しかも陶器に非常な趣味を有する有賀頭取さへ之を知らぬ。「森君がそんなに良い品を持つて居るか、何にも言はぬよ」と呆れて居る。

會寧燒の特色は一言にして盡くせば素朴である。その釉薬はべつたりと分厚く流れ、文様には殆んど技巧なく、薬の流るゝに従つて自然に文様を成して居る。へら目は痛快に渦巻いて其處に何等の邪心もなく成るがまゝの形を成して居る。寒國に適する如く概して厚手のもの多く、其盛灰火にかけるため底部には釉薬が施してない。森氏愛蔵の『すゝ風』の茶碗の如き、一見恍惚として一種名狀すべからざる爽やかな感に打たれる。

今一人の所蔵家は大村友之丞氏である。人に見せぬと針付けの函に納めてあるのを四五十點拜見したが何れも立派なものである。

## 探幽の一幅

これは内地での話、しかも大分昔の事であるから、こんな話を初めたら數限りもないが、京城の骨董商人に「何か面白い堀り出し話はないか」と訊いたら「こんな話がある」と語り出したものである種は聊か乾枯びて居るが簡単に御披露しておく。

以前大阪城の表支關に、狩野探幽筆の名畫が衝立にしてあつた。誰でもすぐ眼につく場所であるから、大阪に於ける上流紳士はみな此の繪には少なからず親しみを感じて居つた。然るに何處をどうしたものか、多分大掃除の時にでも餘り古いで處分したものか、此の有名な名畫が場末の屑屋に埋れて居つた。知つてか知らずか、或る店の番頭が金貳圓五拾錢でも屑屋から買ひ取つた。それをまた骨董屋が聞きつけて金貳百圓でも買つた。其處に東京からの商人が来て更に貳千圓でも持ち去つた。

此の話は大阪市中にパツと廣ろがたつた。貳圓五十錢が貳千圓になつたと云ふボロイ話と、一方には大阪城の名畫がどうして民間に出たかと云ふ詮議、いろ／＼な意味で有名になつたが、納まらぬのは大阪土着の上流紳士連中である。我々の大阪城に在つた名畫を金鏡の爲に東京に奪はれたとあつては大阪人士の名折れである。これは

何とかして奪還策を講ぜねばならぬと、二三の人々が相談の上東京の所有者に交渉すると、先方も案外物の判つた人で、折角のお話ですから、貳萬圓でお譲り致しますせうとの事。御好意はありがたいが貳萬圓では持合せが、少し不足するので、一寸御猶豫をと大阪に歸つて一同に相談すると、貳萬圓位の金に尻古垂れたとあつては耻の上塗りである、早速買ひ取らうと十余人の人々が金を醸出して名畫は無事に大阪に返つた。一同其の畫を床に飾つて祝宴を開いたとの話。つまり貳圓五拾錢が一ヶ月以内に二萬圓になつた話であるが何處迄が眞實であるかは無論私の知るころではない。

## 會寧燒

會寧燒が問題にされ出したのは、數年來の事である。淺川伯教氏が李載冕氏を指導して今も現に製作して居るが、私の云ふ會寧燒はそれではない、時代は左様古くないかも知れぬが今燒きたてのほや／＼とは何處かに異つた味ひを持つた古い會寧燒の事である。

恐らく、此の會寧燒に始めて着眼したのは殖産銀行の森悟一氏であらう。尤も淺川伯教氏は朝鮮全體の陶器に造詣淺からぬ藝術家で自ら其の製作に没頭する位の熱心さであるから、充分にその價値を認識して居ることは云ふ迄もない

# 留置場の思出

森 二郎

(京城日日新聞社)

我々の大阪城に在つた名畫を金錢の爲に東京に奪はれたとあつては大阪人士の名折れである。これは

自ら其の製作に没頭する位の熱心さであるから、充分にその價値を認識して居ることは云ふ迄もない

である。人には見せぬと針付けの函に納めてあるのを四五十點拜見したが何れも立派なものである。

◇ K駐在所の留置場では板の繼ぎ目を這ふて來る師走の夜風に、一睡も出來なかつたが、S警察署に移されてからは余程楽になつた。

S警察署の留置場はS地方法院支廳の拘留場を兼ねて居るので、S警察署の留置人も検事局の未決囚も、一緒くたにぶち込まれて居た

留置人には寢具が給與されて居ないが、未決囚は夫々差入れの毛布寢具を持つて居た。私のぶち込まれた第二房には、獨立運動の陰謀に加擔して捕へられた朝鮮の青年が二年半も、そこで未決囚生活を營んで居た。彼には眞綿のたつぷりした立派な寢具が差入れられてあつたので、私は其夜から早速其裾に滲り込ませて貰ふ光榮に浴した。

監房には件の青年と私の外に、窃盜が二名、詐欺が一名、二十圓の罰金が納入出來のため勞役に服して居る男が二名。それに酒の上の喧嘩で縁戚の老人を蹴殺したと云ふ可細い殺人犯が一人、都合八人が八疊程の板の間に雜居して居た。崩れ懸つた朝鮮壁を距てた木格子との間にある土間の通路を、監房係りの警官が靴を脱いで足音を立てず絶へず往復して居る。司法室から寺の縁の下を行くような腐れ板の廊下を二三へん曲りくねつて、そこへ連れて來られたのであつた。驛から邑内迄一里近くも

歩いた筈であるのに、汽車の響が聞へて居る。天井際にひつ付きそらな高い處に小さくあいて居る鐵棒の窓から、薄い夕陽がのぞいて居る。窓の外は野か耕地らしく、風のあるのに梢のざわつく音も聞へない。

◇ 大正七年の十二月二日の事であつた。此留置場に入る内地人は私を以て嚙矢とする相で、差入屋の辨當にも内地人用の準備がなく、私は白飯と生卵丈を漸くの事で二日目から許された位であつた。

田舎の留置場に厄介になつた人の一番印象に残るものは便器の事である。八疊敷きの板の間に八人の雜居である。格子際に座を占めたものは兎に角として奥側に座つたものは、鼻先きに置かれた此の便器の臭氣で惱まされるのである。然かも夕刻一回捨てに行く便器も朝方迄には一ぱいに溢れて床の上に汚水が流れ始めて居る。寢靜まつた枕邊で聞くに堪へない用便の響を立てられる時などは、耳を擁ふて輾轉反側せざるを得ない慘めさであつた。

三日目の黄昏に、三人組で十錢を奪つた強盜が一人入つて來た。續いて賭博が三人、都合十二人の入監者である。そこへ以て來て午後八時頃になると放火嫌疑の女が一人檢擧されて來た。七つからある監房が孰れも満員なので、其女

を入れる獨房がない。と云ふて男女同房と云ふ事は勿論出來得ないので、第六房の留置人を各房に分配して、其女を第六房へ收容する事となつた。其結果私の房には更らに三名の入監者が殖へて來た。合計十五人の留置人になつた譯である。

◇ 私は横になる事の出來ない不平よりも、先づ第一に便器の追加を係官へ申出でた。けれ共一房に一つ切り準備してない便器であるから、追加すべき余裕がないと言ふのことに拒絶された。八人でさへ朝迄保たれない便器である。十五人の留置人が一回宛の用便を節約しても、汚水の溢れ出る事は免れない結果である。私は尻癖の一番悪い勞役と詐欺に一晚中禁便の嚴達を申渡した。

◇ 四日目の黄昏に勞役の二名が足の指の股に五分程の巻煙草を挟んで房に歸つて來た。獨立運動が早速寢具の綿の中から燐寸を探し出して火を點じた。持ち込んだ二名が三服宛つ吸ふて順々に一服宛つ廻し呑んだ。最後の一服が強盜に廻る頃火は消へてしまつた。もう紙も煙草の粉もなくなつて了つたのであつた。強盜は大きな聲を立て、途中で二服吸ふた詐欺に喰つてかゝつた。其聲を聞きつけて監房係りが飛んで來た。一同を廊下へ引き摺り出し一列に整列させ、いち／＼口の息を喫いで歩いた。『此野郎ら、皆吸ふていやがる』右の一番はしに突立つて居た吸い損なつた強盜から始つて一人々々火の出るような横ビシタを張られた。私は當初から一服も口にしないかつたのであるが、左の端に並ん



で居たため任復右左の頬に二つ見舞はれて苦笑した。

◇

五日目の夜中に一騒動が持ち上がった。大男の方の窃盗が隣りに寢て居る年若い殺人犯に對して怪しからぬ行爲に及んだと云ふのである。怪しからぬ行爲は既遂であるか未遂であるか、判然しなかつたが、中途になつて始めて氣がついたと云ふ、殺人犯は間の抜けた聲を立て、之をわめき出したのであつた。勿論係官が飛んで来て又

方を叱りつけ其夜は事なく済んだが、翌日朝食が終ると窃盗と殺人は司法室へ呼び出された。結果がどうなつたか……。

京城に廻した身許紹介の回答が漸く六日目に到着したので、私の間もなく司法主任の前に呼び出されて、

『警察で疑られるような行動をしちやつまらんど、こんどは體を返してやるが、今後氣をつけんと君も馬鹿を見るぜ』  
何んだか譯の判らぬ説諭を喰ふて

# 追悼歌

梶村正義  
(城大醫學部)

會隣人東拓社員故村原氏臨終

謹而茲錄追悼歌

「カンフル」を射せども眠は細くなりつ死する男をたゞに看て居つ

若き妻は死する夫の苦むに今はすべなく抱きつゝ居り

堪へ難き苦みなりしか葡萄酒をこぼみて飲まず彼は死にけり

## 登北漢嶺

岩松の根を踏み分けて登るかに松葉毛蟲に足刺されけり

かへりみれば夕燒空に岩の峰三つ並びてそばだちて居り

秋の日は暮れそめにけり山の塚に石人形はたゞに立てりき

すたれたる南瓜畑の土くれにかたむきてさす秋の日のかけ

【四六】

釋放される事となつたので、怪しからぬ振舞の結果は、それつきり判らずひに終つて了つた。

どんな事を疑られたのか、どんな事に今後氣をつけなくてはならぬのか……第一何んのため六日も拘留されたのか……「應詳く訊ねて見よ」と思つたが、吸ひ損なつた強盗が「つ、吸ひもせぬ私が往復二つも横ピンを張られた事を思ひ出して、それもやめにして司法室を出た。

窃盗と殺人が眼をむいて係官の前でわめき合つて居る。京城行の汽車の汽笛が寒い青空に響いた、多らしい空になると私はいつもの警察署の留置場の事を思ひ出す。

### ◆不思議な縁

漢 江 漁 郎

○犬養木堂翁、政友會の總裁となる。……翁を湯河原の保護先に訪ふて、政友會を代表して、總裁受諾を懇請したのは、幹事長の森格君である。

○縁といふものは、實に不思議なものだ。……今からざつと二十一年支那の第一革命の當時、木堂翁は、遠山滿翁と相携へて、彼の地に遊んだ。その時森君は、三井物産の天津支店長で、年齢は三十そこ。だが、その接待振といひ幹旋振といひ、實にキビ／＼したものだった。木堂翁感心して『オイ遠山君、アノ若い男を、一生商人で終らすのは、惜しいノウ』

○春風秋雨二十年、料らざりき一人は總裁、一人は幹事長。『先生、實に不思議な御縁で御座りますノウ』

# 支那青年の手紙

支那一青年としての私に對する近信である。

全文を通じて支那式の觀察眼か

# 支那青年の手紙

田村直一

(東亞法政新聞)

私には一人の支那青年の知人がある、知人といつても或る事業に携はつてゐる時の部下である、彼は近來、生かじりの日本語と片假名を解し時々卒直な所感を寄するのである。

目下旅順の某商會に勤務してゐるが不思議に義理堅い男で私に對しては支那一流の敬語である大人を以てしてゐる、私も彼にだけは大人の積りで時々小言をいつてやるのである。

が、最近彼から一本突込まれた様な氣がする、即ち近信に曰く。

(前略)日本人悲鳴あげる、ソレ氣が速いあるナ、私日本新聞見る、話判るある、官吏減俸問題近頃やかましいことある、政府慌てる、國民野次馬ある、日本人支邦人見るチャンコロ云ふある、馬鹿にするあるナ。

支那人日本人見る、日本人チャンコロあるナ、田中内閣支那人恐れるあるかソレないある、濱口内閣支那人悦ぶあるかソレないある、日本人その時々勝手理屈言ふ近頃日本人理屈澤山ある、度胸ないことあるナ。

支那年から年中戦争する、官吏悲鳴あげるあるか、國民悲鳴ソレ何時あげたある、あつち追はれるこつち来る、こつち追はれるあつち行く、あつちこつちソレ行つたり來たり一向構はんある、國民一人一人、一人前力量ある、どこ行

く同じある、ソレ皆大支那ある。政治家軍人年中喧嘩する戦争する、ソレ國民知らないある、政治家する、戦争軍人する、百姓農業する、商賣人商賣する、苦力働く金澤山儲ける、みんなく仲々強情あるナ。

金子すくない少し喰べるソレよろし、澤山ある、ソレ溜めるある支那四百餘州見るよろし、酔ッ拂ひどこに一人ある、皆眞面目ある仲々働くあるナ、悲鳴あげるないある。

日本人生意氣ある、金子ない聲澤ある、一人強がる度胸ないある月給下る女房子供十殺すあるか意氣地ないある、ソレ支那人馬鹿にする資格何處にある、世界一等國ある文明國あるソレ洋服着る金様眼鏡かける自動車乗る、藝者買ふ賄賂取る聲澤する、何一等あるか恥づかしいあるナ。

大人、私心よく知るあるナ、私親日ある、排日支那人ソレ悦ぶある、私腹立つ大人手紙書くある大人ソレ見る怒るよろしくない、新聞書くよろし、これほんとに、日支親善あるナ。

私此頃日本語よく判る、日本文大分上手なつたある、これ大人お蔭ある、多謝多謝ある(後略) 大體以上の通りである、此の男の所感果して現代の我世相に的中してゐるや否は改めて論ずる必要もあるまい、彼は只彼の直感せる

支那一青年としての私に對する近信である。

全文を通じて支那式の觀察眼から割り出したのであることは間違ひないのであるが、簡単に支那人の變言として葬り去るには忍びない、多少なり共我々日本人にして尻こそばゆい點がなければ幸ひだと思ふのである。

## ◆劍道風聞記

北漢山人

○ツイ二三年前まで、警察官練習所に、面白い御老體がゐた。名前を荒木樂山といふ。モウ七十を眼の前に眺めてる先生。

○本職は、劍道師範であるが、さう強くない。一二級の若者に面をとられたり、突きをいれられたりする。『先生、先生もタイシたことありませんネ』、『コラッ……馬鹿言へ、俺のホントウの力量は、眞剣を持つてからだ。のう皆の衆、諸君は、劍道だ。ワシヤ劍術ぢや』

○禿げ頭を、ビシ／＼やられても、満面汗を流して、『まだ／＼まだ／＼』

○朝鮮を罷めて、東京へ乗り出した。格好な年輩だ。風呂敷が大きい。トウ／＼吹き當てた。今度國士館大學と聯絡をとり、大日本劍道大道場といふのを、五萬圓で建造した。先生ソコで、由比正雪のやうに、威儀嚴然『皆の者……この上の慾には、ウフツ、ワシの頭にのう、ふつさりとした毛(總髮)が欲しいワイ』

# 思想に就て

關本幸太郎

(京城 中學校)

吾人日常の行爲たるや、或は風俗習慣等によりて之を行ふもの、或は思想の系統より流れ出づるもの等、種々の區別あり、就中思想上の根底を有する行爲は場合によつては世に狂浪巨濤を巻き起し、時に大事の成敗を決する上に深く關係を有することあり、我國の明治維新、佛蘭西革命、さては露國最近の變革等に想到せば蓋し思ひ半ばに過ぐるものあらん、世界戰爭に於ける獨逸の失敗の如きも亦此類に屬すと斷せざるを得ず、茲に於てか思想の研究と其善導とは重大なる意義を有す、之に任すべきものは學者、教育者、宗教家又は特殊の文藝家等なるが其の組織的根底的の責任者は實に教育者なりと言はざるべからず、教師は教壇の上より天下を支配すとの語あるもの故なしとせず、想うて茲に到れば深く責任の重大なるを感ずると共に、身の微力を思ひて自責に堪えざるものあり。

今や我國民は物質方面に於て二重生活を爲しつゝあるが如く、思想の方面に於ても亦二重生活を爲しつゝありと喝破し得べし、蓋し我國固有の國民道徳と新來思想との相對立するありて、我が人心は一面此の國民道徳に執着しつゝ又新來思想が深く人心に喰ひ入りつゝあればなり、こゝに新來思想とは自由と平等とを基調するあらゆる思想を指して之をいふ、試みに

右兩者の傾向を比較對照すれば略ぼ左記五種の相違あるを認むべし

- 一、家族主義と個人主義
- 二、國家主義と世界主義
- 三、差別主義と平等主義
- 四、精神主義と物質主義
- 五、有神論と無神論

かゝる思想上の二重生活によりて精神的不安に苦しみつゝある現代に於ては深く之を考慮して思想上向ふべき所を定め、信念の確立に努力する所なかるべからず。

想ふに元來人には新奇を求むる心あり、又舊を喜ぶ心あり、此の矛盾せるが如き二傾向は相待つて秩序的進歩發展の原動力となるものなり、新を慕ふの心は進歩の基なりといへども單に新しきをのみ追はば破壊墮落を來し、却つて退歩の因を爲すこと尠からず。單に舊を喜ぶのみならば一切の進歩は茲に斷絶し、舊態依然として停水終に腐敗するの恐れあり、此二者適當に按排して初めて堅實なる秩序的進歩を爲すものなり、所謂道は中庸に存す。

茲に於てかあらゆる思想に就てよく研究を重ね、探るべきは之を探り棄つべきは之を棄て、同じく探るにしても如何なる形式に於て我に適用すべきかを探求し、以て其方途を誤らざるを期すること、最も緊要の事項に屬す。此點に關しては我等が祖先に對し滿腔の敬意を表せざるべからざるもの

【四八】

あり、何ぞや、儒佛二教に對する過去の業績是なり、吾人は新來思想に對し我が祖先に耻ぢざるの覺悟を要す。

秀でゝは萬丈の富嶽となり、滲えては千濤の琵琶となり、霞しては萬葉の櫻となり、薫りては熾亂の菊となる、これ我が天地の大觀なり、君は慈に民は忠に、よく無比の國體と道義とを維持發達せしめ、眞に天壤と共に無窮なるは我帝國の特色なり、之に培ふに外來の思想を以てして益其の精華を發揮するは我神州男兒の光榮にあらずや、彼の徒らに左傾思想に趨きさては徒らに反動思想に驅らるゝものを戒しむ。

## ◆來觀者の數

三木 一 著

○朝鮮博覽會には、内地から約くも三十萬のお客様は來るだらうといふ豫想は、全く外れた。

○關釜連絡船の成績に依ると、九月十二日から、十月十五日までの團體人員が、僅に六千七十名に過ぎぬ。假に個人來遊者を一萬と觀ても、大邊な大當テ外れた。その他博多航路、對馬航路等の乗客を合せても千名には足るまい。

○十月十六日以後、尙ほ半月の日子があるとはいへ、大勢は、これで判る。

○原因は、現内閣の緊縮風に崇られたのか。それとも内地の人々が、朝鮮に魅を有たためのか。或はこつちの宣傳が悪かつたのか。

○尙ほ、朝博は豫定の入場人員はあつたとしても、市中に金の落ちた高の、存外尠なかつたことは事實らしい。

## ◆今昔はなし



# 荳白里海岸

## 金剛山探勝スケッチ

### 長谷井市松

(朝鮮銀行)

北 漢 山 人

「あればなり、こゝに新來思想と  
は自由と平等とを其調するあらゆる  
の思想を指して之をいふ、試みに

と、最も緊要の事項に屬す。此點  
に關しては我等が祖先に對し滿腔  
の敬意を表せざるべからざるもの

はあつたとしても、市中に金の落  
ちた高の、存外妙なかつたことは  
事實らしい。

### ◆今昔はなし

○昨今、配所の月を見物中の小  
川前鐵相、馬鹿に若く美しい夫人  
を持つてゐることは、世間周知の通  
り。

○この若夫人は、もと京釜線某  
驛員の細君だつた。子供も、一人  
位は、ある筈である。それを『下  
給官吏の妻は、つまりませんネ。  
どんなお年寄りでもいゝ。自動車  
に乗せて、三越へお買物にやつて  
くれるやうな人に行きたい』、と

う／＼家を追ッ出て、熊本の實家  
へ歸り。同縣の某代議士のとり持  
で、小川氏へ後妻に行つた。

○これから以後、小川さん俄に  
金が好きになつた……とは、某舊  
友の感慨談。

○往年日比谷燒打事件當時の小  
川氏は、貧乏と、潔白で、有名な  
ものだつた。『小川君もえへが、  
何分あの貧乏ではネー』と惜しま  
れる程の平吉さんだつた……。が  
時勢は、流轉し、人間は一變して  
しまふ。

午後五時半に、私達は濫井里  
から自動車に乗つた——サラバ金  
剛の山々よ、一萬二千の峰々よ！  
と私は心に念じつゝ、獨り車中に  
瞑想を逞りした。

いつしか車は海岸に沿ふて、山  
裾の里道を疾走して居た。靜な秋  
の午後、長汀曲浦に打寄する波も  
靜であつた。山裾に咲きこぼるゝ  
白や赤の、くさ／＼の花も美しか  
つた。長筋はイ、港であつた。が

ソレにもまして、其後方靜に水を  
湛えた長筋浦の姿は、更に私の心  
を惹いた。ソコにはまだ青々とし  
た蘆荻の間に、點々と人影が動い  
て居た。山を背にして廣い芝原が  
あつた、穩かな景色だ、牛一つさ

へ見られなかつた。コンナ處に家  
でもつくつて、一生を終つたなら  
ばと——こんなことをも思つて見  
た。

荳白里の海岸——ソレはまた誠  
に寂靜そのものゝ如き海岸であつ  
た。濱に沿ふ草原で白衣のオモニ  
ーが、心もち上半身を曲げて、二  
人の子供と何か叫んで居た。もう

黃昏頃であつた、日は赤々と西方  
山の端に沈まんとして、海面は何  
とも形容し難い、複雑な茜色の美  
に輝いて居た。何と云ふ崇高な、  
詩的な、聖かな場面でソレがあつ  
たろう。

夕べの黙禱！ソレは誠に神聖其

ものゝ姿ではなかつたか——私は  
曾てミレーの名畫にソレを見た、  
泰西の映畫にソレを見た。

黃昏が海面を罩めて、靜寂が泌  
々と迫つて居た、私の心は斯うし

た空の色、海の輝き——いや秋其  
ものゝ心の中に、融け込んでしま  
つた様な——或は又同化し去つた  
やうな、淋しみと云はんか、嬉さ  
と云はんか、將又懐しさと云はん  
か、一種の銘狀し難い心の状態が

私の全体を占領し盡した様に思は  
れた。恐らく一生の間、私の秋の  
思出として、此荳白里海岸の生け  
る名畫、黃昏の黙禱が、胸奥深く  
刻み込まれることだらう。ソレは  
併し眞個の、秋其ものゝ姿、秋其  
ものゝ心ではなかつたらうか。

(四、九、二八)

本場銘仙  
毛糸各種

ち、ぶや

本町二丁目  
(電話五〇五番)

# 社會完成

山本吉久

(南大門小學校)

吾人の生活は社會をはなれて爲し得るものでない。常に社會組織の一員としてのみ愉快な生活を具現し得るものである。そしてこんな判りきつた事は、云ふ事が愚の骨頂かも知れぬが、それを云はねばならぬ現世相が嘆かほしいのである。

吾人が眞に社會人として社會生活を爲すのならば、社會心の要諦を掴むことが第一でなくてはならぬ。その社會心とは共存共榮である。萬人の福祉増進である。然るに小我に捉はれて利己的巧利主義に墮するものだから、自己の生活が常に社會組織に大きな穴をあけて行く事になつて、結局社會完成なんか學問上の言葉に過ぎないものになつて居る現状ではあるまいか。

過日京城で全國教育大會が開催された時の事である。朝鮮以外から六百人の申込が來てゐたのに、目下の緊縮政策の崇りを受けたのか、眞の出席者は三百人内外であつた。その大部分は無届の欠席で事務を執る公僕には大層の迷惑であつたが更に割當の宿屋に於ては直接損失を招いたであらうと同情してゐるのである。吾人は此の狀況に直面して教育者同人の心事の不準備に驚いたのである。

時恰も總督府諮問案「初等教育に於て公民たる資質の養成上特に留意すべき點如何」を議するに當り吾人は教育者各自の此の態度は

公民教育を司る資格に欠くる所あるを喝破したのである。萬事は人である教育の事尤も然りではないか、公民の育成は社會共同生活の要諦を體得した人格の教養にあるのであるからには教育者同人の反省を先とすべきものだと思案したのである。

印度の先哲釋迦は常に心象世界の美淨化を唱道してゐる。「先づ自分の心から」、之が釋迦大悟の道程ではあるまいか。吾人が利己を離れ社會共存の大義に立脚して生活するならば奉公犠牲は何の苦痛のないばかりか之が普通事であ

## ◆博覽會閑話

北 漢 山 人

○朝鮮鑛業會では、その會報十月號を、朝鮮博覽會號とし、スバラしいものを出したので、頗る好評を博してゐる。

○が、これがため編纂者の徳野氏は、朝博に通ふこと、實に二十日間及んださうである。

○その或る日のことである。會場で、徳野氏に、ドスンと突き當つたものがある。が、別に氣にとめず、或食堂へ這入つて、食事を済し、サテ勘定といふ一段になつて、『オーヤ』、奇麗に紙入を抜

【五〇】  
る、菩薩道とは即ち之である。淨土の建設といひ社會の完成といひその言葉は違ふが同一事業の異名に過ぎないのである。蓋し佛教は社會完成の理念の宣傳だともいひ得るであらう。

世は滔々たる物質文明の波浪に漂ふてゐる。世人は利己的活動に盲目である。社會完成のこゝろつかしい哉である。といつて放つて置けない所に生れたのが、教育上に所謂公民教育の高潮となつたのである。之も善い事に相違ないが社會完成の爲にもつと鑿を大にして叫びたいのは大衆的教化である破壊されない心の建設である。之にけどうしても宗教心の啓培が必要と思ふ。不斷煩惱得涅槃といつてゐるが、親鸞にだまされた積りでペンや算盤を持ちながら宗教を味つて見たらと思ふ。之がほんとうの社會完成への基調ではあるまいか。

かれてゐるのである。

○再び會場に出ると、頻りに體をすりつける男がある。御座つたナ……。しかし今度紙入がないので、悠然と構えてゐる。……夕刻戻つて、金庫の扉を開けやうとして、氣がつくと、『オーヤ』、鍵を失敬されてゐるのである。

○紙入は、まアいゝ。金庫の鍵にはヘコタれたさうである。

○が、徳野氏に従ふと、『一日のうち、二度搦撲に遭つたのはまア俺位のものだらう』……夫人ブツと噴き出して、『御自慢ですか……』、『さうとも、二度まで組はれるのは、我輩がよく、資本家に見へるからだヨ』

て雪白の山がだん／＼紫色に染まり、森などの黒い影は一層暗らく

に於て公民たる資質の養成上特に留意すべき點如何」を講ずるに當り吾人は教育者各自の此の態度は

めず。或食堂へ這入つて、食事を済し、サテ勘定といふ一段になつて、『オーヤ』、奇麗に紙入を扱

か……』、『さうとも二度まで組はれるのは、我輩がよく……資木家に見へるからだヨ』

## トルストイ原著 高架索の囚人

(その一節)

瀨野馬熊譯

(朝鮮史編修會)

### 十

山の麓から頂上に達するのは余り困難な事とは思はれ無かつたがユリアヌはまた、さほど容易い事とも考へなかつた。殊に彼のやうに踵に足枷を引きずつて居ては——彼は頂に達した時に、其處に座つて邊りを見廻した、と南の方に小舎の後に當つて、二つの小山の間に一條の道が走つて居るのを見た、そして羊の群が其れに沿うて歩いて居た。道のずつと下の方には他の部落が有り、此の部落の後に他の山が有つた——ユリアヌが坐つて居る所の山よりは余程峻嶒な——それから又其の山の後に他の山が有つて、二つの山の間に黒ずんだ森が挟まつて居た。遙か向ふを眺めると其處には又高い山が有り、其れが後へと重なり合つて遂に視界から消え失せてしまふ迄續いて居た。其の中の幾つかは、雪を以て蔽はれ、頂上はまるで白砂糖の塊りの様に眞ツ白に見へたが、その内の一つは圓錐形の帽子の様な形をして、他のものの上にならずと抜き出て居た。東と西には何ちらにも山が峙ち、其處此處

に部落の煙が山と山との谷合から立昇つて居るのをユリアヌは見たりユリアヌは思ふに、

おれは敵國の真中に居るのだ。

彼はそこで向き直つて他の方面を眺めた、と、遠い所に小さい川が有り、其の河の側に一つの村落が有つて、綺麗な花園に取巻かれて居た。二、三の婦人は其の洗れの岸でリンネルの切れを洗つて居たが、此處からは頗る遠いらしく、其の形は非常に小さく見へた。

此の村の後に又山が峙ち其の遙かあちらに二、三の森が擴がつて居た。二つの山の間には青々とした平原が横はり、それれ地上を掩へる煙の様に見えた。この景色を眺めて居る内に、ユリアヌはふと彼がロシヤの城壁に入營して居た時はれと同じ様な位置から朝日の昇るのを見たことの記憶を呼び戻しそれが彼の方角を定めるに非常な助けと成つた。

彼は彼の面前に見る平原中にロシヤの城壁が有るに相違無いと考へた。

それで彼はもし彼が逃走するなら其の方向へ進まねばならぬと思ふた。時に太陽は最早沈まんとし

て雪白の山がだん／＼紫色に染まり、森などの黒い影は一層暗らく成つて来た。霧は谷合から昇り初めたが、ユリアヌがロシヤの城壁の有るに相違無いと思つた平原は反つて夕陽に照らされて非常に明かに見えた。若い士官は彼の目を廣く見張つて、煙突から昇つて居るのではないかと思はれる様な二三條の小さい煙柱を熱心に見つめた。彼は愈々其の方向に城壁が有るに相違ないと云ふ自信を固めたが、此の時、日は既に暮れかゝつて人々は皆彼等の家に歸り路を急ぎ、家畜は壁を立てて頻りに鳴いて居た。

同伴の小供は先刻から度々部落に歸らうとユリアヌにせがんだ。併し若い士官は彼が見つめて居る此の景色から離れるに忍びなかつたが、餘り小供にせがまれて詮方なく終に彼は歸る事に同意した。

彼は獨言を云つた。  
私は私の取らねばならぬ方向がやつと分つた。

彼は明日の夜明前に彼の企てを實行しようとして決心した。其の夜は丁度闇夜で逃走するには非常に都合がよかつたが、運悪くも驢駟人等は其の夕方遠征から歸へつて来たこんな時には彼等の規則としていつも喜ばしげに大騒ぎして歸るのが例であつた——殊に彼等が家畜を澤山奪略し得て歸つた時に——所が其日、彼等は何の獲物も持つて来ないのみならず彼等は彼等の仲間の一人を失つた。其れは彼の赤髯の兄弟の一人で、この者は小戦闘の内に殺されてしまつたので有つた、で彼等は非常に興奮して居たが、先づ何よりも此の死人の葬式を営まんとした。



# 街頭雜觀

加藤昇夫

(京城地方法院)

五月のすがすがしい或る朝のこと。

崇四洞の宅から出勤の途すがら昌慶苑の停留場で電車を待合せて居ると、昌慶苑の入口に十五六人の十歳から十五六歳までの學生が一本の麻繩にとりすがつて、日和ぼつこをして居る文鳥の群のよう

のいじらしい姿を見せられて、すつかり萎ませてしまつた。四人の盲目が象に觸つて見て、各自が味得した觸覺から象に對する異つた觀念を基として喧嘩した昔話は、喜劇の一場面しか觀念されなかつた私が、今この盲目の子供達——觸覺を通じて動物を觀察しようとする子供達をまざまざ目の前に見ると、喜劇どころか深い慘ましい悲劇としか考へられなくなつた。

八時少し前であつたから開苑まで待合せて居るのだらう。それにしても麻繩につながつて居るのは何故だらうとよく注意して見ると子供等は皆んな盲目である。學生帽をかぶつて居る所から察すれば盲啞學校の生徒でもあらうか。見えない眼を稍々うつむき加減に、浮世の音響に聞耳を立ててでも居るものか、未知の世界に聽覺を驚かす樂しみを待つてでも居るものか、不具者に伴ふ陰慘の影を宿す顔色にも、何となく物淋しい柔和な晴々しい影が往來して居るかに見える。

朗らかに鳴いて居る小鳥の聲をきいて可憐の姿を想像し、すどく空をつんざく鶴の聲をきいて瀟洒たる像を畫き、河馬や虎、獅子や豹の唸聲に心を萎ませるものは心に像を畫く素地を持つて居るものにのみ許される相像の樂しみである。

故障でも起したのか待つて居る電車は中々やつて来ない。

一臺の自動車が大醫院の方からけたましい警笛を鳴らして通り過ぎた。子供等は一樣に首をかしげ聞耳をたてて瞬間に飛去つて行く自動車の響を追ふて居るらしいやふやくにして電車に乗つた私は、肌觸りのいゝ朝風にはずんだ

生れながらにして盲しい、幼年にして視界を失つたこれ等の子供達には全く許されぬ禁斷の實である。

は、肌觸りのいゝ朝風にはずんだゴム毯のようにふくれあがつた心を『昌慶苑を聴きにゆく子供達』

記憶を持たぬ像を聽覺によつて畫くことが、如何に困難であるか吾々には容易に相像されぬ程難事ではなければならぬ。そこには畫かれぬもどかしさがあり、形作られぬ悲しさがあるであらう。繪を畫いて畫かれぬもどかしさは、對照物を靜視することによつて更に畫き得る餘地が残されて居る。現在の努力は將來の樂の源泉である。勇氣も出る、樂みもある。努力は

【五二】

樂しみを約束し得るのである。然し畫くべき對照物を心に持たぬ盲目の子供達は如何に畫くべく努力しても遂に達せらるゝ筈がないのである。それでも畫かざるを得ない業を持つて居る。河馬が唸る。鳥が鳴く。嫌でも應でもそれ等の像を畫くべく無理しひにされる。そしてその果ては畫かれぬもどかしさを味はされる。盲目の悲しさを新にさせられなければならぬことにならう。

達し得られることに努力しなければならぬこの子供達は、それとも知らず、樂しそうに期待を持つて居るらしい。然しその期待はすぐに裏切られるに違いない。そして新しい盲目の悲しさをしみじみと味はなければならぬだらうと考へた私は、『昌慶苑を聴く』ために連れて來た學生の引率者の心なさを悲しいものに考へた。

## ◆ 師匠逃亡記

三木一彦

○大邱の朝鮮民報社長の河井氏は、野球、ゴルフ、圍碁、將棋、何んでも御座れの剛のモノ。

○殊に圍碁や、將棋の先生をつかまえると、『まアもう二三日く』で、どうしても歸へさぬといふ癖がある。

○この前も、或る圍碁の先生が『どうぞモウ、御放免下さるやうに』、『イヤ成らぬ』、『でも、家内が、この通り病氣で』、『成らぬく』、『なら、どうすればよろしいので』、『チョッ、判らん人ぢやノウ。拙者が初段になつたら、即刻放免ぢや』

○師匠その晩、逃亡しました。

# 空氣枕

岡部 駿 策

(京 取 市 場)

短い旅行のために初めて發動機船と云ふものに乗った。きやしやで優美でそして輕快でおまけにぼん／＼と鼓の様な音を吐き乍ら磯傳ひに波を排して行くのを眺めて幾度かその客となることを望ましく思つて居たがさて乗つて見るとさうでなかつた。

私は初秋の午後の日光を浴び乍ら海氣を心ゆくまで吸はうと思つて甲板適當の場所を探して見たが見つからなかつた。後甲板には炊事場と便所とが雜居して居た。前甲板には泥だらけのロープがのた打ち廻つて居た。中央部は一面船艙となつて居てメリケン粉と滿洲粟の袋が山と積まれて居た。仕様がなから私は船室にはいつた船首の船室は二段になつて居た上段の議員に失望した私は薄暗い中から發散する異様な臭氣を突いて下段に下りたが、こゝも議員に近かつた。黒い支那人と白い朝鮮人に占領されて居た。内地人らしいものは一人も居なかつた。私は大きな風呂敷包を枕にして寢をべつて居る支那人の兩脚を整理して若干の餘地を作り胡坐をかいた。そして空氣枕を取り出して吹きかけた。話はこれからである。

ゴム毬のようにふくれあがつた心を「昌慶苑を聴きにゆく子供達」

の努力は將來の樂の源泉である。勇氣も出る、樂みもある。努力は

たら、即刻放免ぢや」  
○師匠その晩、逃亡しました。

光を放つて皆の視線を集むるに充分なものであつた。

突然横合から皺だらけの手が躍りて來た。はつと驚いて顔を上げると周衣のおぢいさんが手を伸べながらにぎり寄つて來る。早口で話しかけて居るらしいが分らない多分一寸見せて呉れと云ふに相違ないと合點して渡してやると、老人膝頭にあて、兩手で力一杯に押へて見た。肩一つ動かさない眞面目さでやつて居る。やがて枕は平ふくらまして吹きかけた。枕はだん／＼大きくなつた。老人は變心地をためすべくころりと横になつた、すると枕は急に平たくなつた。老人は起き上つて又吹き直した。そして何やら話かけるので螺旋を廻して閉めてやると、一つ大きく領いて拳で二つ三つ叩いて見て又横になつた。頗る御意に召したらしく思へたが、やがて彼は又起き上つて空氣を抜きにかゝつて、そしてその同伴者である孫と見ゆる三人の子供の前に差し出した。子供等も各老人と同じことを繰返した、老人は頗る愉快らしく子の所作を眺めて居た。子供等が吹いたり抜いたりするには相當の間間がかゝつた。丸で玩具にして居るらしかつた。

た。そしてものゝ二十分もたつたかと思ふ頃船室を覗いて見たら、私のさんらんたる空氣枕は老人の後頭部にあてがはれて居た。老人は何の屈託もなささうな顔して眠つて居た。

私はさすがに船室に突入して空氣枕を奪取するを躊躇した、そして滿洲栗の山の上に寝をべつて蒼穹を仰いだ。

私は其の後時々此の老人のことを思ひ出す。

◇うき世草紙

三木 一彦

○志岐信太郎氏は、今度東京方面で、六百萬圓の大工事を請負つた。久し振で、アノ人も、復活するだらうとの評判である。

○大邊金放れのキレイな先生ぢやさうな。そこで、『オイ、志岐は、いつもどる／＼』と、寄ると觸はると、この話。

○その志岐氏は、冬季中は、いつも漢江々畔の、アノ別宅で暮らす。何んしろ東南が、アノ通り開けてゐるので、市内よりは、十度近くも暖いといふ。が、池田長次郎氏や、田代才八氏に依ると『何それア地下に、我等の温泉あるからぢや』

○そこで、温泉話になるが、湯の出ることは、確實らしい。唯だその湯の筋を突きとめるのに、大邊な金が懸るので、御一同『オイ困るのう』

○何の困ることがあるか……。

牧山氏、青柳氏、池田氏、田代氏……。實に多士濟々。早くお湯を沸かして、我々を入れてもらいたい。



# 所感の一片

井上 要二

(京城女子技藝學校)

来て見れば聞きしに優る富士の山禪迦も孔子もかくやあるらむ来て見れば聞くより低し富士の山禪迦も孔子もかくやあるらむ少々文句は違つて居るかもしれないが右の意味の古人の二句がある眞に世の中の事を能く物語つて居るやうに思ふ、すべて物は考へやうによつて異なつて来る、其の物自体は同一であつても見る者聞く者の氣分によつて變化するものである、故に私共は富士山を富士山其物として正しく見、其高さを正しき高さに見るやうにせねばならぬ、釋迦如來の教、孔子の教に對しても、皆其れを正しく解釋し、其の人物をも正しく敬慕することが私共の道徳を進むる所以であると思ふ。

る、何んとなれば私共は心なくして大宇宙を見ることは出来ない。禪を學ぶ本、無門關の中に趙州和尚の有無の語がある、其の有と無といふ正反對のものを一致させ同一のものと思へ得る時に禪の妙味が悟られるとのことである、私共は小我に甘んずるとか大我でなくてはならぬと思ふも、是れ冒頭の句の如く實體は同一物であ

【五四】  
るものを、自己が種々異様に思念するより異様のものが生ずるのである。

私は常に思ふて居る、私の一生は五十年活きても百年活きても長きと思へば長しとも思はれ、短かしと思へば短しとも思はれるが、私が五十年活きたるか百年間活きたるか言ふこと、尙一步進んで考ふれば斯の世に生を受け人と生れ日本帝國の一臣民と生れ來ること大自然より見れば歴然として定まれる運命と考へねばならぬ。斯く感じ來り、何事も大自然に引きつけられることを思ふ時、不平もなく苦痛もなく一日くを快感を持ちて送ることを得、幸福之れに過ぐるものなし。

## 近時ユウモア片々

片岡喜三郎

(元町小學校)

榮根譚の中に、心體便是天體、一念之喜景星麗雲、一念之怒震雷暴雨、一念之慈和風甘露、一念之嚴烈日秋霜、何者少得、只要隨起隨滅、廓然無得、便與太虛同體。と言ふのがある。心體便是天体の句實に妙味ある句である、私共は心をつて天と一致させる事に因つて世の中に安心して生きて行く事が出来ると思ふ、天体といふか天といふか大自然といふか大宇宙といふか、言葉は多數あるが其意は大體同様であると思はれる。私共の心体即ち精神は大宇宙の一部であると思ふことも出来、或は私共の心其自身が大宇宙であるとも言へ

△夫の子に人間の赤ん坊の遺物を着せて捨兒と見せかけた洒落けたつぶりの男がある。警官が捨て兒と聞いてかけつけて見ると麻の葉の初着の中からワンク。その添手紙がふるつてゐる。

『俄かに政府の緊縮でやがて月給の一割を差し引かれる由、とてもお前を飼つて置かれぬから捨てる。怨むなら緊縮した男をちらめ』

△何へでも口を出さねば氣の済まぬ女で今度の減俸問題にも口を出した折紙付の面々は左の通り。

市川房枝、山田やす、岩内とみえ、吉岡彌生、加藤たか、金子しげり、高橋千代、山田わか、三輪田繁子、長谷川時雨、嘉悦孝子。

△減俸反對の鼻息が殊の外すさまじいので濱口首相が面喰つたといふ顔付は近頃の珍景であつたらう。

△小泉遞相が生れて初めて茸狩をやつたといふ。『笠の開いたのよりもやはり緊縮した松茸の方が姿もいし、味もいし』との仰せそれから『娘にもこの緊縮したや

つをとらせたならさぞ喜ぶだらう』はなるほどいゝお父さんである。

△圖つたものがある。情死法として新規軸を案出したもので心中史を

ふのだからたまらない。△朝博で黄金の雨が降つたかど



ると思ふことも出来、或は私共の心其自身が宇宙であるとも言へ

まぬ女で今度の減債問題にも口を出した折紙付の面々は左の通り。

姿もいゝし、味もいゝ」との仰せそれから『娘にもこの緊縮したや

つをとらせたらさぞ喜ぶだらう』  
はなるほどいゝお父さんである。

△信州は松代で茸狩の騎りに何とか食堂の二階で底ぬけ騒ぎをや

つたので二階の底がわけて四名は軍傷を負つたといふ。二階の底の抜けるほど騒ぐのも底のぬけるやうな二階を平気で酒の坐敷に使ふのも可成りのんきではある。

△箱根の旅館で煙草ゴールデンバットの煎じたのを飲んで情死を

圖つたものがある。情死法として新規軸を案出したもので心中史を飾るに足りるものだが惜しいことには不成績で未遂に終つた。

△行進曲全盛の世の中だが、大阪のバス行進曲といふのに次のやうな素破らしいのがある。

『長い月日の思ひがとゞき晴れて通ふや銀のバス、てなもんやないかないか白銀バスよ』  
これをバスガールに歌はせるとい

ふのだからたまらない。

△朝博で黄金の雨が降つたかどか知らないが人間の下の口からはき出す黄金水はお陰で毎日五十石の増加だといふ。是け計算外の儲けもので長柄杓の大將大こぼし。

△朝博特産物の秀逸は菓子賣店で賣り出した『板おこし』といふのに『紙屑せんべい』。も一つ即賣で奇抜なのは女看手の持ち合せの一品。

△鳩山春子さん『朝鮮婦人は純朴だ』とおつしやる。なるほど春子さんは賢い。春子さんでなくてはこんことはいへまご。

◇うわさの噂

漢江漁郎

○京城府の圖書館長だつた山本貫一君、この間の大陶汰に、パッサリやられてしまつた。

○役人放れのした、洒脱な、太ッ腹な、至極受けのいゝ人だつたが……。

○この山本君の官歴が面白い。といふのは、年数の経つほど、段々月給が減つてゐる。そして、擧句の果が、パッサリだから、山本君の茫然たるのも、無理はない。

○最初は、囑託で三百圓。次ぎが京城商業へ廻されて、二百五十圓。圖書館へ戻されて、二百圓……。それでも悠然たる男で、『君近頃はどうか』、他人の安否を心配してゐるが、ソコを、不意に、パッサリ。

○友人連から、『君、近頃はどうか？』と、アベコベに訊かれて流石の豪傑『ム、ムーン』  
○役に立つ先生だ。何とかしてやらう』、目下種々奔走中。

私だちの詩

甕の會同人

奉 祝 津田 零 閃

提灯貰つて来て燃え残る臘燭の子が眠つてしまつた。

寮から出て来て松の下ジャケツで吹かれる。萩餅母と家居の空晴れて居る。

森内 柚 男

河原乾もの山里暮れなオモニよんどる。岩山の高き碧き空となり。

藁にうつもれてゐる家の國旗たち。

早川 草 仙

墓梅なんぞ傍の父が居つたの座布團ぬくみの。朝霧こんな濃い鳴子縞ふ畑の中。

岡本 鯛 潮

くもり日通る草のそれく實をもち。霧のたゆたう岩が根や野菊など。

岩淵 山 與 水

子と来てし朝の雫のキンキラ熟柿。崖下土の苔しめる鳳仙花はぢけ。

# 新聞人秘話 (三)

楠 五 郎

(大阪毎日支局)

【五六】

本紙原稿

十二月號締切り

第一回 十一月五日

第二回 十一月十日

## ◆博覽會珍話

漢江 漁郎

○朝鮮博覽會で大人氣を博した子供の汽車の一乗客、パノラマ、トンネルの虎の所に差しかかると思ひ降りて一目散に逃げ出した。大聲を揚げて救ひを求める有様、係員が駆けつけて見ると顔色蒼白驛長室に連れ込んで話を聞くと、その人は子供の時に虎にあつてやつと逃げ歸り、所謂虎口を脱がれた經驗を持つたことがあるので、本ものの虎が出たと早合點したと分かつて、本人も安心、一同も安心。結局大笑ひになつたとのこと。威鏡道の住人であつた。

○同じく、三人連れの乗客、一廻りして驛長室に飛び込み、『奉天方面行きと云ふから乗つたら行きついた所がもとの京城驛ぢやないか、怪しからん、奉天に行く汽車に乗せて呉れ』と大した抗議。驛長始め驛員一同が色々と説明を加へるが、中々合點せず、殆ど一時間もかかつて、やつと博覽會特設の汽車だと云ふことが分かつて幕となつた。それ以來白石さんは『奉天方面行き』とだけ的美辭を發揮せぬやうになつた。今でも此時許りは實に閉口したと鐵道方面の一ツ話。此の三人は江原道の住民。

## 英雄創造

『原敬全集』といふのが最近出版された、後藤新平が力を入れその物故されて後、腕の喜三郎がつくり上げた全集なのである、この全集を見てゐて思ひ出したのは原敬暗殺事件當時の新聞の報道振りである、それは確に一大事件であつた、一般讀者には露天の霹靂のやうに強く響いた、零號活字や初號活字を並べて『政界の巨星隕つ』とか『大天才白頭宰相覆る』とか、あらゆる最高級の各種各様の神秘的文字が誇張的調子をもつて羅列された、しかも揃ひも揃つて東京驛頭の場面、光景を戯曲化する事にとめ、ある限りの形容詞を並べて白頭宰相の生涯を超人的に英雄化し神秘化したのであるしかし原首相はその生前においては決して世間の衆望を一身に背負つてゐた人でもなく、寧ろそれは反對に可なり多くの敵を持ち暗殺される瞬間まではどの新聞紙も『普通選挙の敵』としてその政策を極端に批難してゐたのである、それが一たび刺客の手に覆れるや全國各紙が一齊に『巨星』とか、『偉人』とか『英雄』とか漠然と

した最高級の魔術的意味を多分にもつ言葉をもつて讀者に一種の催眠術的效果を及ぼさないでは置かないのである、原敬の場合はその後の政友會の總裁の政治的技能なり統率力なりより考へると多少普通の人間に卓絶した才幹とか力量とかを持つてゐたものとも見られるが、新聞の『英雄創造』の傾向はまだく一二の例にして止まらない、心中してなくなつた女を『美人』といふやうに神秘化し戯曲化する事において日本の現在新聞はその第一人者であるといつてよい、近い話では前首相田中義一が自分の妾宅で病死した、それで『新聞は死んだ』『おらが』から何かの非凡さを求めてやまなかつた遂に『人間田中』とかいひ出して世俗的に超越した『サーベルのおもちゃ』のやうな田中をでつちあげた、無論棺を蓋うて評定まるのは人間の憤ひである、ところがこの棺に至るまでの時、處、などが多分にこの評を左右する、同じ狭心症で逝つても、御大典の時あまゝ、たはれておれば『おらが出中』も今少し英雄化されたかも知れぬ。

つる月の炎

すよ。往復文書もあげられて居るはずです。何しろ假拂三千圓とい



# ある朝の談片

## 笠神志都延

(京城日報社)

朝おそろしく早く訪ね來たれる客の話——小學校もロクにをはらぬといふ人が學校組合議員とかいつて教育のことを論ずる。何、違見は學校教育の程度にはよらぬのだが、といつて土方の小頭、すし屋の亭主、古かね屋の主人がどんな箔を付けたつて高が知れたものではありませんか。

×

客の話はつづく——公職に就けば有名になる。有名になつてから悪事をはたらく。悪事をはたらくため公職にありついたらといけねばかりの態度である。だから世間をアツといはせる疑獄事件が起るのである。無名の士にも悪事があるしかし疑獄事件は起らぬ。公職を利用して、有名に乗じはしないからである。要は無名の内に金はもうけ置くべきこと、有名になつたら金はただ散するのみ、ただ散するのみです。

×

次に訪ね來れる客の話——タツタ三百圓で以てアレだけの利權をせしめやうとする。それは無茶といふものである。初めから分り切つて居る。にもかかはらず支店長はまなじりをあげて居る。そうして本社の重役は話せぬ、彼等の判コさへすめばアレだけの利權來投立ちどころなるものとこぼして居る。ところが何ぞはからん本社の重役は三百圓でアレだけの利權

をせしめやうとはテンでおもふて居らぬ。よんど有望なものならばいよく業が開始されたはなに三百萬圓で買ひつづしてしまふといふのだ。いはば支店長は投機は當らぬにせよ三百圓、當れば三百萬圓だといふのである。本店重役は當らぬかも知れぬ投機に三百圓ポツチを捨てるは名譽の問題であるしかし三百萬圓の投下正攻法を取らんにはと、かく考へたのである本支の智愚相距る一萬倍。

×

客の話はつづく——役人にもいろ／＼あつて案外もろいのがあるダラシのないのさへある。しかしアノ人はいけない。何しろあらゆる方略を以てせまつたんだがどうしても落ちない。そこでアノ人と同學の友人を伴ひ來り御一緒に御飯をといふ處まで運んだ。むろん効なし。次ぎの朝官舎を襲撃したのだが、それは法令の許さぬところといつて聞かぬ。そればかりか相手が親友なればこそ法令の適用は最も狭い解羈で行くより外はありませんといふのである。敵ながらあつばれとはこれですね。それがまた始中終ニタ／＼笑ひながらの御詫言なのだからアノ人はえらいとおもつた。あの何ですよ、アノ人の減俸しない方がよい。

×

次に訪ね來れる客の話——むろんあつた。二度もやられて居ま

すよ。往復文書もあげられて居るはずですよ。何しろ假拂三千圓といふのが面白くない。あすこに假拂の必要なんてありつこないんだ。でもね、本人は絶対にそんなことはないツて青くなつて居ますよ。イイエほんと、青くなつて辯解して居りますとも。それがまたシルクハットをかぶつて式場へ出て來たから堪らぬ。どうもそのへん臭氣紛々といふおもひがしましたねしかもおもひなしか奴さんのフロツク姿に影がない様な氣がした。

×

次に訪ね來れる客の話——先だつてはうかがひましたそうで、感激してましたわ、仕事を見付けて下さる外に御世話をかけるのはもつたないづつてね。でもつまりませんわ、長くなるかね。おながひに氣まますが出るんでせう。これはいけないと思つて押へやうとするんですけど、そうするとなほのことむか／＼して來るぢやありませんか。あたしたち見たやうなのはやつぱりダメね。到底しらすとさんのやうには行かないわ。けさもね、おこるんですよ。それはおまへのきものぢやないか、おまへが注文したきものがおまへのところへ届いただけぢやないかつてね。だつてあなた、うちものが着るきものに、あなたもこなたもないぢやありませんか。それともあの人、あたしにも一度かせげつていふのか知ら。だからあたし、そ、いつてやつたわ、あなたあたし出ればいんでせうツてねするとあの人おこつたわ、おまへにはおれの心が分らない、男子の理性的概念といふものが分らない、いいえいつたわ、理性的概念つてあたし前の晩それで散々講羈を聞



かされたんですもの、よくおぼえてるわ。で下のつまりきものはあたしが着るものだから、お代はあたしが正面すること、といってしやうばいに出ることはいけないといふことに、タツタ今きまつたわけですの。あの人どうすればあたしにおたからの工面がつくとおもつてるんでせう。

◆編輯室閑話

北 漢 山 人

○歌人の角田不案氏から、本社へ抗議が来る。理由は、十月號の角田氏の歌の中に、脱字が二ツあるといふのである。編輯子頭を掻いた。

○丁度ソコへ徳野氏來訪……  
『今、斯ういふ譯だ』と話す  
と、『さアそれだ、近頃どうも誤脱が多いやうだ』……ホイ味方と思つたり、案外であつた。ソコで編輯子も悲憤に及び、十月號の角田氏の原稿を出して見ると、どうだ。……脱字どころか、そんな字は、元來原文にないのだ。

○『さアどうだ』と、徳野氏に喰つてかゝると、詩人は、少しも驚かず。『由來、我れくと來ては、高興に乗じ、諷誦、朗詠しつゝ筆をとるから、時々そんなこともあるサ』

○何人と皆さん、詩人といふものは、都合のいゝものですネ。

○その後、京城驛で、角田氏に會ふ。『この間は……』といひかけると、『オット、待つたく。徳野君から聞いた。僕ア時々あれをやる』……詩人は、まことに悠然たり。

古樂器を見つ

市 山 盛 雄

(野田醬油支店)

石樂器うては音するおのづから一つ一つの音色をだまれり  
○ 棒をもて搗きて音出す樂器なり搗けばどしんと音たてにけり  
○ がらがらと竹のさざむをかきまわし音色をたすも古き樂器は  
○ 樂器庫の中にこもりていにしへのひとのすさびをおよしつけ  
○ くさぐさの素朴なこれの樂器も踊りほけむいにしへのとは

◆東京風聞記

千 駄 山 房

○井上藏相は、雅號を『清溪』といひ、少々俳句もヒネれば、書も書くのである。『どうです、この頃は、俳句の方は』、『ワン君僕ア雅號を改正してネ』、『へへ、それアまた、一體どうして』、『まア見てくれ給へ』、書いて渡したのが『井上元峰』

○訪客、開いた口が塞がらず。『へへ、げんぼう々々々……ムワン、なゝるほど』

○或る人『閣下、しかしこれは同名があります。アノそれ禪宗の北野元峰師……』といふと、『知

つてるく、當分あの禪宗坊さんの心得で、我輩もやる』  
○ゲンボウが、メツボウ臨えたらし。

○減俸問題の立役者仙石貞老、晝飯は、鯉井と決めてあつて、何十年來實行。しかもウイスキーをチビリ。『閣下、それは何んです』、『ウ、これか、これアお茶代り』

○『閣下のお元氣には、我れ々々若いものも、實に敬服します』といふと、『ワン、この通り手足は、ピン／＼してゐる。だが、年をとると、トカク役に立たぬ所が多うてらう』

大 書

神山 盧

をやる」……詩人は、まことに悠然たり。

同名があります。アノそれ禪宗の北野元峰師……といふと、『知

をとると、トカク役に立たぬ所が多うてのう』

# 收穫

久松前平

(京城 日報社)

北漢山人

## 神仙爐

△本誌寄稿家としてお馴染の片岡翳翠氏が年來の隨筆をまとめて『神仙爐』と題した一本を娑婆に出した。

△打ち見るところ装幀挿繪など一風も二風も變つた趣である。それが頗る素人見く茶氣を帯んでゐて面白い。

△内容は随分と廣い色々の方面から取材してゐる。社會面の種々相、紀行、營養方面、などから盃や徳利や陶器などの奇抜な觀察もあれば琴三味線の説明もある、酒の坐が割合に多い。殊に甚の價値觀は雄篇である。

△こんな材料を凡てユウモア化して滑稽と諧謔と諷刺とが縦横無盡にあやなしてゐるところはお手際である。

△片岡氏はユウモア人として一家をなしてゐるが根が教育者であるからあまりきどい場面には突き進んでゐない。これが勿怪の幸でこの『神仙爐』は大眾向きであるとともに家庭の讀みものとしては勿論男女學生などにも好讀みのたるを失はない。

△特にこの一本を朝鮮の青年諸君に切におすすゝめたい。それは國語といふものゝ眞の趣味本意といふものはかういふ文章を讀んでみないと會得されないものであるからである。

△とにかく近來にない面白い本である。讀んでゐる内についつり込まれて微笑、咲笑を禁じ得ない趣がある。

### 京

### 城

### 雜

### 筆

△秋もいよく收穫期になつて來た、我々も收穫に無關心で居れぬ秋なのだ、私け京城人でも地方人でも、今年のような大きな、そして意義のある收穫をなしたことはなからうと思つてゐる、それは朝鮮博覽會の收穫を云ふのである。

△博覽會について、千差萬別で色々の批評を聞かされた、しかし朝鮮二十年の歩みを、最も赤裸々に、最も眞面目に展示して呉れたことは誰れでもが異存のない事實であると信する、しかし其點に於ては大に當局者に敬意を表する一人でもある。

△入場者も内地始め各地から相當に多數に吸收することが出來た様に見受ける、それよりも朝鮮内の地方から澤山の見物團を集中し得たことが大きな收穫であらねばならぬ、善いことを勧めるのに遠慮があつてはなぬ、不親切であつてけならぬ、しかも極めて目立つて朝鮮婦人の見物者の多かつたことが喜ばしい、年輩も中年或は老人の多かつたことである。

△朝鮮の歩みに婦人の歩みが一番遅れてゐるのではないかと痛感される、その朝鮮で斯かる結果を與へられた事は、朝鮮全體の歩み振りを知らることが出來ると同時に、今後の十年乃至二十年、何百年の歩みを多少とも想像させられ、非常に心強く感ぜさせられたのが嬉しい。

△個人的には、殆んど音信不通であつた親戚を發見するやら、十年振りに親戚、友人に面會することが出來て懷舊談に花を咲かせたことなど、全く意外の收穫もあつた、期間中は何か彼とか非常に多忙を極めたが、やれ／＼となつて之等のことを考へると本當に愉快でならぬ。

△愉快な秋だ、多少の雑念、邪念も誘發された様だ、これから郊外に郊をひいて、大自然の教訓に接したい、そして崇高な收穫をも與へられやう。

### 化粧品金箱

三木一彦

○三越や丁子屋などへ最近顔を出した化粧品に、『金箱』といふのがある。金箱白粉、金箱水白粉、金箱クリーム……等々が、それぞれある。

○製造元で、餘り澤山つくらぬ代り、品質は、今の化粧品中で、第一等だといふ評判。

○一度使つたら、外のものは、二度と使へぬ……ともいはれる。本誌の女流愛讀者各位は、ま一度御試用下さい。

○この金箱化粧品の朝鮮總御元は、新芳本(南山町)の主八中原守雄君、『エヘヘ、これこそ天下一品です』と鼻高々……。



# 奈良

佐々木清之丞

(黄海道師範)

【六〇】  
の如く天女の如く、親しみやすく  
近づき易い。優しき奈良の山々、  
眺めよき自然美、人工美の調和誠  
に應しく、家は風塵の外に住して  
人も鹿も蒼樹の内にすやく眠つ  
てゐます。

## ◆合財ふくろ

漢江漁郎

○坂出技師といへば、朝鮮の土  
木界にとつては、忘れぬ人であ  
る。官を辭し、東京に閑居してゐ  
たが、昨年秋病歿し、目下門下後  
進の間で、傳記の編纂中である。

○ホンのちよつとした風邪で臥  
床し、そのまゝコロツと逝つてし  
まつたのだが、死期を豫覺したと  
でもいふのか、そのスゲ前、自ら  
墓地を選定して、墓を建てるやら  
藏書を東大へ寄贈するやら、かた  
みのやうなものを知人に贈つて來  
るやら……。『今から考へて見る  
と、どうも不思議だ』と、後進の  
人々は、口々にいつてゐる。

○ドコの町でも、一人位は、演  
説狂……一名『一言居士』のある  
ものだが、群山の有志赤松繁夫君  
は、その極端な例だといふものが  
ある。

○三度の飯より『一言』の方が  
好き。家業も何も放擲して、そら  
運動、そら陳情、そら説明……。  
群山を一人で背負つて、『何、タ  
イしたことはないさ』  
○昔は、大きい醬油屋たつたさ  
うな。

○尤も、斯いふのは、平壤の  
名物で、いざ鎌倉といふと、今も  
三十人位の『一言』は、ゾロッと  
集まるといふから恐ろしい。

夏季休業！ではあるが、しかし

かうした仕事は、私の休暇中の殆  
んど本業の仕事、普通の場合に勿  
論餘技餘業に相違は無いが、しか  
しそこが知情の衝突？、幾くら諱  
つたところが感情そのものは毫も  
割引はして呉れん、むしろ割増を  
するので。立秋が四日前だつた  
のにどうしてこんなに暑いだらう  
かうしたつまらん考へに暫し耽つ  
た私、再び勇氣を鼓舞して暑熱の  
中へと突進し始めたのです。忽ち  
にして脊中の溝は汗の川へツーツ  
ツーツと落ちては腰の方まで傳は  
る。額からの鼻からのも悉く合  
流の玉となつては靴の爪先へと點  
々落ちる。まあ旅の汗はかき棄て  
にませう、構はずに進む。私ば  
かりでなしに道行く人々は悉く汗  
じみてゐる。その人達はタオル  
で拭ふ、拭つたあとには塵が附く  
それで又々する。可愛相に顔の何  
れもが悉く眞赤です、人も喘げば  
自動車も喘ぐ。眞正掛値無し字面  
通りの厳しい残暑です。

道路を開いて舊都の發展策を講  
じよう、さすれば古都の舊蹟が台  
無しになる、縣廳側と學者側との  
衝突は最近の新聞に見えた様だが  
私は史蹟保存に熱中する人間でも  
なし、先づ衣懸柳の方へと歩を運  
び寄せた。知る人ぞ知るで、私の  
心は必ずしも青絲綠波に暑熱を忘  
れん爲では無かつたのです。幾度  
か植ゑ換へた、しかし由緒のある

柳、もう風に憐み雨に覆せて、葉

ばさながらに愁眉に似通つてゐる  
往年私の物した青年讀本にこの記  
事が載せてある。しかし水清澄と  
してあつたので、『いや池水は濁  
りてゐるぞ、清澄でないよ』と態  
々注意して呉れた人もあつたので  
す。今思出して事新しく受けた厚  
意を無視する考へは無い、が私の  
清澄といひ他の汚濁と稱する、實  
に視る人の主觀の相違に依るだけ  
です。私自身にも清澄即ち無色透  
明の表示では無かつたのです。今  
視ても私には決して汚濁の感じは  
起りません。私は何時までも  
前言固執のひねくれでは有りませ  
んが、氣分の表現即ち又そのもの  
であることをば、再言しておき度  
い積りです。でも白髪三千丈の流  
とは大分距離があることせう。

興福寺の五重塔三重塔眺むれば  
眺むる程、能くもかうした均齊調  
和が取れたもの、見上ぐれば見上  
ぐる程幾千萬層と無窮に高く聳え  
て、雲烟縹渺の裡にも幽にその絶  
頂が見られます。これ亦私の主觀  
でせう。  
春日神社の殿堂、善盡し美を盡  
しての壯麗華麗、しかしてそれ等  
が何れも樹樹蒼林の間に隠見して  
何とも形容の出来ん秀麗さ。土佐  
繪さながらなる三笠山、青丹よし  
奈良の都は耳聞目堵すべてに圓み  
があつて角立たず、崇峻峻峻の武  
士の風格を缺くが、圓滿豊頰慈母



ひとり言

永樂町人

木堂先生

犬養さんには、二三度お目に  
かつたことがある。すつと以前、  
母堂の逝去せられた折、田舎新聞  
の、社員の總代として、庭瀬(岡  
山縣下)の御本邸へ伺つたことも  
ある。

犬養さんは二男で、本家は、犬  
養當弘といふ兄さんが、繼いでゐ  
られた。

犬養さんの容貌には、妻味があ  
つて、容易に近づき難いものがあ  
るが、兄さんは、美男子の典型の  
やうな人で、その氣品、その水の  
垂れるやうな麗容、今もよく記憶  
してゐるのである。

二十五六年前の犬養氏は、スベ  
テが全く犬養式で、機鋒俊爽、當  
るべからざるものがあつた。

津山の或る劇場で、選舉演説が  
あつた。犬養氏が演壇に立つた。  
アノ凄眼で、満場をデロリ……  
一言も發しない。——場内の靜ま  
るのを、待つてゐる。——だが、  
氣早の聴衆は、承知せぬ。「オイ  
何かいへ」、「喋舌れ」、「犬養  
啞になつたか」、この時、トント  
卓を叩いた犬養先生、「啞とは、  
何んだ。諸君に選ばれて、四年間  
議場に列し、遂に一語も發し能は  
ぬものこそ啞だ。諸君、我輩を啞  
といふか。立石岐君を啞にあらす  
といふか」……立石岐といふのは  
これらの聴衆の擁立する反對黨の  
候補……。コ、に至つて、満場氣

を吞まれてしまつた。先生の演説  
の大成功に終つたことは、いふま  
でもない。

同

近ごろの新聞にも、犬養氏の逸  
事が出てゐた。

某建築會社と契約して、月賦で  
家をつくつた男、統を持ち込んで  
『先生どうぞ一筆……』『よし』  
といつて、即座に筆を執つたのが  
『月賦樓主人』

往年新潟の藝妓が、『先生、紀  
念です……どうぞ』、『これア何  
んだネ』、『私の腰巻です』、『  
俺も、うまれて始めてだ。よし、  
ソコへひろげてくれ』、題して曰  
く、『四時生春、餘香猶存』

こんな風で、一代の大家たるこ  
とは、まさにタシカだ。操持の一  
事に就ては、伊藤公も深き敬意を  
表して居られる(藤公餘影参照)  
唯だ今日は、何分にも七十有餘歳  
である。心配せざるを得ない。

仙石老

今度の減俸問題で、男を揚げた  
のは、仙石貢老でせう。

濱口内閣は、進みも、退きもな  
らず。舞臺のマン中で、唯だウロ  
くしてゐました。

薄汚い老八ですけれど、ソコへ  
現はれて、『シート、行けく』  
と引ッ込の汐をつけてやりました  
命からく退却……。殆んど老の  
一人舞臺のやうに見へます。  
老を『世間學指南』として、こ  
の内閣へ抱え込むことは、自他の  
ために、最も必要のことのやうに  
思はれます。

濱口内閣は、世間を知らぬのみ  
ならず、見たこともない先生が多  
い。老は、世間を囃んでゐるばか

りでなく、ペロツと嘗めてしまつ  
てゐる。ツイこの間も、こんなこ  
とがあつたさうです。

伊勢からの歸途、老は政友會の  
面々——床次、鈴木、中橋、望月  
——等々と、車室を一にしたさう  
です。右が床次、左が鈴木。する  
と老は、『オイ鈴木君、床次君、  
君らはヒドウ喧嘩しとるちうぢや  
ないか。ウン、見つともないぜ。  
俺ンとこへ來い。いゝやうにして  
やる』

『金魚』も、『腕』も、グーの  
言さへ出なかつた。

現内閣は、『渡世顧問』として  
のみならず、『政友會いふし係』  
としても、この老を珍重すべきで  
あらう。

高橋翁

現代の人物では、高橋は清翁な  
ど、最も好ましい風格です。

現代には、頼まれもしないのに  
乗り出して行つて、頻りに世話を  
焼いたり、口を利く性の人が、餘  
りに多い。しかも、風月の趣を解  
し、靜に自己を存養するといつた  
やうな人は、まことに妙い。翁の  
如きは、真に一世の高士といふべ  
きだらう。

昭和四年十月廿五日印刷  
昭和四年十一月一日發行  
本誌定價  
一ヶ月(二部) 四十五錢  
半年分 二圓六十錢  
一年分 五圓  
發行兼編輯人 松本武正  
印刷所 石川利夫  
京城府和泉町一七〇  
發行所 京城日報社  
京城府和泉町一七〇  
京城雜筆社  
電話光化門三〇六番

# 府内病院案内

(い ろ は 順)

旭町一ノ六  
今本醫院  
電本二八五二

本町二ノ九三  
一番瀬醫院  
電本四〇〇五

南山町一丁目八  
池田病院  
電本一二三四

明治町二ノ七五  
利根川齒科  
電本二八六七

黄金町二ノ一九八  
渡邊醫院  
電本八九四

明治町二ノ一〇五  
和田外科病院  
電本一〇五八

南山町二ノ六  
片山醫院  
電本一九五一

若草町三九  
金井眼科醫院  
電本一五五六

西小門町二一  
田中丸病院  
電光八八五

明治町二ノ七七  
中島病院  
電本三七八

永樂町二ノ八五  
植村外科病院  
電本二七〇

北米倉町九四  
京城婦人病院  
電本四八二

新町四  
安部醫院  
電本一〇五三

永樂町二ノ八七  
酒井婦人病院  
電本一八

南大門通二ノ一  
阪井耳鼻醫院  
電本六四二

吉野町一丁目九一  
木村醫院  
電本七二五

永樂町二ノ七六  
木戸齒科醫院  
電本四二七

旭町二ノ八  
瀬戸外科醫院  
電本二四九八

# 京 城 著 名 商 店 案 內

( 順 は ろ い )

洋 服 類  
濱 洋 服 店  
鐘 路 一 丁 目

新 高 麗 燒  
富 田 商 會  
南 大 門 通 三 丁 目

洋 服 及 附 屬 品  
富 田 屋 洋 服 店  
南 大 門 通 二 丁 目

本 場 銘 仙  
ち、ぶ、や  
本 町 二 丁 目

貴 金 屬、時 計  
大 澤 商 會  
本 町 一 丁 目

金 剛 飴  
龜 屋 商 店  
本 町 二 丁 目

御 料 理  
川 長  
旭 町 一 丁 目

時 計 直 輸 入  
田 中 時 計 店  
本 町 二 丁 目

御 料 理  
南 山 莊  
西 四 軒 町

標 準 時 計  
村 木 時 計 店  
本 町 二 丁 目

サ ク ラ 正 宗  
山 邑 支 店  
明 治 町 二 丁 目

和 洋 雜 貨  
藤 木 商 店  
南 大 門 通 四 丁 目

洋 服 及 附 屬 品  
丁 子 屋 洋 服 店  
南 大 門 通 二 丁 目

人 參、藥 品  
貴 生 堂 藥 品 店  
本 町 二 丁 目

洋 酒、洋 菓 子  
明 治 屋 支 店  
本 町 一 丁 目

百 貨 店  
三 越  
本 町 一 丁 目

吳 服 類  
三 中 井 吳 服 店  
本 町 一 丁 目

茶 及 茶 器  
青 々 園 茶 舖  
本 町 二 丁 目



誰でも直ぐ使へる

# 大谷和文タイプライター

が参りました

○和英 兩用    ○鞆 に入れて携行自由    ○字數二千四百外換自由

朝鮮中央總代理店

京城明治町一

櫻井秀專商店

電本園三〇〇二番

京報日報

每日申報

東京御來遊の際は  
御立寄り願ひます

フランス料理

イタリア料理

# 泰明軒

東京芝區新櫻田町一七

日比谷公園に近く  
議院には殊に近し

京城雜錄

(第百二十九號)

大正十三年一月二十九日  
昭和四年十一月一日發行

(第三種郵便物認可)  
毎月一回一日發行